



学習教育研究フォーラム報告書

学習教育研究

第1号

新潟大学 教育・学生支援機構
大学教育機能開発センター



新潟大学

まえがき

大学教育機能開発センターの業務活動報告書として、ここに、「学習教育研究フォーラム報告書『学習教育研究』第1号」をお届けします。

大学教育機能開発センターは、新潟大学教育・学生支援機構内において、教員の教授方法の改善・向上のための支援や研修の実施等を通して、学内FDを推進していくことを主たる活動目的としています。具体的には、授業改善プロジェクト事業、新潟大学学長教育賞選考事業、新大キャンパスミーティングの企画運営を進めるとともに、新潟大学新任教員研修(ワークショップ)および学習教育研究フォーラムを開催し、教員の教授方法の改善に資する研修に取り組んでいます。本報告書は、このうち毎年度の3月に開催する学習教育研究フォーラムの活動成果を、『学習教育研究』の冊子題名のもとにまとめたものです。大学教育機能開発センターをはじめ新潟大学教育・学生支援機構の各センターの活動の概要は、機構年報『自律と創生』にまとめられていますが、これには収めきれない具体的で実際的な活動成果が多々あります。このため、これらの活動成果を、あらためて、『学習教育研究』と題して発行するに至った幸いです。

年度末に開催する学習教育研究フォーラムは、これまで、その年度に新潟大学学長教育賞を受賞された先生方による受賞講演、同じくその年度に採択された5件前後の授業改善プロジェクトの成果報告、次いで、パネルディスカッションで構成されてきました。前2者は、優れた授業方法を顕彰し、教職員個人あるいは少人数グループによる授業改善を支援し、その成果を広く学内で共有化して全学的な教育の改善・発展につなげていこうとするものです。パネルディスカッションは、その時々テーマを題材にして、教育改善に対する意識を高めてもらおうとして導入しています。この第1号(つまり平成24年度学習教育研究フォーラム)では、時宜を得て、「主体的学習に転換する初年次教育を考える」のテーマとなりました。入学方針から教育カリキュラム、学位授与に至るまでの首尾一貫した学士課程教育の整備・充実が必要とされ、そのためには、まず、学生自身が主体的に学ぶ姿勢へ舵を切ってもら必要があります。そのエンジンの一つとして、大学学習法の役割がますます重要になってきています。全国的に、多くの場合、まだ受講スキルズ的な議論になっていますが、いずれは、学生が主体的に学びを考える、あるいは学び始める契機を与える学習スキルズへの展開が必要になってくると考えられます。この『学習教育研究』第1号が皆さまのお目に届き、そして教育にかかわるさまざまな改善、あるいは展開への取組みの一助になればさいわいと考えます。

平成25年10月

新潟大学教育・学生支援機構
大学教育機能開発センター
センター長 森井俊廣

目 次

I. 学長教育賞受賞者の授業改善	
1. 概要	1
2. 平成22年度受賞者	
1) 山内 健 「 デマンドに応える工学教育の実践 — 授業アンケートに基づく講義改善 — 」	3
2) 長谷川 雪子 「 〈マクロ経済学 I〉 授業改善の試み 」	7
3. 平成23年度受賞者	
1) 日比野 浩 「 〈志・情熱・チャレンジ精神〉 を持った教育 」	11
2) 長尾 雅信 「 学生の自発性と可能性を引き出す討議型授業の挑戦 」	18
II. 平成24年度学習教育研究フォーラム	
1. 概要	27
2. 学長教育賞受賞者の講演	
1) ホップ・アンニャ 「新潟大学におけるドイツ語教育 — 〈学習者中心の授業〉 の試み — 」	31
2) 飯島 淳彦 「ハイテク世代のローテク不足を刺激する授業を目指して」	36
3. 授業改善プロジェクト報告	
1) 北村 順生 「災害からみた地域社会の記憶に関する 大学間交流授業プロジェクト」	46
2) 柳沼 宏寿 「教育現場の題材開発と実践のフィードバックを 組み込んだ授業サイクルの構築」	63
3) 佐藤 亮一 「Gコード情報リテラシー科目のためのスマートフォン・ タブレット端末向けデジタル教材システムの開発」	73
4) 高橋 秀樹 「英語で学び、英語で発信する共同的創造的人文知」	77
5) 林 豊彦 「e-learning 英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト」	82
4. パネルディスカッション 「主体的学習に転換する初年次教育を考える」	
1) 企画の趣旨	89
2) 事例報告	
(1) 中東 雅樹 「初年次教育を起点としたレポート作成スキル向上の取り組み」	90
(2) 中村 和吉 「大学学習法 (スタディ・スキルズ) と連携・接続する 〈学びへの動機づけ〉 のための授業科目開発」	93

3) 話題提供	
(1) 西條 秀俊「初年次教育におけるキャリアセンターの取り組み」	97
(2) 加藤 かおり「初年次教育の全国動向と意義」	105
4) 参加の感想	108
あともがき	110

I. 学長教育賞受賞者の授業改善

平成 22 年～23 年

1. 概要

2. 平成 22 年度受賞者

1) 山内 健 「デマンドに応える工学教育の実践
—授業アンケートに基づく講義改善—」

2) 長谷川雪子 「〈マクロ経済学 I〉 授業改善の試み」

3. 平成 23 年度受賞者

1) 日比野 浩 「〈志・情熱・チャレンジ精神〉を持った教育」

2) 長尾 雅信 「学生の自発性と可能性を引き出す討議型授業
の挑戦」

1. 概要

1) 学長教育賞制度の趣旨

新潟大学学長教育賞は、教育改善に対する意識を高めるとともに、優れた授業方法および学習支援を全学で共有化することにより、全学的な教育方法の改善に資することを目的に設けられた。平成15年創設の「教育褒章」を発展的に継承して、平成18年度より「学長教育賞制度」として運用されている。候補者は、本学の専任教員の中から学生と教員が所定の推薦資料を添えて推薦し、選考委員会の授業観察・面談を通して選考される。原則として毎年1名を表彰することとしているが、平成24年度にいたる新旧制度通算10回のうち1名選考だったのは3回で、学長教育賞受賞者は13名に上る。これは、学生からの推薦数が顕著に増加し、その多くが甲乙つけがたい教育改善の実績をあげていることからきている。

以下では、平成22年度～23年度の受賞者が推薦され選考された教育実践上の理由を概括する。平成24年度の受賞者については第Ⅱ部1節と2節参照。

2) 平成22年度学長教育賞

2-1) 「基礎高分子化学」^{やまうちたけし} 山内 健 教授（自然科学系〈工学部〉）

この授業の特徴は、いわゆるオーソドックスな講義形式の授業でありながら、学生の授業への参加、教員と学生との双方向のコミュニケーションを重視していることにある。特に、「学生とともに講義を作る」という理念の実現のための具体的かつ合理的な工夫を積み重ねている点において、この授業における実践は優れた事例である。合理的な工夫には、具体的に、「本日のキャプテン」や質問役を指名する学生への役割の付与、パワーポイントの効果的な利用によるコミュニケーション機会の確保などが挙げられる。こうした工夫は、講義形式を主とする他の分野においても大いに参考になる手法である。また、学生からの推薦理由においても「学生の事情をきちんと考慮している」と挙げられているように、学生の学習の状況に焦点をあてた山内教授の授業改善の姿勢は、全ての授業改善の取り組みにおいて共有すべき姿勢である。

2-2) 「マクロ経済学Ⅰ」長谷川雪子 准教授（人文社会・教育科学系〈経済学部〉）

この授業では、専門的理論の伝授が、今日の学生の変化に留意し、不断に改善工夫された講義法によって効果的に実施されている。学生からは、300名以上の受講者の注意を引き付けることのできる「熱心な解説」や「非常にわかりやすい」自作のレジュメ、「学習意欲がわく」指導法、といった高い評価がある。このような評価は、長谷川准教授が今日の本学学生にみられる実情（受動的、大人しい、学力の低下）を真摯に受け止め、専門知識の伝授にとどまらず、学生の学習力や理解力を向上させることを目指して講義法を改善してきた結果といえよう。例えば、学生の予備知識や関心につなげながら、知識を伝授すると同時にど

のように学ぶか、問題への取り組み方を考えさせる。講義のレジュメは穴埋め式で事前に配布し、学生は、講義中は板書による説明と演習作業を通してノート作りやプレゼンテーションを行い、課外では多くの課題によって自己学習するように仕向けられている。

以上のような学生一人ひとりにおける学習効果をねらいとした教育実践は、学習効果のある学生参加型授業がどんな授業においても可能である事を示す優れたものである。

3) 平成23年度学長教育賞受賞

3-1) 「人体の構造と機能Ⅰ (生理学)」日比野浩 教授

(医歯学系〈医歯学総合研究科(医)〉)

本講義は、医学科2年生120名を対象とした階段教室での2時限続きの講義である。いわゆる大人数授業の1つであるにもかかわらず、その特徴として、次のことがあげられる。

まず、実物模型やコンピューターグラフィックス、音叉や木琴まで、視覚および聴覚などの学生の感覚をフルに使わせて具体的な理解をすすめる講義構成であること、パワーポイントのスライド資料への記入作業など学生の集中力をそらさない工夫や、階段教室でありながら机間巡視を行いつつ頻りに学生への問いかけを行うなど双方向の働きかけを重視した実践であること、講座として導入している「発言ポイント制」を用いた学生の授業参加への動機づけを有効に活用した取り組みとなっていることである。

さらに、こうした実践は、「日本をリードし世界を目指す学生を育成する」「理解できないことを学生のせいにはしない教育を行う」という日比野教授の教育信念や真摯に学生に向き合い共に歩もうとする熱意にもとづく活動であると評価される。

3-2) 「マーケティング論Ⅰ」長尾雅信 准教授

(人文社会・教育科学系〈技術経営研究科〉)

本授業は、大人数授業(116名)でありながら、マーケティング論という科目の特徴を活かして学生参加型・多方向型(教員と学生、学生と学生による)教授法を展開し、「能力がありながら引っ込み思案の新大生」が持つ自己表現能力と問題解決能力の可能性を引き出し自覚させる、という成果を上げている。

このような成果は、長尾准教授が新大生の可能性を信じ、自身の被教育体験とこの科目の前任者の教育実践(ケースディスカッション)を応用しながら、独自の授業デザインと成績評価法の改善・工夫によってもたらされている。

授業の最初に「身近なケース事例」に関するグループ討議を通して、学生に「小さな発言の機会」を設け、教員は机間巡視をしながらグループ討議を支援し、その後全体討議で意見をまとめつつ学習すべき理論へとつなげていく。学生からは、「学生と先生との距離が近く」、他の学生との意見交流を通して講義内容への理解が深まり、毎回参加したいと思える授業だと推薦された。

2. 平成 22 年度受賞者

1) 山内 健 (自然科学系〈工学部〉)

「デマンドに応える工学教育の実践 —授業アンケートに基づく講義改善—」

はじめに

近年の学校教育は過去の伝統的教育から未来のダイナミックモデルへと変化しており、その変化は「サプライ（供給）指導型システム」から「デマンドに応答可能なシステム」への移行ととらえられている。民主主義を原則とする 30 か国の先進国が集まる機関である経済協力開発機構（OECD）でも未来の教育改革に取り組んでおり、その中で「デマンドに応える学校」という提案がなされている¹⁾。「デマンド」とは要求や需要という意味であり、OECD の提言でも「参加者の声」が重要であると位置づけている。もちろん「デマンド」という言葉の定義は今も議論されており、「学校の声」「社会の声」など様々なデマンドを反映させた教育が不可欠である。大学教育においても授業アンケートなどで「学生の声」に耳を傾けて講義を改善していく仕組みづくりが進められている。学生の声は本質を突いた鋭い指摘であることも多いが、感情的で教員の教育意図をくみ取れていない回答も少なくない。このような千差万別の声をどのように講義に反映していくかというのは教育改善の大きなポイントとなる。そして我々教員の「声」は不可欠な要素である。教員個人がこれまでの研究教育の経験に基づいた主題を参加者に伝える声である。

以上のように講義には 3 つの声で構成されている。「学生の声」、「教員の声」「社会の声」である。この 3 つの声がハーモニーを奏でるところに未来型の教育の理想像があるのではないだろうか。新潟大学工学部および各学科でも様々な工学教育の改善が行われている^{2) - 5)}。ここでは筆者が工学部機能材料工学科の 2 年生向けに担当している専門基礎科目：基礎高分子化学（聴講学生数 60 名程度）を例にデマンドに応える工学教育の実践について考えていく。

2. デマンドに応える工学教育の実践

機能材料工学科にはどのような社会のデマンドがあるかということについて述べていきたい。機能材料という言葉は浸透していないが、未来材料と置き換えてもらえればわかりやすい。昨年度、政府が科学予算を優先 8 分野に重点配分することを発表している。太陽光発電、バイオマス、燃料電池、情報通信、地球観測情報の活用、高齢者の生活支援技術、遺伝子情報と医療情報の統合、早期診断治療技術であるが、まさしく本学科ではこれらの分野において先端研究を行っている。このような未来を支える先端研究では材料を多角的に俯瞰する目が大切であり、特に「化学の目」と「物理の目」を備え持った人材を育てることが社

会のデマンドといえる。

教員のデマンドは各教員独自の声であり、目的や達成目標はシラバスに明示されているが、それぞれに講義の流儀がある。基礎高分子化学の講義においては①メディア教育との差別化、②高分子化学の学問修得、③10年後も役に立つ教材の提供、④工学に不可欠な逆転の発想の提案を重点目標とした。また、どのように学生の声に耳を傾けていくかも講義改善の重要な要素となる。本質を突いた鋭い指摘をより多く引き出す必要がある。「後輩により良い講義を受けてもらうにはどのような講義改善が必要か」と問いかけると、感情的な意見ではなく、建設的な意見が返ってくるようである。それでもいろいろと意見が集まる。基礎高分子化学では配布書類は見やすい、もっとパワーポイントを駆使してはどうか、声が聞こえにくいことがあった、字が見えにくいことがあった、授業ペースが速い、授業ペースが遅い、もっと課題が欲しい、小テストでさえ負担など多岐にわたり、なおかつ相反する課題が出てくる。これは化学の目と物理の目を鍛える過程では、どうしても得意分野の講義が分かりやすいため、苦手分野の理解が遅いことも一因と思われる。

デマンドが繋ぐ双方向的講義の実践

3-1 学生のデマンドに対するアクション

本報告の主題は学生の声にどう教員が応えるかではなく、教官のデマンドのために学生の声をどのように取り入れるかにある。学生から投げかけられた雪玉（声）を受け取り自分の雪玉（声）にあわせることで、雪玉をさらに大きくして投げ返すというキャッチボールを楽しんでみてはどうだろうか。一例をあげてみる。

教員の声①

ノートを10年後も利用できる完成度の高いものにしたい

学生の声

板書の字が見にくい、板書が多すぎる、説明が速くノートを写しきれない、重点箇所が分かりにくい

解決案

あらかじめ、図の枠などを書き込んだノート形式のプリントを配布することで、板書時間を短縮して、要点を絞って説明しながら重要事項を記載させて、オリジナルノートを作成させる。学生に背を向ける板書時間が短くなるので、声も通りやすくなる。

教員の声②

高分子化学の学問修得、教育メディアとの差別化

学生の声

板書の字が見にくい、声が小さい、もっと課題が欲しい、講義が難しい

解決案

習熟度の異なる学生に等しく授業満足度を与えることは重要な課題であるが、非常に難しい。課題がもっとほしい⇔講義が難しいという相反する意見をどう組み入れていくかがポイントとなる。パワーポイント中心の講義とすることで、この課題を解決した。配布ノートの重点事項を書き込んだパワーポイント中心の講義を行い、配布ノートには演習問題も用意する。理解が遅い学生にはパワーポイントの説明で問題を段階的に解かせるようにして、自力で解答できる学生には解答をスクリーンの両脇の黒板のスペースに解答を板書して参加者の前で発表する役割を与える。このような工夫で個々の習熟度に合わせ、かつ双方向的な講義を実現することができる。さらにA4・1枚の予習復習問題（予習2題、復習2題）を毎回の課題として与えたところ、自由提出にもかかわらず約95%の回収率となった。

教員の声③

工学に不可欠な逆転の発想の提案

学生の声

講義が難しい、興味が持てない、声が小さい

解決案

パワーポイントを遠隔操作できるレーザーポインターを利用して、教室後方で講義を進める。

2007年に産業能率大の松村有二氏が140人の学生を対象にアンケート調査を行い、教室の後方に座る学生はテストの成績は悪い一方、講義への評価は厳しい」という結果を報告している。同じ印象を持つ教員も多いのではないだろうか。逆転の発想で後方に座っている学生が前方に座れば、このような問題を解決できるかもしれないというブラックジョークを交えながら、教室の均等化を図ることができる。すなわち教員は黒板側から自分に対面して情報を発信し、自分は情報の受信者であるという受講生の既成概念の打破である。「後方の学生から質問していく」とするだけで、この均等化は実現できる。遠隔操作ができるレーザーポインターを利用して教室後方で学生の隣で質問しながら講義を進める時間帯を作ること、後方の学生にも目が届き、学生からみると自分と同じサイドから声が聞こえ、教員と学生が同じ視線で講義を共有することとなる。また、2回目の講義からは通常後方に座っている学生のほとんどは最前列に陣取るようになる。一例に過ぎないが教室の空間を有効に利用することで、学習効率を向上させることができる。パワーポイント利用でいえば講義時間帯での日差しの加減、照明、教卓の位置取りなどで学生の集中力が大きく変わる。

3-2 アイスブレイクの効用

ここまでデマンドが繋ぐ双方向的講義の実践について、学生のデマンドに対するアクションを導入した講義の概要を述べた。実際にこの講義を円滑に実践するためには潤滑油が大切

となる。講義は必ず一枚の写真を紹介することから始めている。あえて自分で撮影したスナップ写真を利用することで、その講義で伝えたい要点を視覚で伝えている。例えば高分子のミクロな重なり構造を理解するためにそばの束がきれいに配列された「へぎそば」の写真を見せながら「へぎ」の由来や山に囲まれた十日町でなぜ海藻がつなぎに使われているかなどを学生に問いかけながら、新潟の文化に関する話題を提供している。これは天然高分子である絹産業の生興と関連しており、別の回の講義内容とも密接につながっていく。ここではシラバスの内容もスクリーン画面に示すことで、講義内容の学問的位置づけも再確認できる。さらに偉人による英語の一言を比喩として利用することで、講義内容を別の角度から暗示的に表現している。ここでは英語を学生に翻訳してもらするなど双方向的なコミュニケーションを図りながら本題へといざなう。

パワーポイントによるノート記載形式では学生の筆記速度に個人差があるため、講義の進行が妨げられることがある。この点は学生に役割を分担してもらうことで解決できる。毎回、1名の学生を選出してその学生のノート作成度合いをペースメーカーにして講義を進めることで、板書が間に合わない学生は講義後、その学生に相談する

以上、工学教育の実践という観点から2年生対象の専門基礎科目である基礎高分子化学における実践例をいくつか紹介した。双方向的な講義を行うためにはある程度のベクトルをそろえる必要があり、無秩序な学生の声を集めて、ベクトルを揃えて再発信することで、教育改善が行えることができる。

4. 結言

教育の多様化と選択の時代を迎え、時代のデマンドに応える教育が求められている。また参加者の要求に応えることも求められているが、多種多様な要求に応える教育は総花的になり教育改善の根本的な解決とは程遠いように思われる。自分の学生に対するデマンドをより反映させるために学生アンケートを利用することで、双方でのキャッチボールを楽しみながら教育改善に取り組める。また教室に集い学ぶ講義においては受講者に応じて、教室空間の有効利用、黒板、液晶プロジェクタなど情報伝達媒体の選択、講義内容の最適化により、デマンドに応える教育の実践が可能であると考えられる。現在、参加者（学生）の声はそのほとんどが個人の意見であるが、近い将来には個人の声に加えて参加者の形成する集合体としての声があがってくることになるであろう。このような集合的なデマンドに応えるためには「サプライ（供給）指導型システム」から「デマンドに応答可能なシステム」への移行を的確に把握して、個人の声を取り入れた新たな教授法を生み出していくことが不可欠となると思われる。

参考文献

- 1) OECD未来の教育改革3 デマンドに応える学校, OECD教育研究革新センター編, 明石書店 (2007)
- 2) 丸山武男, 他, “新しい工学教育への挑戦—工学力を身につけた卒業生の輩出を目指して—” 電気学会教育フロンティア研究会資料, FIE-07-20, pp43-48 (2007)
- 3) 大木基史, 他, “教育GP「つもり学習からの脱却」—材料系における「工学リテラシー入門」の実施報告—, 平成22年度工学・工学教育研究講演会 講演論文集, pp.536-537 (2010)
- 4) 山内 健, 他, 大学発水素センサの評価法に関わる「ものづくり教育」の試み, 平成22年度工学・工学教育研究講演会 講演論文集, pp.428-429 (2010)
- 5) 原田修治, 他, “材料系学科デザイン科目の試行例: 水素燃料電池カーの製作”, 電気学会教育フロンティア研究会資料, FIE-11-009, (2011)

2) 長谷川 雪子 (人文社会・教育科学系〈経済学部〉)

「＜マクロ経済学Ⅰ＞ 授業改善の試み」

1 はじめに

私が教鞭を執ってから十余年の月日が流れるが、その中で学生の気質も変わっていき、それに合わせた授業の組み立てが求められている。それなりに学生のニーズに合わせた授業を提供する努力をしているが、とっている方策は、オーソドックスであり、多くの教員が私以上に努力し、実践し、多くの成果を生み出しているものに他ならない。そういう意味では、ここで記す内容がどれだけ新しい知見を生み出すかは甚だ疑問ではあるが、読者が方策自体は自分と何ら変わらないと認識するのも一つの発見であるかもしれない。あるいは、僅かばかりであるが授業改善のヒントを提供できるかもしれない。その仄かな期待を込めて私の授業改善の試みを簡単ではあるが紹介したい。

2 「マクロ経済学Ⅰ」の位置づけ

まず、受賞理由となった科目「マクロ経済学Ⅰ」の経済学部における位置づけを簡単に説明しておきたい。マクロ経済学は経済学を学ぶものにとっては、ミクロ経済学と並ぶ、修めるべき基本的な分野である。経済学部ではマクロ経済学の初学者むけに「入門マクロ経済学」を開講している。この科目はマクロ経済の導入部分を講義する専門基礎科目であり進級要件・卒業要件に関わる選択必修科目の一つである。一方後続科目である「マクロ経済学Ⅰ」は専門展開科目となり入門的な位置づけからはずれ、修了要件に大きく関わる科目では無い。ただ、専門展開科目ではありながら、水準は「03」であり、「入門マクロ経

「経済学」で初歩のマクロ経済学を学んだ学生を対象とした、導入的な部分から、より専門的な科目やトピックスへの橋渡しの役割を担う科目である。つまり、カリキュラム上はそれほど大きな位置づけを与えられてはいないが、履修モデルとして考えた場合には、経済学を専攻し、今後更なる中・上級専門科目を学んでいく学生の履修が強く望まれる科目の一つであると考えられる。受講人数は年によって変動があるが、大体 200 人～400 人弱の学生が受講する多人数授業となっている。

3 「わかりやすさ」の実践

担当する授業「マクロ経済学Ⅰ」が学長教育賞を受賞した一番の理由を強いてあげるとすると、多人数授業の中で、できるだけドロップアウトを防ぐ「わかりやすさ」を強く意識した授業の組み立てを行っていることであると感している。必修科目でもない多人数授業の中で、ドロップアウトを防ぐのは難しい。学生はわからない、もしくは興味を持ってない場合には諦めてしまう。授業に出なくなり、そのまま試験を放棄する、もしくは過去問を勉強し、試験のみを受験するという選択をするであろう。しかし、この科目の性質からすると、きっちり修得したうえで他の専門科目を履修してほしいという希望がある。そのため、「マクロ経済学Ⅰ」においては、90 分の授業を聞くことで内容の 8 割は理解できること、15 回の授業の最後まで興味を持ち続け、参加できることを目指し、組み立てている。8 割としたのは、授業時間外の学習を行うことにより、理解を深める必要があるからである。非常に感覚的な数字ではあるが、入門に近い科目において、学生が授業時に大体的内容を理解したうえで授業時間以外の学習によって足りない部分を無理なく補うことができる割合として、意識するようにしている。

わかりやすさの追求のために、気を付けている点の一つとして話し方があげられる。大教室における多人数授業では、聞き取れない・聞き逃した等により授業の理解に支障が出たとしても、学生は「もう一度説明してください」と口を差し挟みにくい状況にある。授業の内容と比較すると、軽視されがちであるが、学生にとってはちゃんと聞きとれるかは大変重要な問題である。特に大教室の場合、教員は強く意識しなくてはならないと考えている。そのため、できるだけ聞き取りやすく、重要な個所が把握できるよう、滑舌・声の大きさ・ペースには注意を払っている。大教室で講師の表情が見えにくい状態でも、何が重要であるのか学生が読み取ることができるように、声の抑揚を大きくつける・ジェスチャーなども利用することを心掛けている。

授業内容については、過度な詰め込みを防ぎ、シンプルにすることを意識するため、内容の優先順位をつけ、多くとも 3 つ程度までのテーマ・サブテーマを設定する。そして、授業開始時にアウトラインを示し、各授業におけるテーマは説明前・説明中・説明終了後と 3 回くり返すようにしている。これは、重要部分の聞き逃しを防ぐためと同時に、授業の区切りを明確にすることによって、話題の転換を意識させ、なし崩し的に授業がわから

なくなることを防ぐためである。

また、それぞれのテーマについての導入部分はかなり丁寧に行う。経済理論は積み上げ式の理解が必要になる。最初につまずくと、その後の授業数回分が理解できないままになることも考えられる。そのために、できるだけ平易な言葉で噛み砕き、基礎になる概念の理解を徹底させる。基礎部分さえ理解できていれば応用部分は多少進度を速めても、理解は可能であり、論理的思考力を鍛えることができるのではと考えている。

加えて、問題演習を必ず取り入れ、学生に実際に前に出て解かせるという機会を設ける。これには、多人数授業においては、どうしても受け身になりがちな学生に参加を促し、理解を深めるとともに、同時に学生を指名し解かせることは、教室の空気を一瞬にして変える有効な手段であることが理由に挙げられる。数百人の学生が聴講している授業で学生にあてるのは、学生に過大なプレッシャーを与えることも考えられるため、あて方には多少の工夫が必要ではあるが、問題演習は授業のメリハリをつけるものとして、授業組み立てには欠かせないものである。

レジュメは書き込み式である。ノートを作るのが上手ではない学生が多いことから、重要なポイント等を目立たせる等の工夫を施し、書き込むことでノート代わりになるようなレジュメを意識して作っている。同時に、要点をまとめているだけではなく、今までの講義経験から得た学生が躓きやすい概念等については、図などを利用しながら、指定しているテキスト以上に噛み砕いた説明を記載するようにし、板書や口頭による説明では物足りない部分を補う役割も果たしている。また、レジュメには問題演習も多く記載しており、ワークブックのようなものになっていると考えてよい。これは、授業時間外の学習を促し、理解を深めるために作成している。

このように、学生が理解に躓かないように、また躓いたとしても、それがきっかけで履修を放棄しないよう、挽回できるような授業の組み立て、そして、学生が受け身にならないような参加型の授業が多人数の中で実践できるよう心がけている。

4 現在の試み

現在、行っている授業改善の試みを一つ紹介したい。多人数における参加型授業を目指すも、従来の方法では限界があると感じていたため、昨年度、私が担当する授業において、「クリッカー」という機器を試用した。クリッカーとは、リモコンのようなボタンのついた機器であり、主にアンケート集計に使われる。学生に、選択肢のある問題を提示し、そのクリッカーで回答させると、その結果が瞬時に集計され、スライド表示することが可能になる。今回の試行では、15回の授業の後半8回程で問題演習を中心に継続的にクリッカーを使用した。例えば、従来、問題を解かせると学生を指名し、黒板に書かせていたのが、かわりに全員にクリッカーで正答を選択させた。

当初、私はクリッカーの効果に懐疑的であった。それは、板書を基本として作り上げて

きた講義スタイルにスライドを導入することへの違和感や、学生は物珍しさから興味をもつが、その後飽きてしまうのではないかという悲観的な予想に基づくものであった。しかしながら、予想以上に学生の評価は高かったようである。それは目新しさからではなく、「皆と平等に問題に取り組むのが良かった」「自分の理解度を認識できる」「学生の理解度を見ながら教員が授業を展開している」という、自分と他の学生、そして教員と一緒に授業に参加しているという感触が、モチベーションを高めたというものであった。

実際には、クリッカーが全ての授業スタイルに馴染むわけではないかもしれない。配布・回収の手間にかかることから継続的な実施には困難が伴う可能性もある。しかしながら、今回の試行は今の学生が授業に望む「参加型」「双方向性」を認識し、私が今後目指すべき授業の方向性を示唆した実りあるものになったと感じている。

5 終わりに

以上のように、今まで私が取り組んできた授業改善の試みを振り返ってきたが、もうひとつ、自分が課題として考えていることがある。授業改善を実践した結果、学生にとって私の授業は「わかりやすい」という評価を得ているようである。そのためか、授業後、学生が質問に来る機会はそう多くない。これは学生が理解できているから質問に来る必要がないのかもしれない。もしくは、私が質問しにくいピリピリとした雰囲気を漂わせているのかもしれない。反省しなくてはならない。一番危惧しているのは、「マクロ経済学Ⅰ」の授業の内容だけで学生の興味が完結してしまい、学生の興味をより高度な内容・トピックスに向けることが不十分になってしまっているのではないかということである。私が学生たちに見せているのは手のひらにすくったほんのわずかな水であり、その下には大海がきらきらと煌めきながら広がっていることを学生に感じさせる努力をしていきたい。

3. 平成 23 年度受賞者

1) 日比野 浩 (医歯学系〈医歯学総合研究科(医)〉) 「〈志・情熱・チャレンジ精神〉を持った教育」

The education provided by strong will, passion, and challenging
spirit

Hiroshi Hibino (Faculty of Medicine)

On receiving the Niigata University Presidential Award, here I have described how to improve the education and provide it for medical students. The physiology, of which I am in charge in the faculty, is essential for medicine but very complicated. Therefore, I have explained parts of it with a few tools that are easily available. My slides are made simply as much as possible and have blank spaces with which the students should fill key terms. Of importance, I make every effort to establish a good relationship with the students through multiple activities other than lectures. The students in Niigata University are talented of becoming the leaders of Japanese medical science, which should be realized by themselves. I will continue to educate such students with strong will, passion, and challenging spirit.

1 はじめに

この度は、思いがけず学長教育賞を賜り、誠に光栄に思っている。冒頭に、支援してくださっている医学部の教員・事務の方々、教育方法について今までご指導頂いた多くの先生方に、心より御礼申し上げたい。また、私の授業を受けてくれる学生諸君にも深く感謝する。

私は、元来、話下手であり、教育者としても未熟である。にもかかわらず、名誉ある賞を頂き、教育改善の原稿を書くのは大変恐縮であるが、何かの参考になれば幸いである。

2 教育改善の端緒

教育改善と呼べる程のものではないが、教育に対する姿勢を変えようと思ったきっかけが3つある。元々、臨床の耳鼻科医をしていた私が、大学院や留学先での研究を契機に研究者となろうと決意したのは、2002年の事である。帰国時には、運良く、大学院の時に

世話になっていた倉智嘉久教授のご好意で、大阪大学医学系研究科・薬理学教室にて職を得た。当然のことながら、医学生を相手に講義することになり、教育の経験に乏しい私は、それを楽しむ気持ちは少なく、時間がかかるだけの憂鬱な義務に過ぎないと思うようになっていた。そんな心の内を、尊敬する留学先のボスである A. J. Hudspeth 教授にふと洩らしたところ、「講義は私にとってチャレンジだ。もっと教育したいと常日頃から思っている」という、予想外の返事を頂いた。Hudspeth 教授は、感覚器神経科学を代表する超一流の研究者であり、研究活動及び大学の雑務に日々追われている人物である。研究を大切にすることは、教育も大切にすることを知り、目が覚めた。彼の言葉は、私の教育に対する理念を根底から覆すものであった。今では、教育する機会を与えてくださった倉智教授に心より感謝している。

二つ目の端緒は、2009年に京都で開催された4年に一度の生理学の祭典「国際生理学会2009」において、「子供向けプログラム」を担当したことであった。これは、小学生、中学・高校生を30名程集め、丸一日、医科学のおもしろさを説く試みであった。「心臓」「細胞」「聴覚」「顔面認知」「におい」をそれぞれ主題として5つのセクションを設けた。その中で、私は自らが研究対象とする「聴覚」を有志と共に担当した。準備は困難を極めた。専門用語が丸で通じない子供たちに、如何にして難解な聴こえの仕組みを説明し、医学との繋がりを感じてもらおうか、練りに練った。その時の経験が、後述する少し変わった授業方法にも活かされている。

最近のきっかけは、本学医学部の生理学教室の教室主任になったことである。教室主任は、研究のみならず、当然のことながら教育にも責任を負う立場である。また、2年半前の赴任当初、非力な自分がまず大学に貢献できることは、教育やその他の活動を通じて学生と仲良くなることである、とも思った。それらを鑑み、新潟大学にて教鞭をとる前に改めて以前に使っていた講義スライドを客観的に見直した。すると、字が小さい、バランスが悪い、ポイントを得ていない、と悪い点ばかりが際立ったものであることに気付いた。そこで、全面的に講義のやり方や資料の作成方法を改変することにした。前任地の学生には、誠に申し訳なく、陳謝したい。

3 講義の組み立てと手技

医学部医学科の学生は、現在、1学年が120名余りである。我々の教室が担当する科目は、2年次の「生理学」である。この科目は、いわば生きた丸ごとの生命機能を細胞から組織、臓器レベルの階層まで総合的に学ぶものであるため、医師や医科学研究者になるために最も重要な基礎学問分野の一つである。しかし、生体では、多彩な個々の生命現象が、複雑に関連しているため、生理学の理解は学生にとって往々にして困難となる。従って、教員が十二分に講義を工夫し、学生に興味をもたせつつ無理なく理解させることが重要であると考えている。

私が用いる講義の具体的な組み立てと手技を、「聴覚」の講義を例にして挙げたい。この

中で最も重要かつ難解である部分は、耳の奥にある「内耳蝸牛」の仕組みと働きである。音は外界から、外耳（耳の穴）、中耳（鼓膜と耳小骨）を介して、内耳の蝸牛に伝達される。蝸牛では、音の機械的なエネルギーが電気信号に変換される。そして、その信号が脳へと送られることになる。蝸牛に入った音は、まず基底板を振動させる（図 1）。基底板は、蝸牛の全周にあるが、頂上部、即ち蝸牛の入り口に遠い方に行く程、低い音を認知して揺れるようになっている（図 2）。これを「基底板の周波数部位地図」という。換言すれば、基底板は様々な周波数から成る自然界の音を、周波数別に分離・分析していることになる。周波数部位地図は、基底板の性状、つまり、頂上部に行く程、基底板の幅が広く且つ硬さが軟らかくなっていることに起因する。この特徴を丸暗記させようとする、学生は混乱して記憶が定着しない。そこで、2種類の小道具を使う（図 3）。1種類めは、厚さと大きさが全く同じではあるが、一方は硬い金属でできた板と、一方は軟らかいゴムでできた板である。前者を棒で叩けばキンキンと高い音が出て、後者を叩けばゴンゴンと低い音が出る。2つめは木琴である。木琴は、鍵盤が狭い方を叩けば高い音が出る。基底板の性状は、身近にありふれたこれら2つの小道具が混ざったものであると説く。「何故、入り口から遠い蝸牛の頂上部で低い音が感知されるか、」という疑問についても、誰もが持つ経験から説明がつく。遠くで鳴る雷はゴロゴロと低い音しか聴こえないが、近くで鳴る場合は、ピシャッ、バリバリという高い音が入ってくる。これは、高い音ほど減衰し易く遠くまで届かない、低い音は弱くなりにくく遠くまで届きやすいことに依る。この音本来に備わった性質に合わせて、蝸牛の基底板も入り口から遠い部分で低音を感知するように進化してきたのだ、と言え、学生も納得がいく。更に、音楽が耳に入った際に、実際にどのような動きを基底板が示すかの動画も提示する。これは、Hudspeth 教授に譲って頂いたものであるが、音響効果も入っており非常によく出来ている。紙面で読者に伝えられないのが残念である。詳細は省くが、その他に、バネ、ボール（図 3）、音叉などを使って、視覚に訴えながら、時には実際にそれらを触らせながら授業を進めるようにしている。

私は板書がとても下手なので、講義は基本的にパワーポイントを使う。また、どんなに直そうとしても、どうしても早口になってしまう。そこで、印刷したパワーポイントの重要な部分は、穴埋め式にするようにしている（図 4）。教室は階段状であるが、上下に歩き回ることで、学生が空欄をどのくらい埋めているかが分かるし、そのペースを見て早口にならないように自らをコントロールできる。また、スライド一枚には、必要最低限の情報しか入れないように心がけている。文字は大きく、色は分かり易い程度に3～4色まで、強調したい部分は文字のフォントを大きくする、などの事も実践している。

学生は、若いといえども、やはり医学を目指している。そこで、基礎医学領域の授業の中でも、できるだけ病気の仕組み、治療法、患者様への対応法などの臨床医学的な側面を、時々意識して紹介するようにしている。さすがに医療行為を直接見せる訳にはいかないが、時に学生を机の上に寝かせ、模擬的にデモすることもある。

医学部の授業は1コマが90分であるが、やはり学生にとっては長過ぎる時間であろう。

そこで、タイミングを見計らって、本題とは一見関係ないような話題も提供する。例えば、聴覚であれば、世の中にはヒトに聴こえない超音波を使う動物が多数いて、しかもそれを捕食や求愛の手段として使っている、などの話をすると、学生もリフレッシュできるようなものである。階段状の教室を動き回って講義することは上述したが、何らかの回答を求める質問に加えて、ちょっとした言葉を随時かけるようにしている。

医学部には、薬品会社をはじめとして様々な業種の職を経験した後に入学してくる学生もいる。彼らの勉学に対する意識は極めて高く、質問を受けても答えられない場面を今までいくつか経験した。その場合は、「分からない」と正直に答え、後で調査した後に、学生へ何らかの手法で返答するようにしている。この方法に対しては、意外にも批判はなく、学生も納得して回答を受け付けてくれている。

我々が担当する生理学の講義は、半年に渡る長丁場である。期間の最後には、私が自分自身の今までの医師・研究者として歩んで来た道筋を紹介する時間を設けている。医師は患者様の全てを受け入れなければならない重い職業である。私のこれまでの人生の一部を示すことで、学生には何かを感じてほしいと思っている。毎回、なかなかの反響で、この授業後には必ず何人かの学生が私の部屋を訪問し、今までとこれからの歩みについて議論するということが続いている。

4 学生とのコミュニケーション

学生との対話は言うまでもなく重要であり、教員と双方向性のやりとりがあるのが理想である。このことについて、私はまだ自慢できる域には達していないが、努力はしているつもりである。例えば、可能な限り学生の名前を覚え、問いかけの時は名前を呼ぶようにしている。授業の他に重視しているのは、いわば課外活動である。医学部は、1年生から6年生までの各学年の特定の2～3名について、彼らが卒業するまで1人の教授が担当するというユニークなシステム「懇話会」を持つ。最低、年一度の開催が義務づけられており、多くは夕食を囲みながらの座談会となる。学生は、様々な悩みを懇話会の担当教授に随時打ち明ける場合もあるし、卒業後の研修病院への推薦状作成を依頼することもある。私は、この懇話会を非常に気に入っており、年に4度、開催している。そのうち、2度は、自作の料理を1品持参してのパーティーと決めている。さすがに年に4度も開くと学生の名前は完全に記憶できる。また、そうなると、学生の方から廊下で声を掛けてくれるようになり、とても嬉しいものである。学生同士も学年を超えた縦の繋がりが持てて有益の様である。また、出身地である愛知県の県人会を年2度、開く。更に、準硬式野球の部長、バドミントン部の副部長も務める。

これらの活動は、一見、無駄であるように映るかもしれないが、授業中の会話やアンケートからは見えない学生の「本音」が聞ける場合が往々にしてある。授業改善のアンケートは、やらないよりやった方が当然よいが、この手段からはまだ十分に学生の真の意見は聞けないという印象を持っている。学生と近づき、リラックスした時に聞かれる授業に対

しての疑問点・批判は、とても重要であり、授業の改善に大いに参考になる。

5 教育に対する心構え

生理学の講義では、学生へ何度となく「将来を担う立派な医師や研究者となり、新潟の医療を支えるのみならず、日本をリードし世界を目指す人物になって欲しい」と呼びかけている。また、これは、とかく大学では忘れがちな自らの能力の高さをもう一度認識させる意味も持つ。将来を支える医療人・医科学者を、精一杯、熱い気持ちで育てること、これが教育における私の大きな「志と情熱」である。また、研究と同じく教育には問題が付きものであり、克服しようとする壁にも突き当たる。これを打開し、新しい教育を展開させていくには、「チャレンジ精神」を強くもっていくことが大切だと考えている。「志・情熱・チャレンジ精神」が、私の教育に関する神髄であり、これらの単語に負けないように精進し、教育改革に臨んで行きたい。

6 おわりに

教育はエンドレスであり、非常に粘りが必要な活動である。しかし、明らかに我国の将来は若者たちの双肩にかかっており、かれらの成長は、将に我々が提供する教育に委ねられている。一つ一つの小さい積み重ねである教育に今後とも真摯に向き合い、その改善に今後とも全力で携わる決意である。

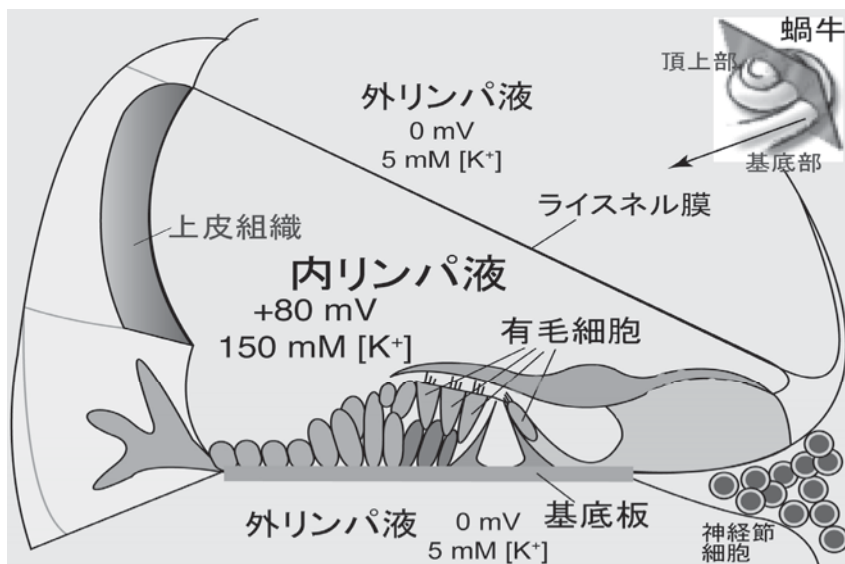


図1：内耳蝸牛の模式図

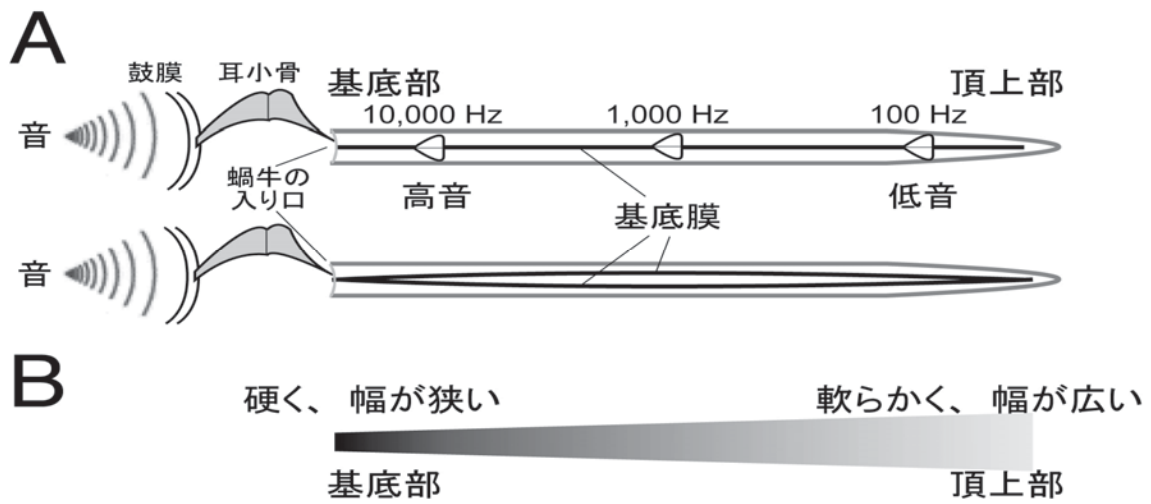


図2：基底板振動の特徴

蝸牛の基底板を伸ばし、横(A)と上(B)から見た図。音波は、基底板全体を揺らすのではなく(A 下図)、特定の部位で急に振幅を大きくし、直ぐに減弱する(A 上段)。また、基底板上で周波数別に弁別される(A 上段)。これは、部位により基底板の硬さと幅の広さが異なることに依る (B)。

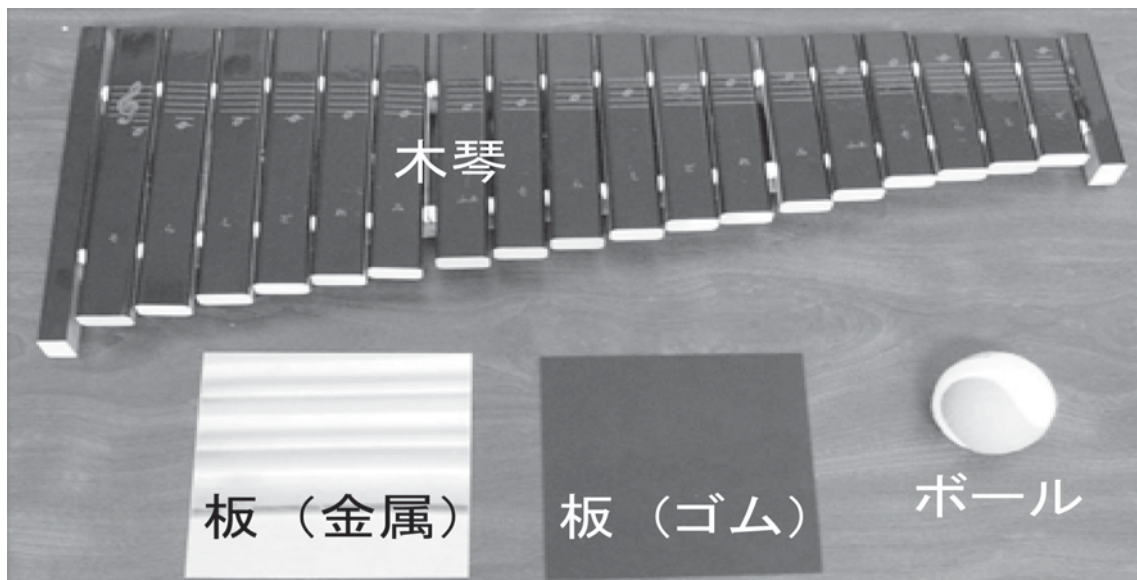
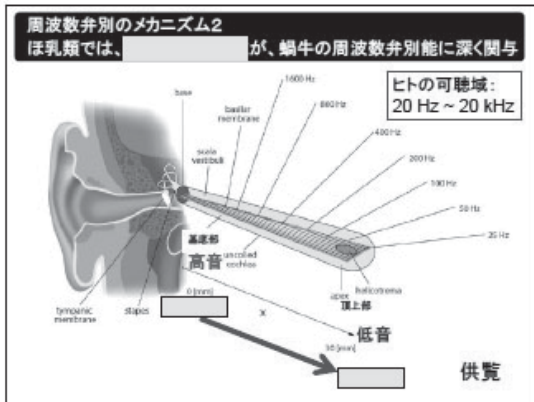


図3：講義で使用する小道具



つまり、有毛細胞は、神経伝達物質を出すため、を作る必要がある。

しかし、音や基底膜の振動、感覚毛の屈曲は、刺激。

**有毛細胞は、
機械的刺激を電気信号に変換する必要あり。**

図4：講義で配るスライドの印刷版
重要箇所は穴埋め式にしてあることに注意。

2) 長尾 雅信 (人文社会・教育科学系〈技術経営研究科〉)

「学生の自発性と可能性を引き出す討議型授業の挑戦」

1. 新大生のイメージと理想の姿

新潟大学の学生（以下、新大生）と関わりを持つようになって6年経った。筆者は新大生に「考える力はあるが、引っ込み思案」というイメージを持っている。文章を書かせれば明確に論旨を展開し、じっくりとその話に向き合えば豊かなアイデアを披露してくれる。ただせっかくの論理力を持ちながらも、多くの学生はそれに自信を持たず、大勢の前で発表することは不得手である。現代の社会状況と彼らの具有する能力から、新大生の理想像を鑑みると「考える力と伝える力を持つ問題解決者」と言うことが出来よう。不確実性の高い世の中で求められている人材は、社会や所属先の課題を発見し、文化や分野の異なる人々と対話をしながらその解を導き出す問題解決者である。すでに「考える力」を具有する新大生にあっては、「伝える力」を鍛えることでその可能性を高め、社会で活躍する人材へと成り得よう。この目的の達成にむけて、筆者は学士課程の授業において次のようなことに留意している。すなわち①授業への関心を高めること、②学生の集中力を高めること、③学生との一体感を高めること、④発言のしやすい環境をつくることである。上述の留意点を踏まえ、本稿では筆者が取り組む学士課程の授業での実践や、その改善の経緯などについて言及する。なお、このたびの教育賞の対象となったマーケティング論Ⅰは、例年120名が履修する科目であり、その中にあっては教員と学生、学生間という多方向の議論の活性化を目指している。

2. 教育者としての背景

具体的な授業法に言及する前に、筆者の教育者としての背景について述べる。というのも実践する教育法や内容は、少なからずその影響を受けていると考えるからである。

2-1. マーケティングの視点

筆者はマーケティングを専攻とする学者である。マーケティングは「商品売りつける」ことを企図するのではない。「あの企業の商品ならば買ってみたい」というように、消費者から自発的な支持を獲得・維持することを目的のひとつとしている。鍵となる概念は自発性(voluntarism)であり、それが消費者のなかで如何に喚起されるかを解明していくことが、マーケティング学者の命題となる。

マーケティング研究の対象は企業やその製品にとどまらない。地域や学校など非営利組織もその範疇に入る。地域ならば「あの地域に行ってみたい。住んでみたい。」という想いを喚起することを目指すだろうし、学校ならば「学んだみたい」ということになろう。これを鑑みるとマーケティング学者にとり、学生の自発性喚起は与件的に取り組まねばならない。

2-2.慶應義塾での被教育体験

次に母校である慶應義塾で受けた教育手法に触れる。学士～修士時代を過ごした SFC (湘南藤沢キャンパス) では、グループワークやプレゼンテーションの機会が多く設定されていた。SFC ではコンピュータ・サイエンス、ライフ・サイエンス、アート、経済学、社会学、政治学などをバックボーンとする多様な研究者が集い、文理融合の教育・研究が展開されている。学生たちにとっても授業の履修にあつては、机を並べる同級生は自分とまったく異なる分野を専攻する学生であり、そういった異文化の人々との共同作業、プレゼンテーションにおける理解の促進には悩まされることも多い。けれどもそこでの研鑽は、コミュニケーション能力の向上につながっているように思う。ちなみに筆者が経済学部で担当するマーケティング論 I・II は、いくつかの副専攻の履修科目に指定されている。よって学生は経済学部だけにとどまらず法、人文、農、工など幅広い分野から参加し、SFC と近い教育環境となっており、学部や分野を超えた討議がなされている。

博士課程を過ごした KBS (慶應ビジネススクール) では、ケース・メソッドの洗礼を受けた。KBS はビジネススクールのトップ校である HBS (ハーバード・ビジネススクール) のスタイルを踏襲した、日本初のビジネススクールである。MBA (経営学修士) コースは一クラス 80 人ほどの規模であり、学生は半円形型に配置された座席に座り、教員だけでなく同級生の顔を見ながら討論に打ち込む。MBA の学生は在籍中に 500 から 700 ケースを討議し、分析力や意思決定力を磨くことになる。博士課程の学生もその授業には参加することが出来、また教員としてケースリードの機会を持つこともある。ケース・メソッドについては後述することとする。

3.授業改善の実例

本章では問題解決者の涵養にむけて、筆者が取り組んできた授業改善の実例について述べる。これまでを振り返ると、次の 5 つのことを意識して実践してきた。それは①学生との垣根の払拭、②スライドのビジュアル化、③小さな発言の機会の設置、④理論と実践との架橋、⑤ケースによるグループ討議と全体討議である。

3-1.学生との垣根の払拭

前述した目的の達成にむけた留意事項を踏まえ、まず意識して取り組み、かつ時間がかかったのは本項目だった。授業にあつては目線を上げて、学生と視線を交わすことが垣根を取り払う前提と考える。着任時は自信がともなわず、講義ノートへ頻繁に目を落としながら授業をしていたことが思い出される。専門分野の諸理論や概念はおさえていたものの、それが腑に落ちていたとは言い難い。これは授業の回数を経るうちに克服されていった。学生に教えることで学んでいたと言えるだろう。

次に意識したのは設備や機器面での対応である。アップル CEO であった故スティーブ・ジョブズ氏は、間違いなく現代のグレイト・コミュニケーターであった。彼のプレゼンテーションを見ていると、幾つの特徴に気づかされる。そのうちのひとつは聴衆との

距離感である。彼は演台の向こう側に立ち、新商品の発表をするようなことはしなかった。PCを遠隔操作し、開いた姿勢で聴衆と向き合って臨んでいた。両者の間を遮る物はなく、聴衆との一体感の醸成に腐心していることがうかがえた。また、TED (Technology Entertainment Design) のカンファレンスを見ると、発表者のほとんどはジョブス氏と同様に、聴衆との間の物理的障壁を取り除き、聞き手に正対して発表に臨んでいる。

筆者はこれらの好事例を参考にし、授業においては教卓を脇に移動させ、無線機器によってスライドを遠隔操作し、学生との物理的・心理的距離を取り除くことに努めている。このささやかな取り組みにより、学生ひとりひとりと目を合わせることで、ボディランゲージも駆使することが出来るようになった。開いた姿勢は先述の留意点に対応するために、必要なことだと考えている。

3-2.スライドのビジュアル化

カンファレンスでの経験上、発表スライドに文字が敷き詰められていると、聴衆はそれを読み取ろうとして文章に集中し、発表者と聴衆とのアイコンタクトは成立しないし、理解の程度も低くなる。ジョブス氏やTEDの発表者のスライドを見ると、文字は大変少ない。そこには簡潔なキーワードないしは図表が示されており、細かな説明は発表者によってなされる。聴衆はキーワードや図表を手がかりに、発表者の言葉に耳を傾ける。ビジュアル化された内容は、聞き手の理解を促進することが教育の現場でも指摘されている (Moreno&Mayer(2005))。

筆者は着任当初、スライドに文字を敷き詰めてそれを読み上げる傾向にあった。その時の受講生の表情や態度を窺うと、明らかに集中を逸していたように思う。授業経験の蓄積や好事例の研究から、スライドのビジュアル化に努めるように腐心した。実感やアンケート評価から窺うに、当初抱いた懸念は改善されたことが推察される。但し学生は授業内容に関心を抱いたとしても、必ずしもこちらの意図したことを理解出来ているとは限らない。そこで、毎回の授業の最後に当該回に関わる参考文献を示し、当該授業の復習が可能なように配慮している。

3-3.小さな発言の機会の設置

伝達力を高めることを標榜して討議の参加を促しても、学生がすぐにそれを成すことは難しい。まずは人前での発言を積み重ねることで、自信を付ける必要がある。そこで担当する授業では、小さな発言の機会を多々設けるようにしている。

例えばコミュニケーション (広告や販売促進など) に関わる授業回では、化粧品会社の商品ポスターを掲示する。そこには女性モデルが並び、さまざまな広告コピーが記されている。この一枚のポスターから、この化粧品会社の意図は何であるか、を学生たちに尋ねてみる。モデルたちに目がいった学生からは「若い女性をターゲットにしているのでは」という答えが返ってくる。「若い」と言っても抽象的であるから、より具体的な姿を尋ねてそのターゲットを明確にしていく。またポスターには「コンビニで、きれいになろう」というコピーが記されている。ここからも、より具体的なターゲット層を割り出せそうであ

る。学生たちはこの授業回より前に流通構造（商品の流れや取引慣習など）について学習しており、そこでは化粧品流通についても触れている。従来の慣習として化粧品がコンビニエンス・ストアで販売されることは異例であった。では、この会社は何故コンビニで化粧品を売ることになったのか。一枚のポスターからこのような議論展開が出来、学生も簡単な発言の機会を持つことが出来る。身近な事例を引き合いに出すことで、学生たちは発言もしやすくなり、また自分が気づかなかった同級生たちの視点に触れることで、授業への関心を引き起こすことが出来る。

この際に留意していることは、各回の連動性を意識し設けることである。今回のケースは「コミュニケーション」をテーマにしていたが、他の回で学んだことを復習出来るような仕掛けとなっている。実社会にあっては、課題はテーマや分野ごとには出現しない。小さな発言の機会とはいえ、そういった配慮は欠かせない。

3-4.理論と実践の架橋

教員は学生に対し、当該分野に関する理論を教授しなければならない。だが理論の一方的な教授では、学生の集中を保つことは難しいように思う。その点マーケティングは恵まれていて、実社会で理論の応用が頻出しており、身近な事例に事欠かない。理論が実践でどう使われているのか。授業ではそれをふんだんに紹介し、理論への関心を高めるように努めている。それだけにとどまらず調査データや事例を示し、理論を使ってそれを読み解かせながら、学生たちを意思決定者の立場にさせて理論を腑に落とすように努めている。

消費者行動の分析道具のひとつに、多属性態度モデルがある。消費者が複数の商品を如何にして評価しているのか。それを解析するフレームである。数式で表すと図表1のようになる。

図表1 多属性態度モデル

$$A_0 = \sum_{i=1}^n B_i a_i$$

A_0 : 対象Oに関する態度

B_i : 対象Oが属性iと結びついている確からしさ(信念iの強さ)

a_i : 属性iの評価

n : 対象Oの属性の数

車を購入する際「価格」、「燃費」、「外見」、「安全性」、「加速性」など多様な評価属性（視点）があるはずだ。それが a_i に当たる。それぞれの評価属性のいずれを重要視するか。価格や燃費は5点、外見は3点、安全性は4点、加速性は2点などをつけることが出来るだろう。次に購買を検討している車は、その評価属性をどれだけ満たしているのか。それが B_i となる。トヨタのプリウスならば、価格は3点、燃費は5点…などと評価をする。それらを掛け合わせ、足し合わせるとその商品（プリウス）の評価点 A_0 となる。消費者行動研究では、消費者はこのようにして検討商品の選好を決定していると仮定している。授業では身近な事例を引き合いに出しながら、このモデルを解説している。

次にこのモデルを応用して、学生を意思決定者の立場にさせて発言の機会を作る。例え

ば、図表 2 のような検索サイトに関する利用者の選好データを示す(データは現実を正確に反映したものではなく、経営の巧拙を例示するものではない)。見てのとおり、Excite の選好度は著しく低い。

その後、学生に次のように問いかける。「もしあなたが、Excite のサイト統括マネージャーだとしたら、どのような対応を図りますか?」。学生たちはサイト・コンテンツの在り方(製品政策)やコミュニケーションの在り方(プロモーション政策)について意見を述べてくれる。その際、理論のポイントを押さえているかを問いながら、議論を進める。

このように身近な事例を基にした小さな発言の機会を積み重ねることで、学生たちは理論に親和性をもって援用するようになる。また、学生たちは教員との議論だけでなく、学生間でも議論を行い、双方向かつ多方向の議論を展開するようになってくる。

図表 2.多属性態度
モデルの演習例

属性	ai	Google	Yahoo	Excite
検索能力	+4	+5	+3	+2
ニュースが充実	+3	+3	+5	+4
広告量が多い	-2	0	+3	+2
スポーツ情報が 多い	+2	+2	+4	+3
態度スコア		33	29	22

筆者作成

3-5. ケースによるグループ討議と全体討議

最後にケースによるディスカッションについて言及する。ケース・メソッドはハーバードにおけるプロフェッショナル・スクールに端を発するⁱ。ハーバードには、ビジネススクールが出来た以前からロースクールがあり、その目的は実践的な法曹家を育てることとされてきた。そこでの教育法は過去の判例集を紐解き、教師と学生がその状況設定、条件、判決の適切性について議論をするという形式をとっている。ビジネススクールにおけるケース・メソッドはそれを範に取っている。ビジネススクールで取り扱われるケースは二種類ある。ひとつはデシジョン・ケースと言われ、ある特定の意思決定課題を抽出し、分析を経てその意思決定をするというものである。もうひとつはアプレーザル・ケース、すなわち評価ケースである。ケースでは特別な意思決定を要求せず、その経営を評価することによりそこからインプリケーションを見出すことが目的とされる。

ケース・メソッド教育は 3 つの段階によって成り立っている。まず個々の学生がケースを読み込み、分析した上で問題点を明確化し、具体的な解決策や評価を準備する。次は小グループでの討論である。個人研究の成果を各人が持ち寄り、各自の問題意識を高める。次に続く全体討議へのウォームアップの段階とも言える。最後はクラス全体での討議であ

る。教師のリードによって学生はさらに議論を重ね、多数の参加者の意見を通して自らの問題発見や意思決定に結びつく能力を高めることとなる。

ケース・メソッド教育の意義は、ケース討議を積み重ねることで次の能力を獲得していくことにある。第一は論理的説明力である。ケースのデータは決して秩序立てて記載されているわけではない。学生はそこに散りばめられた情報を読み込み、根拠を明示してその企業が直面する課題を説明していかねばならない。第二は概念化力である。論理的説明を踏まえ、実際に解を導き出すことが求められる。第三は対話力である。個人の分析によって創り上げたフレームを、対話によってリバイズしていく力のことを指している。

さて、ケース・メソッドはプロフェッショナル・スクールでの実践を企図されており、学士課程教育に持ち込むためには工夫が必要である。まず、引っ込み思案の学生たちを如何にして討論へと積極的に参加させるか、ということが課題となる。この課題に対しては前掲した諸々の取り組みを積み重ねることにより、発言と討論へのハードルを下げるように努めている。よってケース・メソッド教育は、学期の半ばを過ぎた頃に実施している。

次の課題として、学部の授業時間の制約がある。ビジネススクールでは、教育の第二段階である小グループでの討論に、全体討議と同様の時間をとっている。苦肉の策であるが、担当科目では最初の30分を小グループでの討議にあて、残りを全体討議の時間としている。小グループでの討議は、筆者の方で5~6人のグループを設定し、討議にあたらせている。グループのメンバーは必ずしも気心の知れた学友で構成されているとは限らない。そこで筆者は机間巡視によって、各グループの議論の様子をチェックしている。議論が停滞しているグループにあっては、ひとりを指名して発言を促し、その他のメンバーにコメントを求めたり、議論活性化の視点を示唆することでその対応にあたっている。

いまひとつの課題は大学受験に起因する。受験を乗り越えてきた学生は、正解主義という不安にとり憑かれていることが多い。これまで彼らが取り組んできた問題の解は、明確でありまたおおむねひとつであった。しかし、実社会の問題に対する解は必ずしもひとつではない。その不安を低減させ、自信をもって議論に参加させるためにケースの課題や解決策を予め文章にさせ、それを議論の場に持ち込ませる。その場で意見を考え発表することは難しくとも、文章にして準備しておきそれに目をやりながら議論をすれば心理的障壁も低くなる。

ケース・メソッドを進める上で、もうひとつ留意しなければならないのは時間管理である。議論が活性化するのは喜ばしいことだが、ケースで学ぶべき事柄が完結しないまま、授業が終わりの時間を迎えることも起こりうる。それを避けるために筆者はシナリオを記載したティーチングノートを作成している。ここでは導入の仕方から議論のポイント、それぞれ論点の時間配分を記載している(図表3)。

プロフェッショナル・スクールにおいてケースリードをする教員ならば、ほとんどがティーチングノートを作成しているはずである。

図表 3. ケースのティーチングノートの一例

長尾 雅信、
2008/04/18 初版作成、
2008/05/13 2 版作成、

BMW ティーチングノート

■ 1981年の状況（ウォーミングアップ）(5)

- ・ NHK土曜ドラマ トップセールス（真川 結衣） 村文字、
- ・ s49「クルマを売ることは売る人の未来を一緒につくること」
- ・ 現在の車販売の状況
- ・ 付原資料 1 1981年から西独車進出著しい。

1950年代は欧州車ノックダウン 1965年 自動車輸入が自由化。

■ 1981年以前、輸入車販売の阻害要因(15-40)

- ☆国内産業の保護
- ☆関税
- （1978年に自動車輸入関税の完全撤廃 GATT加入検討後 17年越し）
- ☆為替レート
- （関税と同じ要因で割高）（1973年為替変動相場制で円高・輸入価格の低下）
- ☆排ガス規制
- （日本は厳しい でも国産車にも規制）⇒追加投資が必要だった
- ☆輸入車検査手続きの煩雑さ
- ☆単V型式
- （購入者が要求した製品の性能を、製造者の実施した検査結果を基に購入者自身が調査する検査）
- ☆所得水準
- （付原資料 7 買い頃 affordable）
- ☆高価格？
- 高価格でも買う人はいる(p1 600万円台の車種好評で半年以上納車待ち)
- ☆海外コミットが少ない（円高によって海外旅行が活発化）
- ☆成熟市場（理由は？）
- ☆ディーラー網未整備（併売輸入車ディーラー p32-33）
- ☆サービスの未整備（メンテナンスサービス）
- ☆資本自由化（1973年 100%完全自由化）

pg. 1.

長尾 雅信、
2008/04/18 初版作成、
2008/05/13 2 版作成、

■ 日米貿易協議・規制の説明(40-45)

◎明治以来、日本は輸出を奨励し経済成長

◎対外債務国。円は弱く、輸出主導によって富国強兵

◎経常収支が恒常的に黒字化。1980年代後半には世界最大の対外債権国。ex)ソニー、トヨタの興隆

◎この段階で黒字を返らし、内需拡大への道筋をつけたかったが、理由)ドルベース取引。その金は米の経済活動や株式・不動産市場に向く。よってアメリカ国民が溜る。処方箋)ドルを売り円を買い戻す。結果、国内の購買力向上、円は切り上がる。海外から円資産を求めて、資本が流入。さらに購買力が増して内需拡大。輸出・設備投資から生活・福祉重視へ。(豊かな消費にもつくりにも磨きか)

■ BMWの成長戦略は何か(45-60)

- ☆競争戦略
- 目標は利益（ニッチとして市場シェアをおよそ1%に）
- ☆ターゲットはヤッピー(pp15-16)
- （Young Urban Professionals）高所得で高消費⇒コンセプトとフィットした
- ☆高い技術水準だけでなくサービスも重視
- （サービススターの設置とメカニックの長期トレーニング）
- ☆メンテナンスの充実（なぜ出来たのか？）
- （低金利の外資融資制度の使用 1500万ドル 1\$ 265円）
- ⇒（スペシャルツール純正部品の在庫化）（BMW総合サービスセンター）
- ⇒品質維持可能
- ☆専売ディーラー（どんな人を選んだのか？）
- ・異業種成功者（従来のディーラーは友人だけどころ？）
- ・完全なまでのCI戦略
- ・BMWの戦略をキチンと理解し、実行してくれる
- ・BMWのディーラーは異業種だから60カ日納車を飲んだ
- 積極的、能動的なディーラー

pg. 2.

筆者作成

ティーチングノートの作成にあたり参考になったのは、筆者が学士課程時代に親炙していた相田洋氏から受けた教育である。相田氏はNHKの元ディレクターであり「電子立国日本の自叙伝」、「新・電子立国」、「マネー革命」といったドキュメンタリー番組を世に残している。氏が作成する番組は難しい題材を扱いながらも、アナウンサーとディレクターの丁々発止のやり取り、カット割りの工夫によって、分かりやすくまたきわめて興味を引き、最後まで見続けたいと思わせる内容であった。

氏がよく我々に伝えたことは、テレビ伝達の特性である。テレビの視聴者は日常の雑事に囲まれながら画面を見ている。入場料を払って劇場に入り、終わりまで辛抱強く画面を見つめる映画の観客とは違う。そのためお客はきまぐれだという。ちょっとした画面の展開の不備によって、チャンネル飛ばしに走る。氏はひたすらに「視聴者をひきつけること」に心血を注いできた。

相田氏は映像づくりやコミュニケーション技法の習得に関心を持つ筆者らに、映画のカット表作りを勧めた。カット表とは映像の一カットーカットを止めながら、カットごとの内容と長さを書き取っていく根気のいる分解工学の一手法である。相田氏は難解な題材を取り扱うことが多かったが、自己満足に終わらずに、番組の最後まで視聴者を気持ちよく引き付けることに腐心してきた。氏がその演出技法を鍛えるために取り組んだのがカット

表作りであった。筆者らもスティーブン・スピルバーグ監督の『激突』や『ジョーズ』を題材にし、2時間を超える作品にも関わらず、どうやって観客を虜にしたのかを解析したⁱⁱ。

また相田氏は、大道香具師の売り口上を観察するよう筆者らに勧めた。その意図を氏の著作から引用する。「私は大道香具師が好きである。あの語り口、あのリズム。人の流れの方向を読み、場所を決め、店を開き、タイミングを見計らって仕事にとりかかる。醒めた計算を情熱的な語り口の中に秘めて、リズムカルにお客に呼びかける。初めは全くその気のなかった人たちが、なぜか足を止め、やがて彼の周りに垣根を築く。彼は客の反応をその表情のうちに読みとりながら、周到に用意された手口で確実に商品を売りつけていく。ⁱⁱⁱ」周到なシナリオを用意しながら、そのときの状況に合わせて臨機応変に適応していく。コミュニケーションの要諦が大道香具師の所作に詰っていると見たのだろう。平成の世に入り、大道香具師を見ることは少なくなった。その代わりとして、筆者は神奈川在住のおり、横浜の路上で大道芸人をたびたび観察した。何度かの観察を経て、大道芸人もまたコミュニケーションの要諦を踏まえていることが窺い知れた。路上での演技は何が起こるか分からない。酔っ払いに絡まれることもある。それを巧みに受け流し、あるいは利用しながら事前に決められた演技を見せていく。そして平時と同様に、きっかりと時間内に演技を完結する。不測の事態に備え、立ち戻れるポイントを用意していたのだった。

ディスカッションの授業でもある程度の時間配分と焦点を定め、議論が錯綜したとしても立ち戻れるポイントを作っておくことが肝要である。

4.具体的な成果を示す指標

上述の取り組みの成果を測る際、筆者は以下の指標を参考にしている。まずは発言者数である。授業では発言点を付与しており、発言者には授業終了時に名前を記載して貰う。その結果と授業で感じた印象を鑑みて、発言のしやすい仕掛けを検証している。また、特定の学生に偏りが出ないように確認することにも役立っている。発言者の数や学部分布などはデータベース化しているわけではないので、経年の成果は詳細には把握していない。しかし発言の質を鑑みたとき、ここ3年辺りのケース・ディスカッションにおける討論においては、意思決定の理由にまで深く踏み込んだ内容も増えている。また、筆者（教師）との討論だけでなく、学生間の討論も活発化していることを考えると、改善の成果は出ているとみて良いだろう。

新潟大学で実施されている授業評価アンケートの結果も参考にしている。特に「発言を促したか」、「熱心さ」などに注目し、授業の仕掛けの巧拙を捉えている。この調査を基に、次年度の授業や次期の関連科目の改善に役立っている。さらに授業改善のための貴重な情報源として「自由記述のコメント」が挙げられる。当日の短い時間では、授業改善に至るような内容を書いて貰えない可能性があるため、事前に配布する旨を伝えて授業を振り返って貰う。また、コメントは授業改善に繋がること、教員へのインセンティブに繋がることを伝え、コメント記載への協力を依頼している。

研究者は仮説をもって、その研究にあたる。同様に授業にあっても仮説をもって臨むことが適切と感じている。そのことに留意し、授業にあっては学生の様子を観察しながら、授業の組み立てや内容の検証をしている。

5.半学半教という教育哲学

最後に、筆者が教育者として心がけている（心がけたい）ことを記して、本稿を閉じる。慶應義塾には「半学半教」（はんがくはんきょう）という精神がある。これは教える者と学ぶ者の分を定めず、相互に教え学び合うことを意味している。教えることは学ぶことであることを筆者自身も実感している。教育をしながら教育法に磨きがかけれ、学生たちと数多くの討議を経ることで、取り組む研究への気づきや突破口がもたらされることもままある。

この教育観に立つと、学生は受け身で教えを乞う存在ではない。ましてや客でもない。学生は教育や研究の質を高める仲間でありパートナーである。互いに敬意を持って付き合い、その実践がなせるようこの姿勢を貫く所存である。

引用文献

Moreno, R. & Mayer, R. E. (2005). "Role of guidance, reflection, and interactivity in an agent-based multimedia game." Journal of Educational Psychology, 97, 117-128.

相田洋(2003)『ドキュメンタリー私の現場-記録と伝達の40年-』NHK出版

和田充夫(2002)『マーケティング研究における取材の技法』法政大学産業情報センター

竹内伸一、高木晴夫監修(2010)『ケースメソッド教授法入門』慶應義塾大学出版会

i ケース・メソッドの成り立ちや方法については和田(2002) , 竹内・高木(2010)を参照。

ii 相田氏の番組作成にかける哲学や手法については相田(2003)を参照。カット表についても言及されている。

iii相田(2003)188頁

II. 平成 24 年度学習教育研究フォーラム

1. 概要

フォーラムのプログラム

2. 学長教育賞受賞者の講演

3. 授業改善プロジェクト報告

4. パネルディスカッション

「主体的学習に転換する初年次教育を考える」

1. 概要

「学習教育研究フォーラム」は、学内に蓄積されてきた優れた教育改善の実践と研究について語り合い共有する場として平成 19 年度に設けられた。モデルになったのは、徳島大学の「教育カンファレンス」である。徳島大学モデルは、米国の SOTL (Scholarship of Teaching and Learning、大学教員の教育者としての学識を各自の専門性に根差しながら学生の学習を根拠に論議し合う教育コミュニティ) でその運営方法に倣い、2006 年創設当時から研究発表を募集して年 1 回の学会的発表大会を開催している。新潟大学の場合は、徳島方式で開催する試みをしたが軌道に乗らず、平成 24 年度のようなプログラム内容(学長教育賞受賞者講演会、授業改善プロジェクト報告、大教センター企画シンポジウム)に落ち着いている。以下、平成 24 年度「学習教育研究フォーラム」の概要を述べる。

1) 学長教育賞授賞式・受賞者の講演

学長教育賞受賞者 2 名の以下のような講演は、参加者に大変インパクトを与え、両者が編み出した教授法について質問が相次ぎ若干予定時間を越えるほどであった。

1-1. ホップ・アンニャ (Anja Hopf) 准教授 (教育・学生支援機構)

「新潟大学におけるドイツ語教育 - 〈学習者中心の授業〉の試み -」

ホップ准教授の授業の特徴は、学生の理解を深めスキルを定着させるために、学習の達成目標を明確にして綿密に授業デザインをし、学習者中心のアクティブ・ラーニングを実現させていることである。この教育実践は教員・学生から高く評価されている。講演では担当分野の一つであるドイツ語教育を取り上げて、グループ学習を中心に多方向のコミュニケーションを成立させる楽しい学習環境づくりと、自習的な学習を支援する教授法が説明された。

1-2. 飯島 淳彦 准教授 (自然科学系《工学部》)

「ハイテク世代のローテク不足を刺激する授業を目指して」

大人数授業「人間工学論」において多様で若いハイテク世代の学生を対象として、「日常生活」の中の生理学から「役に立つ」工学を効果的に伝授するために、ローテクの良い面にも目を向けさせ刺激を与える教授法を工夫した。講演では具体的に、4つの学生参加型・多方向型(教員と学生、学生と学生による)教授法が、学長や参加者を巻き込みながら巧みに説明された。ここには、学生が推薦する理由の一つである、飯島准教授の聴衆を引き付ける話術も開陳された。

2) 授業改善プロジェクト報告(平成 24 年度採択プロジェクト 5 件の成果)

※ 授業改善プロジェクトとは、平成 17 年度に設置された公募制の授業改善支援事業。本学の教育理念(自立した創造的学習者の育成)を達成するために、学習者中心にシフトした教育・学習改革に関わるプロジェクトを支援し、本学の授業改善を奨励することを目的としている。毎年選考し 5 件程採択。平成 24 年度までの支援プロジェクト 46 件。

ここで報告された 5 件の授業改善プロジェクトは、いずれも新潟大学の教育改善に資する有意義

なもので、達成された成果は参加者に今後の展望を与え、質疑応答が活発に行われた。

2-1. 北村順生 准教授（人文社会・教育科学系《人文学部》）

「災害からみた地域社会の記憶に関する大学間交流授業プロジェクト」

取り組まれたプロジェクトは、東日本大震災を背景として、「ローカルの不思議」（2003年からの全国の大学・短大・高校参加の教育研究プロジェクトの実践）と担当科目「メディア文化論基礎演習 B」を組み合わせた「Bridge! Media311 プロジェクト（2012年10月～2013年3月）」である。

地域社会の記憶をテーマとし、4大学の学生、教員、せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」（わすれん！）のスタッフが、映像による各地域の災害との関わりや被災地の状況についての表現を通じて、被災地内外をつなぐという、インパクトのある学習・教育目標は達成された。

2-2. 柳沼宏寿 教授（人文社会・教育科学系《教育学部》）

「教育現場の題材開発と実践のフィードバックを組み込んだ授業サイクルの構築」

このプロジェクトは、教師を目指す学生の実践的指導力を育成する方法の開発を目的とする。講義では、学生は小学校への出前授業を企画し題材開発をした上で、小学校で実践してその成果を検証する。事前の情報収集と題材開発の際には、子どもに関する情報と前年度履修生の振り返りを参考にし、チューター制のグループ学習形式で活動した。実践の結果をまとめて次年度の履修生のためにプレゼンも行った。このような授業サイクルを構築でき、さらなる改善法も見えてきた。

2-3. 佐藤亮一 准教授（人文社会・教育科学系《教育学部》） 「Gコード情報リテラシー科目のためのスマートフォン・タブレット端末向けデジタル教材システムの開発」

情報設備のない一般教室でも、スマートフォンやタブレット持ち込みで実習や演習の要素を含む情報リテラシーの授業を可能にするために、①アクセスしやすい e-learning サーバを構築し、タブレット用デジタル教材（②画面サイズ/向きに関係せず閲覧可、③アニメ可、④小テスト）を開発する。②は失敗したので、今後の課題は②の改良、「情報教育論」での試行、このプロジェクトの共有、情報リテラシー講義内容の統一である。

2-4. 高橋英樹 教授（人文社会・教育科学系《人文学部》）

「英語で学び、英語で発信する共同的創造的人文知」

新規授業「表現プロジェクト演習 O」（22名）で、英語で学び発信する授業を開発する。英語ネイティブスピーカーの写真家に、写真芸術を学び、3回の学外撮影実習を行い、作品と英語の作品解説文を作成し、展示会をときめいとで開いて作品を公開する。予め依頼した外国人の審査員が作品と英語の作品解説文を審査する。成績評価は、プロジェクト活動 60%、担当教員の作品・作品解説文評価 10%、学生間の相互評価 10%、外国人審査員による評価 20%。英語で学び発信する行為に学生が習熟したことをラーニングポートフォリオの記述から確認できた。この授業の成果は、他大学で注目され参考とされているという。

2-5. 林豊彦 教授（自然科学系《工学部》）「e-learning 英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト」

プロジェクトの内容は、工学部学生の低い英語力（TOEIC IP400 点前後）を向上させるために、1年必修の新規科目「技術英語入門」を開設し、e-learning 教材（アルク教育社 NA2）を用いた自主学習をさせながら、アルク社の英語学習アドバイザーを3回導入して効果的なケアや支援をするというもの。この結果、単位取得条件は修了テストにおける累積得点率の閾値以上で、履修登録者96.4%が単位を取得した。TOEIC IPテストの平均点は過去最高となったという。

3) パネルディスカッション「主体的学習に転換する初年次教育を考える」

初年次教育とは、「大衆化する大学教育において、大学で学ぶ準備のできていない学生の学習を、初期の段階で大学での学習にふさわしい主体的な学習に転換する教育」を意味する。初年次教育の要素としては、大学生活への適応や大学に必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプラン作りの導入などが挙げられている（平成19年中教審学士課程答申、参照）。

初年次教育は、平成19年に中教審学士課程答申でその導入・充実の必要性が唱えられ、平成20年には初年次教育学会が設立されるなど、近年注目を集めている。新潟大学では国内では早い時期から初年次教育に注目し導入してきた。現在全学的に「大学学習法」科目が開講され、その学習到達目標は、全体の41%が学習スキルの獲得、30.6%が学習習慣の確立、15.7%がコミュニケーション能力の育成に置かれ、全体の70%が前期に開講されている。キャリア意識形成科目を国内では早い平成18年に開講したことも、本学の初年次教育の特徴になっている。

このパネルディスカッションでは、初年次教育の全国的動向とその意義をふまえて、本学での初年次教育のあり方や方法について、大学学習法に関する2つの新たな取り組みと、初年次向け各学部横断的なキャリア意識形成科目の取り組みをもとに語り合った。

取り組み事例の1つは、学習スキルの獲得を重視する経済学部経営学科スタディスキルズに関するもので、上級生の補助のもとにレポート添削を入れたレポート作成指導の試みである。上級生には「レポート指導補助育成プログラム（講習と実習）」が提供された。もう1つの事例は、学習スキルの獲得とともに学習習慣の確立も重視する教育学部生活科学コースでの取り組みで、平成24年NBAS試行をもとに課題の抽出を行い、学生の学びが促進されるように新規科目「生活科学総合演習」が開発され試行されている。最後の事例は、キャリア意識形成科目（分野コード「74」）である。授業は学生参加型で進められ、グループディスカッションなどを通じて、自分自身のキャリア形成について自ら考えることで気づきを引き出すプログラムになっているという。

フロアからは、多様な学生に対する初年次教育の在り方について、上級生チューターを活用した工学部事例を基にしたコメント（山際教授）や学内外の参加者の質問があり関心の高さがうかがわれた。論議を通して、初年次教育は1年次の導入教育にとどまるのではなく、専門教育につながる4年間の学士課程教育を通しての課題をもつものであると認識された。

平成 24 年度「学長教育賞授与式・学習教育研究フォーラム」

○開催日：平成 25 年 3 月 13 日（水）10:00～15:30（予定）

○場所：総合教育研究棟 B253

○プログラムの概要：

時 間	内 容〔会場〕
9: 50 ～10: 00	写真撮影〔B254〕
10: 00～10: 20	学長教育賞授与式〔B253〕
10: 20～11: 00	受賞者特別講演会〔B253〕 20 分×2 人 ホップ・アンニャ准教授（教育・学生支援機構）、飯島淳彦准教授（自然科学系）
11: 00～11:05	休憩・準備
11: 05～12: 35	フォーラム開会挨拶（教育・学生支援機構長）：3 分〔B253〕 1 授業改善プロジェクト報告発表 ○授業改善プロジェクトの概要：3 分（大教センター長） ○報告発表：発表 15 分（質疑応答含む）×5 人 移動・準備 3 分 ①北村順生准教授（人文学部）「災害からみた地域社会の記憶に関する大学間交流授業プロジェクト」 ②柳沼宏寿教授（教育学部）「教育現場の題材開発と実践のフィードバックを組み込んだ授業サイクルの構築」 ③佐藤亮一准教授（教育学部）「G コード情報リテラシー科目のためのスマートフォン・タブレット端末向けデジタル教材システムの開発」 ④高橋秀樹教授（人文学部）「英語で学び、英語で発信する共同的創造的人文知」 ⑤林豊彦教授（工学部）「e-learning 英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト」 ○授業改善プロジェクトの活動成果のまとめ：3 分（津田）
12: 35～13: 30	昼食
13: 30～15: 30	2 パネルディスカッション「主体的学習に転換する初年次教育を考える」 ○事例報告 25 分（質疑応答含む）×2 人 ①中東雅樹准教授（経済学部）「初年次教育を起点としたレポート作成スキル向上の取り組み」 ②中村和吉准教授（教育学部）「大学学習法（スタディ・スキルズ）と連携・接続する「学びへの動機づけ」のための授業科目開発」 ○話題提供 20 分 西條秀俊准教授（キャリアセンター） 「初年次教育におけるキャリアセンターの取り組み」 加藤かおり准教授（教育・学生支援機構） 「初年次教育の全国動向と意義」 ○全体討論 フォーラム閉会の挨拶（大教センター長）：3 分

2. 学長教育賞受賞者の講演

1) ホップ・アンニャ (教育・学生支援機構 anja_hopf@ge.niigata-u.ac.jp)

「新潟大学におけるドイツ語教育 - 〈学習者中心の授業〉の試み -」

今の大学生には遠く感じられるであろうヨーロッパのドイツ語文化圏と接することにはどんなメリットがあるのか、まず明確にしたい。日本で教えられる外国語と言えば、たいがい、英語である。それ以外の外国語には大学ではじめて触れるというのが一般的で、またそれが最初で最後だというケースが多いだろう。そのように限られた時間ではあっても、初修外国語を通じて、英語と英語文化圏以外の文化圏と接することで、より多様な世界観を身につけ、多文化的な意識を育むことができるのは、学生にとって、大事なことだと思う。世界のどこに行ってもやっていけるようなコスモポリタンな考え方もつ人間になれる。「日本」対「外国」ではなく、「世界の中の日本」、あるいは「世界の中のドイツ」といった感覚が肌で感じられるのは、英語以外の初修外国語の勉強という体験を通してだと思う。

「ドイツ語は難しいね…」と日本ではよく耳にするが、それはすべての外国語学習に言えるだろう。そうした重労働である外国語学習では、モチベーションが非常に重要になる。退屈する授業では、何も覚えられないし、やる気さえ出ない。卒業後、「私も大学で第二外国語としてドイツ語を勉強したのに、全部忘れてしまった」というふうにさせないために、私がベストな教授法として実践しているのが〈学習者中心の授業〉である。それを紹介しよう。まず達成目標を明確にする。EU内で通用している「ヨーロッパ外国語教育のための共通参照枠」で定められている「レベル A1 (初心者)」を1年生でめざす。ドイツ国内のドイツ語教育で幅広く使用されている、ドイツ語のみの教材を使うことで、学習者は、世界中のドイツ語学習者と同じスタートラインに立つことができる。留学しようと思えば、そのままドイツ国内で開講されるドイツ語クラスに難なく入ることができる。

授業では、上下関係よりも横のつながりを大事にし、お互いに名前さえ覚えれば、発言しやすい楽しい雰囲気をつくることを心がけている。「楽しい」という気持ちになると、覚えられる量が倍になる。90分からなる1コマはリズムよく小分けして、毎回の授業で新たにグループを組み直してもらうことで、お互いにすぐに知り合える。

最終試験よりも日々の学習態度を重視し、宿題や小テストなどを定期的に課すことにより、自習的な学習を身につけさせる。西洋言語文化学プログラムの独文を専攻しない場合でも、副専攻ドイツ語を目指すように応援したり、ドイツ留学への動機付けを行ったりし

ていけば、2年生、さらに3・4年生になってもドイツ語を続けようという気持ちになると思う。授業内ではなるべくドイツ語だけを話し、またドイツの交流協定校から新潟大学に留学している若いドイツ人学生を積極的にチューターとして起用している。そうすると、ドイツ語だけではなく、ドイツのリアルな現実が見えてくる。「教科書」の文字世界から抜けだし、「教室」の壁が崩壊する、そのようなドイツ語授業をこれからも目指したい。

《PPT》

新潟大学におけるドイツ語教育 学習者中心の授業の試み

ホップ・アンニャ

Anja Hopf

特別講演、2013年3月13日

anja_hopf@ge.niigata-u.ac.jp

内容

1. 総合大学でのドイツ語(初修外国語)の意味
1. 学習者中心の授業の試み
3. 具体的な授業の取り組み
4. まとめのかわりに

1. ドイツ語(初修外国語)の意味

★ 広い意味:

コスモポリタンの意識を育つ

- 英語以外の文化圏と触れ合う
- 多文化的な理解を深める
- 異文化コミュニケーションスキルを身につける
- 「日本対外国」ではなく、「世界の中の日本」という意識を育成
- 世界を多角的にみて問題提起ができる人間を育成

★ 狭い意味:

- 独文や副専攻ドイツ語を選ぶ学生の増加

2. 学習者中心の授業の試み

★ドイツ語の授業は学生中心で形成 (communicative approach)

- 達成目標を明確にする (CEFR) 資料①参考
(1年生(初心者): A1-A2, 2年生 A2, 3年生 B1)
- 楽しい学習環境をつくる
(名前をお互いに覚える、発言しやすいに上下関係より横で進む)
- 自習的な学習を応援する
(宿題、小テスト、課題などを出す、自立でチェックさせる、留学の欲望を育つ)

3. 具体的な授業の取り組み

★学習者をグループに分ける 資料②参考

★ドイツ語を授業言語にする

- ドイツ人留学生をチューターとして採用する
- ドイツ語のみの教材を使用する

★90分のクラスを小分けにする

レベル別の目標:

★1年生向けの「ドイツ語・インテンシブ」:

- 世界中のドイツ語学習者と同じスタートラインに立たせる
- 文法より語彙学習やコミュニケーションストラテジーを教える
- ドイツ国内で使用される教材を主に使う
- 後期にはドイツ語でミニ発表をさせる

★2年生向けの「コミュニケーション・ドイツ語」:

- ドイツ語文化圏での留学を仮想に、クラス内外で必要な語彙と発言力を育てる
- 様々な文章を書き、読み、読解力を身につける

レベル別の目標:

★3年生向けの「ドイツ言語文化論」:

- ドイツ語を道具として使えるようになる
- ドイツ語の資料での情報収集(旅行企画)
- ドイツ語でオーディオ、ビデオ作品を作る

上映: Bis bald! またね! (7.44)

(2012年度前期「ドイツ言語文化論」での映像作品例)

4. まとめのかわりに

★教えることは常に勉強でもある!

★ネイティブの教員ではなくても、自信をもって授業でその外国語を使ってほしい!

★ドイツ語文化圏への留学の機会を増やせたら、さらにモチベーションが上がり、生涯学習に結べると思われる。

ご清聴ありがとうございました。

《配布資料①》

Der Europäische Referenzrahmen (GER / CEFR)

ヨーロッパ共通参照枠

表1 共通参照レベル: 全体的な尺度 (Gemeinsame Referenzniveaus: Globalskala)

基礎段階の言語使用者	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。 自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。
	A2	ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。
自立した言語使用者	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
熟達した言語使用者	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。

典:

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/130064

9_06.pdf

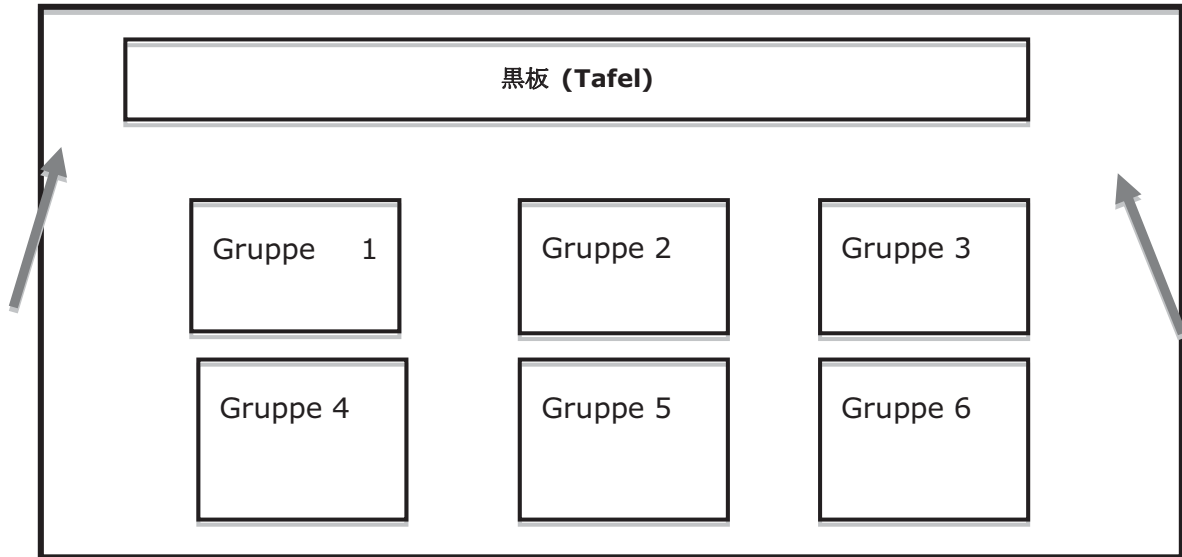
吉島茂 (翻訳) & 大橋理枝 (翻訳): 『外国語教育〈2〉外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、朝日出版社 (2004/10)

《配布資料②》

教室の構造 (Aufteilung im Kursraum)

教室: 1グループが4つのテーブルからなる

→ =学生の視線



注意点:

- 学生は黒板が見えるように座ること (黒板に対して背中向きは×)。
- 定員の奇数の場合“**Gruppe 6**”のように座ること。

2) 飯島淳彦 (自然科学系〈工学部〉)

「ハイテク世代のローテク不足を刺激する授業を目指して」 学長教育賞受賞講演の説明

今回、受賞対象となった科目は、医学系（医学部保健学科・Gコード）開設の「人間工学論」です。人間工学とは、人間が機械や道具、モノを扱うとき、設計するとき、操作・使用する人の「安全性」、「快適性」、「能率」を向上させ、人間がより豊かに生活できるようにする学問領域です。そもそも人間工学は、工学系の科目としてよく開設されますが、工学だけの問題でおさまるはずもありません。「人間工学」は多くの分野を横断的に理解し学んで行く「学際領域・境界領域」の学問分野なのです。工学はもちろんのこと、医学、心理学、社会科学等を幅広く適材適所で取り入れて行く必要があります。

授業担当者は工学部福祉人間工学科の主担当教員ですが、前職は医学部医学科の生理学担当でした。現在も、研究の一部は生理学教室と共同で推進していますし、医学科の授業も担当しています。このような立場から、人間工学のような「人間」に関わる科目の場合、「生理学」の理解が必要不可欠と強く感じております。脳内のしくみ、細胞や神経系のいろは、運動と感覚などの生理学的ポイントを理解しながら工学を学ぶことが、真の境界領域分野の学習だと考えます。

さて、生理学とは一体何なのでしょう。医学の分野では基礎科目として早期に時間をかけて学びます。読んで字のごとく、生き物の理（ことわり）について学びます。生き物の仕組みを知ることが医学への第一歩ですが、工学でも理学でも生き物に関わる学問や研究をする場合は早々に学ぶべきです。私が担当する人間工学論では、受講生の大半が医学部保健学科の1年生で将来は医療従事者になるケースがほとんどです。また工学部や理学部の受講生も、人体や生命に興味のある学生が来てくれますので、常に生理学を意識して授業を進めています。生理学に苦手意識を持つ学生はたくさんいます。しかし、日常生活の中の生理学を拾い上げていくと、生理学が意外と身近に感じます。

授業の進め方について話を移します。近年は、様々な分野で技術革新が行なわれ、教育界でも先進技術が取り入れられています。技術、つまりテクノロジーを議論する際には、ハイテク（High Technology, 先進的な応用技術）とローテク（Low Technology, 昔からある方法）に分類することがあります。例えば、発達障がいのある方のコミュニケーションを考える場合、ハイテク、ローテク以外にノンテク（Non Technology）も考慮します。ノンテクな方法は、道具を使わず身振り手振りやジェスチャーなどでコミュニケーションをとります。ローテクコミュニケーションでは、文字盤や絵の書かれたカードを用いて意思

疎通をはかります。ハイテクはタブレット端末やスマートフォン、パソコンなどの機器を使います。ここで重要なのは、ハイテクだから一番良いということではなく、ユーザにとって適しているものが一番良いもの、という考え方です。場面によってはノンテクが一番適している場合もあるのです。

同じ考え方が病院の中でも適用できます。ノンテクは医師による触診や脈診、ローテクは聴診器による診察、ハイテクはMRIやCTなどの画像診断などがそれに対応します。

ローテクの診断機器として、打腱器を持ってきました。授業の際にもよく使います。これを使って分かることは、神経・筋の機能です。膝下をハンマーで刺激すると下腿が上がる膝蓋腱反射は誰しも経験したことがあります。このメカニズムには、伸張反射に関わる感覚・運動の必須学習事項が盛り込まれていること、情報伝達や伝導、ネガティブフィードバック系の例として分かりやすいことなど、医学・工学のトピックスが盛り込まれていて、我々にとって最適の学習題材なのです。ローテク手法を講義室で体験することは、いとも簡単でしかも分かりやすく面白いのでとても気に入っています。

さて、講義室に眼を向けますと、大学の講義室は暗幕等で薄暗く、静かで、暖かいので、気を抜くとすぐに眠くなります。寝ている学生も散見されます。一方で小学校の1年生の教室をのぞきますと、我先にと挙手しほとんど全ての児童が発言の機会をうかがっています。この違いは何なのでしょう？

これを説明する一つの仮説として、テクノロジーの発達が生徒の授業への参加意欲を低下させる一因ではないかと考えました。最近の学生は、幼少の頃より電子機器に囲まれて成長してきました。大学の講義室も先進化しつつあり、最新のAV機器やスマートなPCからは刺激的な動画がワンクリックで上映されます。洗練されたパワーポイントのスライドを眺めることで勉強した気になっている学生が多くいるように思えます。大学生はハイテクに曝されて大人になったため、ローテク不足に陥っていると感じます。ハイテク授業は、学生を何もしない状態にすることがあります。ノートすらとらない学生がいます。

授業におけるローテクとはどんなものがあるのでしょうか。教員の立場で言えば、板書と手書きのプリント、工作を駆使したデモ用の模型などでしょう。また、手を挙げて発言する、グループで討論・議論するなどもローテク（あるいはノンテク）の営みだと思います。これらをうまく授業に取り入れれば、ローテク不足の学生を刺激し、授業中學生を放置することがなくなります。

私の授業で実践しているローテク不足を刺激する4つの取り組みを紹介致します。

(1) ウロウロインタビュー

私は板書する意外の時間の大半は、マイクを持って講義室の通路にいます。そして、様々な問題を学生に出題しながら、その解答や意見をインタビューしていきます。教員が突然やってきて発言権を与えられますので、学生は気を抜くことができません。しかし、不思議とこの方法に対する苦情は皆無です。「緊張感を持って授業に参加できる」、「他の人の考えていることを知る絶好のチャンス」などと学生は好意的にとらえています。これは学生の授業への参加を促すという目的の他に、プレゼン力の向上を狙ってもあります。台本がありませんので、私からのムチャぶり（突然の無茶な質問や要請）に対してとっさに答えを用意します。無言は NG です。時として面白いことや落ちを言おうとするチャレンジングな学生もいます。この繰り返しにより、学生は人前で何かを言うという基本動作の訓練をすることになります。

(2) 実物主義

実は多くの先生が実践されていると思いますが、私も講義室に色々な道具や実演・実習をするための仕掛けを持って行きます。先に述べました打腱器はその一例です。思いついた物は作ってでも持ち込みます。実際に動かしたり、学生が手に取ったりして実感し体験することで学習意欲を高め定着を促進させるのが狙いです。

(3) つぶやきシート

今日では、ネットの世界に自分の思いや日常の出来事、ちょっとした情報を「つぶやき」として簡単に発信することが出来ます。ユーザはつながりを持ちたいというモチベーション以外にも、何かを発信したいという衝動があるのではないのでしょうか。そうであれば、授業の場でもいろいろとつぶやいて欲しいと思いました。以前までは、授業に対する感想や要望、質問などを「質問シート」に書いて提出してもらい、それなりに学生の声を拾うことができました。この質問シートを「つぶやきシート」とし、質問から日常の出来事、何でもいいからつぶやいてみましょう、としたところ絶大な効果を得ることが出来ました。まず、本当に些細なことでも質問するようになり、それが意外と良い質問だったりすることが多くあります。また、日常の悩みや相談事をつぶやく学生もいて、学生の様子を把握する一助となっています。ネットにつぶやくわけではわりませんので、即時性は低下します。しかし、「要返信」という欄にチェックを入れれば、その日のうちに学務情報システムを通じて返事をしています。また、「公開不可」にチェックが入っていなければ、気になるつぶやきは次の授業で紹介し、他の学生からも意見を求めたりします。これにより、他者の言葉に耳を傾け、他者を思いやるという基本姿勢を、授業を通じて訓練出来ればと思っています。

(4) フリースタイルレポート

授業でレポート課題を出します。テーマは決めますが、形式を自由とします。すると、

思い思いの表現方法で描いてきます。文章で表現するのは標準的ですが、マンガで表現するもの、写真を撮影し貼付けるもの、多色の色鉛筆を駆使し、まるで芸術作品のようなものまであります。もちろん内容も大切ですが、表現すること、読み手に何かメッセージを届けようとする工夫をすることに頭を使ってほしいと考えました。そして、よいレポートは次の授業の際に供覧します。やっつけ作業で提出した学生はショックを受けることもあるでしょう。クラスメートの良いものに感化され、次のレポートの量も質も向上する学生が見られます。

以上、4点の取り組みは、特別な方法ではなく授業の場で実践出来るローテクな方法です。最新の機材を使わない代わりに、学生は頭と体を使います。教員も同様に頭と体を使い90分間を実りある物にしたいと取り組んでおります。もちろん、ハイテクも必要な時には使っています。最新の医療機器を持ち込み、スクリーンに上映しながら説明することもありますので、ハイテクを否定する訳ではありません。ローテクをうまく取り入れることで、学生とともに活気ある授業を進めていけたらと考えております。

◀PPT▶

2013.03.13

平成24年度 学長教育賞 受賞講演

ハイテク世代のローテク不足を 刺激する授業を目指して

自然科学系
工学部・福祉人間工学科

飯島 淳彦

受賞対象となった講義

●人間工学論

医学:医学部(保健学科), 歯学部
Gコード:医学

「人間工学」とは

人間が機器やものを扱うときや設計するとき、それを製造する人や操作・使用する人の「安全性」safety, 「快適性」comfort, 「能率」efficiencyを向上させ、人間がより豊かに生活できるようにする学問領域

「工学」だけの問題なのか？

学際領域, 境界領域の学問

工学, 医学, 社会科学, 心理学など幅広く学ぶ必要がある

自己紹介

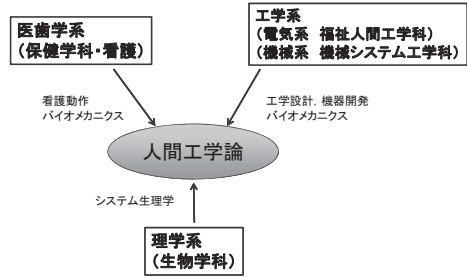
理工学部 電気工学科卒
大学院では生体工学を専攻...博士(工学)

学振特別研究員を経て、初任地は本学医学部生理学第一教室
神経科学(脳や視覚の認知, 自律神経系など)が専門分野

2010年10月, 工学部福祉人間工学科で研究室をOPEN

医工連携の境界領域を活動の場とする
生理学と医工学の授業はお任せ下さい

●履修生の多様性

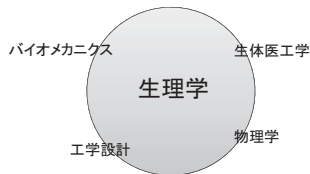


理系である以外の学生の共通点はいったい何？

システムバイオロジー
システム神経生理学 に飢えているのでは...

人間工学論

境界領域・学際領域の学問



生理学に対する苦手意識がある
生理学が初体験

日常生活の中の生理学 → 役に立つ工学(人間工学)

ハイテク: High Technologyの略, 先進的な応用技術.

ローテク: Low Technologyの略, ハイテクの逆.
旧式の, 昔からある方法

例) 障がい者のコミュニケーションの方法

ノンテク

身振り手振り
ジェスチャー
泣く、笑う、うなずく



ローテク

文字盤、筆談
絵の書かれたカード



ハイテク

iPad, スマホ
パソコン



どの方法が最も優れている、ということはない
障がいの度合いや種類で使い分ける、または併用する

医療現場では...

ノンテク

ふれる、さする、押す
素手によるふれあい



ローテク

打診器、聴診器、
採血、注射



ハイテク

MRI, CT
最新医療機器



医療現場では...

ノンテク

ふれる、さする、押す
素手によるふれあい

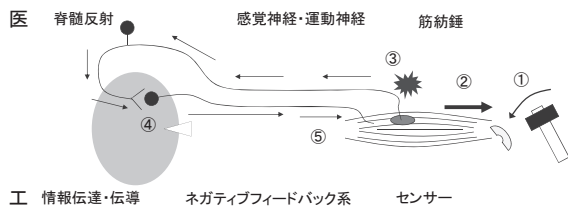
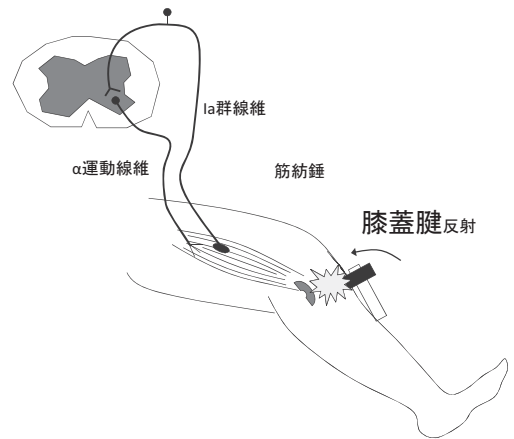
ローテク

打診器、聴診器、
採血、注射



ハイテク

MRI, CT
最新医療機器



一つの題材で、体の構造と機能(解剖・生理学)と意義・応用(工学)が学べる

生体と工学のアナロジー

ローテクはすぐ出来る。しかも、面白い

さて、講義室に眼を向けると

大学の講義室は...

薄暗い(暗幕で...)

静か

暖かい

爆睡を誘引する3条件

一方、小学1年生の教室では

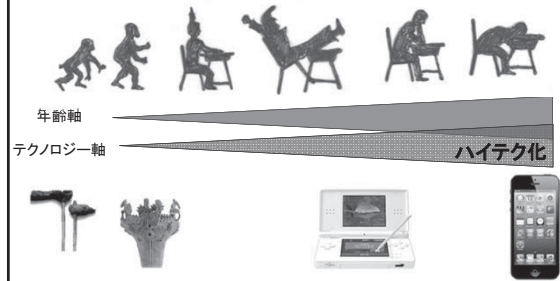
活気あり

我先にと手を挙げ、発言のチャンスをうかがう



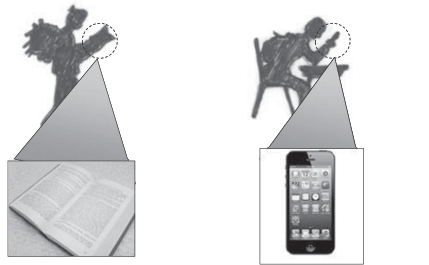
何が違うのか？

学生の進化



ローテク不足!!

学生の進化



ローテク不足!!

授業におけるローテクとは

- 板書
- 手を上げて発言する
- 討論・議論する
- 体験する、実感する、共感する

ローテク不足を刺激しよう！

ローテク不足を刺激する

授業での4つの取り組み

1. ウロウロインタビュー
2. 実物主義
3. つぶやきシート
4. フリースタイルレポート

取り組み①

ウロウロインタビュー

学生に語らせる

こちらの話を聞いてほしい ⇄ 相手の話も聞く

自分の話を聞いてほしい ⇄ クラスメートの話も聞く

その場で考えるチャンス

瞬発力の強化 ⇨ 【最終目標】プレゼン力の強化
(ここまではなかなか到達しないが)

放置しない、参加させる、眠らせない

取り組み②

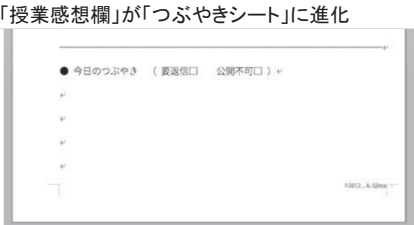
具体例の呈示と実物主義
(体験・実験・実習の導入)

ナマモノに触れる、興味を持たせる、放置しない

取り組み③ つぶやきのやりとり

●授業の感想、質問のやりとり
日常の様子が分かる
(ケアする必要性を感じるようになってきた)

「授業感想欄」が「つぶやきシート」に進化



取り組み③ つぶやきのやりとり

- ➡授業担当教員の仕事ではないのかも知れないが...
手間かける必要あり
- ➡授業担当教員だからこそできるのかも知れない

つぶやきの例
「最近、やる気がでないのですが」

提案・共感・反省・回復

取り組み④ フリースタイル レポート

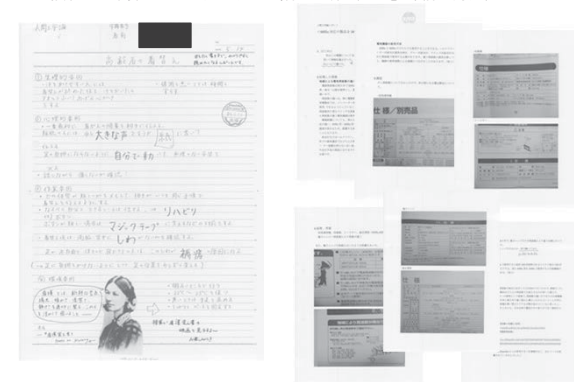
レポート課題に厳格なルールを設けない
(手書き、ワープロ、テキストで、イラストで、写真で、何でも可)

特に1年生向けの対応 本人にとっての実験の場となる

考えるチャンスを与える + 達成感

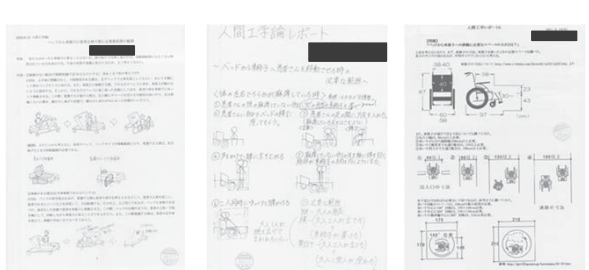
★ 他人のレポートが見てみたい！
かなり効果的、刺激(軽いショック)を受ける様子
よいフィードバックになっているようだ

レポート紹介 (2012年度 レポートより) お題:(1) 着替えの介助. (2) 電気製品の周波数とは？



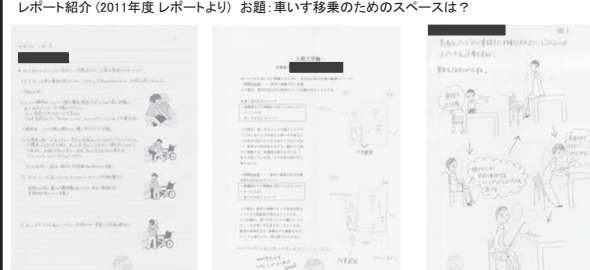
いかに分かりやすく、印象に残るか、様々な工夫をする

レポート紹介 (2011年度 レポートより) お題: 車いす移乗のためのスペースは？



手書きイラストとテキストを併用するもの、
参考文献の資料をもとに分かりやすくまとめたものなど
表現方法は人それぞれ

レポート紹介 (2011年度 レポートより) お題: 車いす移乗のためのスペースは？



図を入れて、視覚的に印象を与えるレポートが多い
絵の得意な学生は、マンガを駆使して仕上げている

成果・効果判定の方法

- ・出席率
- ・レポートの質(量)の向上
- ・つぶやきより
まともな質問をするようになってきた
素朴な質問をするようになってきた(興味を持ってきた証拠)
さらけ出すようになってきた、つぶやきの具体化
- ・自分の意見が言えるようになってくる
- ・人の意見に耳を傾けるようになってくる

まとめ

ハイテクも良いけど、ローテクもね

次の目標は

ローテク: Raw Technologyの略, 飯島の造語

Raw・・・【形】ro:

1. 生の、加工していない、原料のままの、生焼けの、未加工の、ヒリヒリ痛む
2. [傷や寒さなどで]皮のむけた ・His hands are raw from the cold. : 彼の手は寒さで
3. 未熟な、粗野な、下品な
4. [不快な]湿って寒い、ひどく冷たい
5. とても良い、素晴らしい、格好いい、いかした、粋な

ナマモノを使った授業, いかした授業



3. 授業改善プロジェクト報告

1) 北村順生 (人文社会・教育科学系〈人文学部〉)

「災害からみた地域社会の記憶に関する大学間交流授業プロジェクト」

1. はじめに

本稿は、2012年度授業改善プロジェクト経費の支援を受けて実施された地域社会の記憶に関する大学間交流授業「Bridge Media 311 プロジェクト」(以下、「BM311 プロジェクト」)について報告するものである。

2. プロジェクトの背景と目的

(1) 「ローカルの不思議」プロジェクトの実践

BM311 プロジェクトを実施した背景の一つとして、筆者が全国の大学や短期大学、および高等学校と連携しながら実施している地域間交流授業「ローカルの不思議」プロジェクトの実践がある^④。「ローカルの不思議」プロジェクトは、2003年に新潟大学と愛知淑徳大学の間で最初の交流がスタートして以降、北海道から宮崎に至る全国各地域の学校間で交流実践を続けてきた。これまでのところ、大学・短大では11地域17校、高校では6地域7校が参加してきた。



図1 これまでの「ローカルの不思議」参加校

「ローカルの不思議」プロジェクトの活動の中心は、各地域の学生たち(高校においては生徒たち。以下、同様)が自分たちの地域について、何らかのメディア表現(多くの場合は、3分間程度のクイズ形式のショートムービー)を用いて、交流相手校の学生たちへ紹介することにある。その前提として、お互いが日常的に抱いている地域イメージが、東京

を中心としたマスメディアを中心として流されるステレオタイプ的な地域表象に強く影響されていることに気付き、自覚することがある。つまり、「ローカルの不思議」プロジェクトの学びの柱の一つとして、現在のマスメディア・システムが生み出している地域表象における政治性の問題があるのである。

プロジェクトが持つもう一つの学びの柱は、学生たちが相手校に向けてステレオタイプをなんとか克服しつつ伝えようとするメディアリテラシーの側面である。マスメディアの作りだすステレオタイプ的な地域表象とは異なる、オルタナティブな地域の表現をどのように紡いでいくことができるのかという点において、学生たちは実践的にメディアリテラシーを学んでいくのである。

(2) 東日本大震災の発生

今回の BM311 プロジェクトのもう一つの背景が、2011年3月11日に発生した東日本大震災である。前述のように、「ローカルの不思議」プロジェクトでは地域表象における政治性の問題が一つの大きなテーマであったわけであるが、東日本大震災発生後のメディア状況の中に、この問題と通底する問題が顕在化してきた。

その一つは伝えられやすい被災地と伝えられにくい被災地との格差である。例えば、津波の被害として以前から三陸沿岸部は注目を集めていたため、震災直後に報道機関は三陸沿岸部に集中する傾向があった。一方で、宮城県南部の沿岸部は海岸線も直線的で、海岸から平野部が長く続くために、当初はそれほど注目されていなかった。そのため、山元町などは情報網の寸断などの影響もあり孤立状態となり、数日間にわたり忘れられた被災地の状況であったのである。

また、被災地に関する報道が、東京をはじめとした被災地外からの視点に覆い尽くされてしまう状況も出てきた。その中では、被災者が切望した食料や水などの生活情報は報じられることはなく、被災者たちは災害をめぐる画一的な悲劇の物語へと回収されてしまう場面が多かった。

このような東日本大震災で露呈した現在のマスメディア状況の地域的偏在を、地域間の交流という手法を通じて再認識するとともに、それを克服する手段としてオルタナティブなメディア表現の実践を試みるプロジェクトを実施したのである。

3. BM311 プロジェクトの概要

前述のような背景と目的をもった形で、BM311プロジェクトを実施していった。期間は、2012年度の後期（2012年10月～2013年3月）であった。参加校は、新潟大学の他に、群馬大学、関西大学、広島経済大学の各校が参加した。また、被災地・仙台市の公共施設である「せんだいメディアテーク」も会場を提供すると同時に、スタッフが一部参加することとなった。

ただし、参加各校がプロジェクトのすべてのプロセスに参加したわけではない。「ローカ

ルの不思議」と同様に、BM311 プロジェクトは複数のステップから構成されている。その
たま、参加校は必ずしもすべてのステップを経ずとも、部分的な参加も可能である。今回
の各校の参加状況は以下の通りであった。

【ステップ 1】 地域と災害との 関係について 映像制作 <事前活動>

→新潟大学、群馬大学、関西大学、広島経済大学

【ステップ 2】 参加校の交流（1） <ワークショップ>

→新潟大学、群馬大学、関西大学

【ステップ 3】 参加校の交流（2）被災地との交流 <ワークショップ（被災地）>

【ステップ 4】 被災地の取材 <ワークショップ（被災地）>

【ステップ 5】 被災地について 伝える映像の 制作 <ワークショップ（被災地）>

【ステップ 6】 被災地の状況を地元伝える <事後活動>

→新潟大学、広島経済大学

4. プロジェクトの手順

(1) ステップ 1：地域と災害との 関係について 映像制作

最初のステップ 1 では、各校が自分たちの地域の災害との関わりについてあらためて調
査して、その結果を 5~10 分程度の短い映像作品へとまとめた。災害に焦点をあてて、そ
れぞれの地域の歴史や文化についてあらためて再発見をすることが目的であった。

そこで制作された映像のテーマには、大きく二つに分けることができる。最初のタイプ
は、各地域における災害の集団的経験を、地域社会の中でどのように記憶として共有して
いるのかというものだ。例として、新潟では中越地震を後世に伝えていく施設である長岡
の記憶みらい館、小千谷のそなえ館など、中越メモリアル回廊の活動内容について取り上
げるものがあつた。同様に、群馬では浅間山噴火に対する言い伝えや防災活動、あるいは
雷（ごろびかり）に対する伝承などに着目した映像が制作された。また、大阪においても、
阪神・淡路大震災を記憶に残すためのメモリアル・イベントの紹介などが取り上げられて
いた。

もう一つのテーマのタイプが、東日本大震災に対して各地域で実践されている支援活動
について触れるものである。広島では、遠隔地でありながら避難者への支援活動が行われ
ていることが取り上げられていた。その中で、原発地区からの避難者に対して、原爆の経
験を持つ広島という地域がおしなべて優しい寛容な地域であることも触れられ、広島とい
う地域の特徴を再発見するきっかけにもなつた。

このような活動を通じて、災害との関連からみた自分たちの地域の特徴を再認識すると
ともに、映像というメディア表現の特徴も実践的に理解することになった。

(2)ステップ 2：参加校の交流（1）

第 2 段階の活動は、ステップ 1 で制作した映像を地域間で交換し、相互に視聴した上で交流を行うものである。新潟大の場合、このステップは 2 回に分けて、それぞれ異なる方法で行うことになった。

まず最初に、2013 年 1 月 11 日に関西大との交流を行ったが、この際にはインターネット上のテレビ会議システムであるスカイプを用いた交流を行った。



図 2 関西大とのスカイプ交流の様子

スカイプ交流においては、システム上の制約から交流自体は柔軟なやり取りを行うことが難しいため、映像は事前に交換しておき、それぞれが視聴しておく形をとった。また、Facebook のコミュニティ機能を活用して、お互いの自己紹介をするなど交流を円滑に進めていくためのツールとして活用した。その上で、各作品に対する質問や感想、コメントなどをあらかじめ授業内で出して整理しておき、実際のスカイプ交流の場では代表者がそれらのコメント等を発言することにした。また、時間を区切ってその時間に話題とする映像作品を明確化し、議論が拡散しないようにコントロールしていくことを意図した。

次に 2013 年 1 月 23 日に行った群馬大との交流は、実際に同大を訪問しての対面交流を行った。こちらの場合も、事前に Facebook のコミュニティ機能を用いて自己紹介などをしていたが、実際に学生たちが制作した映像を視聴するのは、対面交流の中ではじめて行った。



図3 群馬大との対面交流の様子

対面交流の前半部分では、両校の学生が一堂に介してそれぞれの制作映像の視聴を行った。その上で、映像に関する簡単な質問や感想などを数名がコメントした。

対面交流の後半部分では、両校の学生が混ざる形で3つのグループに分け、それぞれのグループでお互いの作品についてより突っ込んだ議論を展開していった。なぜこの題材をテーマに選んだのか、災害についての日常的な意識はどの程度あるのか、映像を制作して気づいたことはどのようなことか、等々の議論を進めていく中で、参加者たちは災害という視点を通じて空いて地域についての理解を深めていくことになった。さらに、自分たちが制作した映像作品に対する感想や質問などの反応を直接聞くことで、映像表現の特徴についてより深く理解していった。

(3)ステップ3：参加校の交流（2）被災地との交流

この段階では、被災地である仙台市の公共施設「せんだいメディアテーク」を会場として、新潟大および広島経済大という異なる地域の学生たちが対面交流によるワークショップを行った。せんだいメディアテークでは、東日本大震災とその復興の動きを地域の住民たちが自ら映像等の資料として保存していく事業として「3がつ11にちをわすれないためにセンター」（以下、「わすれん！」）が開設されている。ステップ1で各地の学生たちが制作した映像は、このわすれん！のアーカイブにも登録していくことになっている。

ステップ3のワークショップは大きく二つの部分に分かれる。前半部分は参加校同士の交流である、まず全員が一緒に両校の学生たちが制作した映像作品を視聴した。その上で、各作品の制作を担当した学生から作品の狙いや苦労した点などについて紹介があり、その他の学生たちから質問や感想、意見などの発言があり、お互いに議論を交わした。

ワークショップの後半部分は被災地外の参加学生と、被災地の住人であるわすれん！のスタッフとの交流である。わすれん！のスタッフから最初にわすれん！の活動について紹介があった後、学生たちの制作した映像作品についての質問やコメントがされた。



図4 被災地における広島経済大との対面交流の様子

こうしたワークショップを通じて、参加学生たちは災害という視点からみた各地域の特徴や違いについて理解を深めることになった。また、制作した映像に対する直接的な反応を見ることで、映像表現の特徴についても理解を深めた。さらに、被災地内部の視点から自分たちの映像に対してコメントされることで、被災地の内外の間に存在する認識や意識の格差についても学ぶことができた。

(4)ステップ4：被災地の取材

被災地での2日目であるこの段階では、学生たちは被災地の状況取材することとした。「被災地を見て、聞いて、感じる！」と題したこの活動においては、東日本大震災で最大の被害を出した石巻市を訪問し、震災2年弱が経過した被災地の様子を自分の目で見て、現地の人たちの話を聞き、被災地の現状に思いをはせることを課した。その際に、各学生に一人1台のiPadを貸与して、自分が気になったものを写真に撮影したり、気になった人の話を音声に録音するように指示した。



図5 被災地の取材の様子

具体的な訪問地は、津波の被害の大きかった市街地の日和山・門脇・南浜町地区や、地元メディアとして災害に直面したラジオ石巻、および石巻日日新聞を訪れた。また、復興商店街の一つである石巻まちなか復興マルシェでは、学生たちは街中を自由行動し、店主や復興支援で被災地を訪れているボランティアなどに対して、震災やその後の復興の様子について話を聞くなどをした。

このように被災地の現状を実際に見聞きすることで、参加学生たちは被災地の実情をより深く理解することができた。また、それまでにマスメディアで伝えられて理解していた被災地の姿と比較することで、マスメディアの報道の限界、例えば、被災地の外部の視点で伝えることの限界と、被災地内部の人々の気持ちや様子がなかなか伝わらないという現実を強く感じることもできた。



図6 ラジオ石巻の取材



図7 石巻日日新聞の取材



図8 石巻まちなか復興マルシェの取材

(5)ステップ5：被災地について伝える映像の制作

被災地における最終日に実施したのが、ステップ4で実施した被災地の取材をもとにして、被災地の様子を伝える簡単な映像作品を制作することである。自分たちが被災地で見たり、聞いたり、感じたことを、自分たちの地域の人達に伝えるということを目的とした活動を行った。

このステップも大きく二つの場面に分けることができる。まず前半部分では、参加学生たちは両校の学生が混じりある形で複数のグループに分かれる。その上で、被災地取材で感じたことをグループの中で議論し合いながら整理していく。その際に、被災地で撮影した写真を、事前に認識していた様子を被災地の中で「確認」したものと、被災地で新たに「発見」したものに自らの判断で整理・分類していった。こうした枠づけを行うことで、自分が被災地で見たり、聞いたり、感じたことが、被災地外であらかじめ理解していたものとどのような関係にあるのかを意識させることとした。

後半部分では、学生たちは整理・分類した写真を再構成して、被災地に関して感じたことや伝えたいことを、スライドショー形式のショートムービーを作成していった。ツールの面では、iPadの豊富なアプリケーションが、学外でのこうした映像編集作業を実現させることになった。

こうした活動を通じて、被災地の内部と外部との間に存在する認識や意識の違い、あるいは災害に対する温度差についてあらためて実感するとともに、その格差を埋めていくためのコミュニケーションの必要性やその方法論について思考するようになった。また、被災地という他者について表象する映像作りに取り組むことによって、あらためて映像表現の特徴についても理解を深めることになった。

(6)ステップ6：被災地の状況を地元伝える

プロジェクトの最終段階と、さらにプロジェクト終了後のポスト・プロジェクトにも関わるステップとして、参加学生たちは被災地で制作した映像作品をもとにして、被災地外の人たちに被災地の状況をさまざまな手段により伝えていくことを試みた。

具体的には、制作した映像作品のホームページ上での公開、わすれん！での登録と公開

がある。さらには、オープンキャンパスなどの機会でも公開していくことも予定している。

5. プロジェクトの成果

BM311のようなプロジェクトの成果を短期間のうちに計測していくことは難しいが、参加学生たちのリフレクションの中から、学生たちが学び、気づき、発見していったとみられる点について指摘していく。

(1) マスメディアの特徴と限界

BM311プロジェクトの目標の一つとして、既存のマスメディアのシステムが抱えている特徴と限界に気付くという点がある。今回、震災の被災地を訪問し、マスメディアで報じられている内容と実際の現地で知る状況との間のギャップを認識することで、こうしたマスメディアの問題点について深く理解するようになったと言える。

精肉店で主にお話を聞いたのだが、普段メディアでは美談として語られているようなことも、地元の人にとっては迷惑なことだったというお話が印象的だった。

これは、著名な芸能人集団が現地で炊き出しなどを行ったことについて住民が語ったことについての言及である。テレビ等の報道では、芸能人たちの活動が地元の人々に喜ばれている点が強調されていた。しかし、住民たちの話によれば、炊き出しに並んでいたのは現地の被災者たちではなく、多くは外部からやってきた芸能人のファンたちであり、着の身着のまま避難していた被災者たちにとっては迷惑な出来事だったというのである。

テレビなどのメディアで伝えられることには限界があるということも思った。実際にその場所を訪れてみなければわからないことがたくさんある。だから、もっと多くの人に被災地を訪れてほしい。

マスメディアを通じた情報だけで満足せず、気になった事柄については自分の五感で確かめることも大事なのだと痛感した。マスメディアから提供される情報はほんの足がかりだと考えなければならない。自分で調べようと思うきっかけを与えてくれるのがマスメディアなのではないだろうか。

被災者全員が前向きになれるわけではないという話を聞いたことがとても印象的だった。考えてみれば当たり前ではあるが、報道されるのはやはり復興にむけて前向きに取り組む様子ばかりになりがちで、そのような実情を忘れがちであったことに気づかなければいけないと思った。

これらの実感は、震災後 2 年近くが経過しマスメディアでは震災が過去の話となりつつある中で、現地の実感としてはまだまだ復旧や復興は遠いということを強く印象づけられたことによるものであろう。

(2) 地域による違いや人による違い

BM311 プロジェクトでは、地域による違いや格差に気付くことが大きな目標となっている。他の地域の学生たちとの交流や、被災地の人々との交流の中で、他者の存在を意識し、逆に自らの相対的な位置づけについて意識をするようにもなっている。

おそらく、日本全体で震災が忘れかけられているのは、震災に対する意識の低さが今になって露呈しているからであろう。メディアによる報道も、震災に関する特集番組も、震災を知るきっかけとして働いているか。それらがきっかけとして十分でないからこそ、震災への意識は高まらないのではないか。このことは日本全体の問題である以前に、伝える側の問題でもある。

広島にも震災の被災者が避難しているということを知って驚いた。被災地から離れた場所でも、震災にかかわりを持っているのだと感じた。

今回の訪問で感じたことを、それぞれスライドショーにして発表したが、それぞれ感じ方や視点が違っていたことがわかった。

現地の人々と、被災地外の人々では、同じ映像でも受け取り方、趣旨の伝播状況が異なってくる。であるからこそ、双方に同じように伝えようとするのではなく、双方に発見のあるように、インタビューの時点から考慮すべきだと思われる。

(3) 伝えることについて

BM311 プロジェクトでは、2 回にわたり映像を用いた表現活動の実践を行った。これらの活動を通じて、他者について他の他者に伝えていくこと、「伝える」ということに内在する本質的な問題について、参加学生たちの気付きがあったように見える。

取材では「なんで？」を追及していかなければならないこと。自分たちはその人と直接話しているから何かわかったような気になっているが、伝えるにはそれではだめで、聞きにくいことも追及しなければならぬのだということを学んだ。

ドキュメンタリー映像では、一つのテーマについて狭く深く掘り下げていくことが必要なのだと感じた。そのためには事前にもっと広い視野をもって調査を行うことも重要

なのだと思う。たくさんの知識を得てこそ重要な事柄に気づけるのだということを、改めて胸に刻んでおきたい。

デジタルストーリー制作で気付いたことは、写真を利用することで、現地で受けた衝撃や印象的だった場面などを固定化し、印象深い場面をさらに印象深くすることになるという点である。・・・(中略)・・・フレーム内に収まって、止まっていることで、一人一人が印象的に思った場面をさらに印象的に切り取っていることになる。おそらく動画であれば、どの場面が印象的だったのか、固定化したいイメージは何か、視聴者は探り探りで見ることになるので、写真ほど鮮明に印象に残ったり、共感できたりしないかもしれない。

(4) 被災の実情について

BM311プロジェクトに参加した学生にとって最も印象深いのは、やはり被災地を訪れて、目撃したり、聞いたりした被災の実情についてである。被災地で感じることの感情の大きさを受け止めることが、このプロジェクトではやはりもっとも大きな体験となっていた。

無人の民家が佇んでいたり、門脇小学校の様子であったり、お墓が根元から倒されて壊れている様子などは、ショックとしか言えなかった。

取材の途中で地震が来た際、地元の方は何事もなかったように過ごされていた。一方私たちは驚いて机にしがみついた。どれだけ東日本大震災の余震が多く、被災地の方が慣れてしまっているのかをリアルにうかがうことができた。

津波の高さは今までのように数字で聞いてもピンとこなかったのだが、いろいろな所にある津波の高さを示すものや、「ここまで津波がきたんだよ」という話にリアルさを感じ、ここで初めて津波の怖さを知ったような気がした。

今回の研修を通していちばん強く印象に残ったのは、人の強さであった。仙台も石巻も2年前に地震で大きな被害を受けた地域だが、少なくとも私たちが交流した人々は生き生きとしていた。

現地の人々とふれ合うことで強く感じられたのは、彼らが想像以上に冷静な視点から震災を見ているという点である。石巻市内には、至るところに津波の到達地点が示してあり、さらに「津波襲来の地」と示された石碑なども作られている。現地は更地か、がれきが残されている状況にもかかわらず、既に震災のアーカイブ化が進んでいる状況であった。・・・(中略)・・・彼らは震災の重い事実を身をもって体験しているので、あ

のように爪痕を残すことに関しては、ある程度冷静な視点が必要になってくるはずである。復興一辺倒、アーカイブ一辺倒にならず、必要な限りは記憶を残していくという方針が、既に一部出来上がっているように見受けられた。

3日間色々な体験をさせてもらい、伝えたいことがあふれるような感覚があり、この経験を口頭でもなんでも伝えていきたいと強く思った。

しかし一方で、次のような被災地に対して何も感じなかったという学生も存在する。彼は実は被災地の出身であり、実家はそれほどの被害はなかったとはいえ、周囲に大きな被害を受けた親戚や知人が多くいたという。同じ学生たちであっても、そのおかれた状況によって受け取ることが大きく異なることには十分に注意する必要があるであろう。

被災した光景を見てもあまり何も感じなかった。今思い返してみるとなぜ何も感じなかったのだろうか。それほどに非情な人間になってしまったのか、被害の状況を想像できなかっただけなのか。あの日を境に自分に何か違う変化が起きたのか、何も起こっていないのか。自分は何なのか疑う場面にいくつも遭遇した。

6. さいごに

BM311プロジェクトは、災害という現象を対象として捉えながら、地域の中に横たわる多種多様な格差について理解すること、あるいは他者についてメディアを用いて表現し伝えていくことについてあらためて考えていくためのプロジェクトであった。

こうしたプロジェクトの成果として感じるのは、現実の被災地や被災者との出会いの中で、表現すること、他者に伝えることの難しさや困難さを実感したことである。その意味で、学生たちは現実の前に戸惑い、困惑し、立ちすくむ中で多くのことを学びとっていった。

こうした種類の学びの多くは、直ちにその成果が表面にあらわれてくる即効性のものというよりは、本質的ではあるが言語化しにくい学びがじわじわと後になって効いてくるもののように思われる。そうした学びの成果をどのように評価していくのかは、あらためて難しい課題を抱えている。今回はリフレクションによる質的な評価を行ったが、その他の評価方法についても今後の課題として検討していきたい。

【注】

- (1) 「ローカルの不思議」プロジェクトについては、小川(2009)、北村(2008;2013)、坂田ほか(2011)、崔ほか(2005)、などを参照のこと。

【参考文献】

- 小川明子 (2009) 「ローカルの不思議の不思議」水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編『メディアリテラシー・ワークショップ——情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』東京大学出版会, pp. 60-71
- 北村順生 (2008) 「メディア空間と地域イメージの表象」栗原隆編『形と空間の中の私』東北大学出版会, pp. 153-168.
- 北村順生 (2013) 「新潟」という地域イメージについての一考察：地域間交流授業「ローカルの不思議」プロジェクトの実践から」『人文科学研究』, 第 132 輯, pp. 41-55
- 坂田邦子・小川明子・崔銀姫・土屋祐子・川上隆史 (2011) 「地域イメージにおけるステレオタイプの考察——地域間交流学習「ローカルの不思議」の実践事例から」『社会情報学研究』 15 (1), pp. 51-64
- 崔銀姫・北村順生・坂田邦子・小川明子・茂木一司 (2005) 「地域理解のためのメディアリテラシー実践——異文化コミュニケーションとメディアリテラシー活用をめぐる」『教育メディア研究』 11 (2), pp. 73-79

◀PPT▶

災害からみた地域社会の記憶に関する 大学間交流授業プロジェクト ～BM311プロジェクト報告～

学習教育研究フォーラム
授業改善プロジェクト報告
2013.3.13

北村順生(人文学部)

プロジェクトの背景(1)

- 「ローカルの不思議」プロジェクトの実践
 - 2003年より毎年実施
 - 全国の大学、短大、高校が参加する地域間交流の教育研究プロジェクト
 - 自分たちの住む地域について、クイズ映像によるメディア表現の制作・交換を通じて、相互に紹介していく
 - 2つの学びの要素
 - 異文化理解(他者理解)
 - メディア・リテラシー

「ローカルの不思議」プロジェクト

これまでの参加校:

- 大学・短大: 11地域17校
- ▲ 高校: 6地域7校



「ローカルの不思議」プロジェクト におけるこれまでの主な気付き

- 他の地域(=他者)に対して抱いているイメージには、誤解、偏り、ステレオタイプが多い。
- 地域イメージの形成には、マスメディアの影響力が大きい。
- その背後には、マスメディア・システムの構造(東京一極集中、東京からの視線による地域表象)が影響している。
- 誰が、誰を、どのような立場から描いているのか?
「地域表象の政治性」
- マスメディアの作りだすステレオタイプの地域表象とは異なる、**オルタナティブな地域の表現の必要性**。

プロジェクトの背景(2)

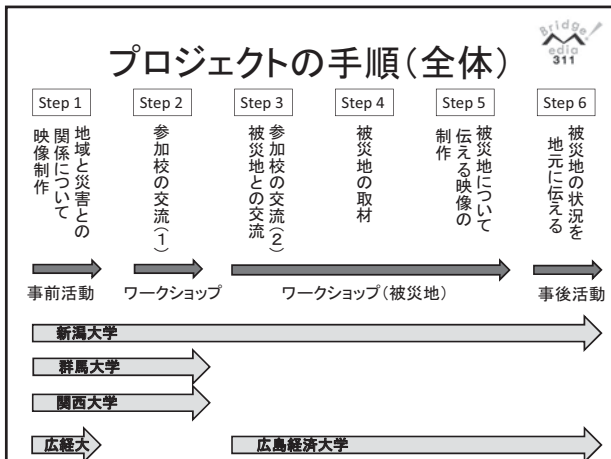
東日本大震災の発生

- 被災地をめぐるマスメディアによる大量の報道
- 「ローカルの不思議」プロジェクトで問題としていた「**地域表象の政治性**」があらためて顕在化
 - 伝えられやすい被災地／忘れられた被災地
 - 東京の視線で切り取られる被災地の姿
 - 画一的な「物語」へと回収されてしまう被災者の個別体験

プロジェクトの概要

「Bridge! Media 311」(BM311)プロジェクト

- 時期: 2012年10月～2013年3月
- 参加者:
 - 新潟大、群馬大、関西大、広島経済大の学生、教員
 - せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(わすれん!)のスタッフ
- 目標:
 - 映像による、各地域の災害との関わりや被災地の状況についての表現を通じて、被災地内外をつなぐ



【Step 1】地域と災害との関係について映像制作

- 自分たちの地域の災害との関わりを、あらためて調べる。
- 5～10分程度の映像作品にまとめる。

テーマ例

- 各地の災害の経験を、地域社会の中でどのように記憶として共有しようとしているのか。
 - <新潟大>中越メモリアル回廊(長岡「きおくみらい館」/小千谷「そなえ館」など)の活動内容
 - <群馬大>浅間山の噴火/雷(ごろピカリ)
- 各地域で実施されている被災者向け支援活動
 - <広島経済大>広島への避難者への支援活動

↓

- 災害を軸にした地域の再発見
- 表現活動を通じた映像メディアの特性の理解

【Step 2】参加校との交流(1)

- 各地域で制作した映像作品を視聴
- 視聴後に相互に感想や意見をコメント

交流の方法

- 関西大との交流 2013.1.11 スカイプによる交流
- 群馬大との交流 2013.1.23 対面交流(@群馬大)

↓

- 災害を軸にした相手地域への理解
- 相手からの反応による映像表現の特徴の理解

【Step 3】参加校同士との交流(2) 被災地との交流(WS1日目)

- 被災地(せんだいメディアテーク)で直接交流(2013.2.12)
 - 新潟大学/広島経済大学
- 各地域で制作した映像作品を視聴
- 視聴後に相互に感想や意見をコメント
- せんだいメディアテーク・スタッフから「わすれん！」の活動の紹介
- せんだいメディアテーク・スタッフから被災地の視点からのコメント

↓

- 災害を軸にした相手地域への理解
- 相手からの反応による映像表現の特徴の理解
- 被災地からの反応による被災地内外の意識の格差の発見

【Step 4】被災地の取材(WS2日目)

- 「被災地を見て、聞いて、感じる！」
 - 被災地(石巻市)を訪問して、取材する
 - 主な訪問先
 - 日和山・門脇・南浜町地区/石巻日日新聞/ラジオ石巻/石巻まちなか復興マルシェ
- iPadを活用して、自分が気になったものや話を写真と音声に記録

↓

- 被災地の実情の理解
- マスメディアの限界の認識

【Step 5】被災地について伝える 映像の制作(WS3日目)



- ・「被災地で見たこと、聞いたこと、感じたこと」
 - 被災地取材の結果、感じたことをグループで議論しあいながら整理する
 - 被災地について自分たちの地域へと伝えるための映像(スライドショー)を作成する
 - ・ 第1段階: 被災地の写真を「事前に認識していた様子を確認したもの」と「新たに発見したもの」に整理・分類
 - ・ 第2段階: 整理した写真を再構成して、被災地について感じたこと、伝えたいことをスライドショーの形式で表現



- ・ 被災地内外の意識の温度差を埋めるための思考
- ・ 表現活動を通じた映像メディアの特性の理解

【Step 6】被災地の状況を 地元伝える



- ・ 被災地の状況をさまざまな形で地元伝える
- ・ 制作した映像の公開
 - インターネット上での公開
 - オープンキャンパスでの上映
 - 個人的に周囲の人とコミュニケーション

プロジェクトの成果 ～学生のリフレクションより～



マスメディアの特徴と限界について

精肉店で主にお話を聞いたのだが、普段メディアでは美談として語られているようなことも、地元の人にとっては迷惑なことだったというお話が印象的だった。

テレビなどのメディアで伝えられることには限界があるということも思った。実際にその場所を訪れてみなければわからないことがたくさんある。だから、もっと多くの人に被災地を訪れてほしい。

マスメディアを通じた情報だけで満足せず、気になった事柄については自分の五感で確かめることも大事なだと痛感した。マスメディアから提供される情報はほんの足がかりだと考えなければならない。自分で調べようと思うきっかけを与えてくれるのがマスメディアなのではないだろうか。

被災者全員が前向きになれるわけではないという話を聞いたことがとても印象的だった。考えてみれば当たり前ではあるが、報道されるのはやはり復興にむけて前向きに取り組む様子ばかりになりがちで、そのような実情を忘れがちであったことに気づかなければいけないと思った。

地域による違い、人による違いについて



おそらく、日本全体で震災が忘れかけられているのは、震災に対する意識の低さが今になって露呈しているからであろう。メディアによる報道も、震災に関する特集番組も、震災を知るきっかけとして働いているか。それらがきっかけとして十分でないからこそ、震災への意識は高まらないのではないのか。このことは日本全体の問題である以前に、伝える側の問題でもある。

広島にも震災の被災者が避難しているということを知って驚いた。被災地から離れた場所でも、震災にかわりを持っているのだと感じた。

今回の訪問で感じたことを、それぞれスライドショーにして発表しあったが、それぞれ感じ方や視点が違っていたことがわかった。

現地の人々と、被災地外の人々では、同じ映像でも受け取り方、趣旨の伝播状況が異なってくる。であるからこそ、双方に同じように伝えようとするのではなく、双方に発見のあるように、インタビューの時点から考慮すべきだと思う。

「伝える」ことについて



取材では「なんで？」を追及していかなければならないこと。自分たちはその人と直接話しているから何かわかったような気になっているが、伝えるにはそれではだめで、聞きにくいことも追及しなければならぬのだということも学んだ。

ドキュメンタリー映像では、一つのテーマについて狭く深く掘り下げていくことが必要なのだと感じた。そのためには事前にもっと広い視野をもって調査を行うことも重要なのだと思う。たくさん知識を得てこそ重要な事柄に気づけるのだということも、改めて胸に刻んでおきたい。

デジタルストーリー制作で気付いたことは、写真を利用することで、現地で受けた衝撃や印象的だった場面などを固定化し、印象深い場面をさらに印象深くすることになるという点である。…(中略)…フレーム内に収まって、止まっていることで、一人一人が印象的に思った場面をさらに印象的に切り取っていることになる。おそらく動画であれば、どの場面が印象的だったのか、固定化したいイメージは何か、視聴者は探り探りで見ることになるので、写真ほど鮮明に印象に残ったり、共感できたりしないかもしれない。

被災地の実情について



無人の民家が佇んでいた、門脇小学校の様子であったり、お墓が根元から倒されて壊れている様子などは、ショックとしか言えなかった。

取材の途中で地震が来た際、地元の方は何事もなかったように過ごされていた。一方私たちは驚いて机にしがみついた。どれだけ東日本大震災の余震が多く、被災地の方が慣れてしまっているのかをリアルにうかがうことができた。

津波の高さは今までのように数字で聞いてもピンとこなかったのだが、いろいろな所にある津波の高さを示すものや、「ここまで津波がきたんだよ」という話にリアルさを感じ、ここで初めて津波の怖さを知ったような気がした。

今回の研修を通していちばん強く印象に残ったのは、人の強さであった。仙台も石巻も2年前に地震で大きな被害を受けた地域だが、少なくとも私たちが交流した人々は生き生きとしていた。

現地の人々とふれ合うことで強く感じられたのは、彼らが想像以上に冷静な視点から震災を見ているという点である。石巻市内には、至るところに津波の到達地点が示してあり、さらに「津波襲来の地」と示された石碑なども作られている。現地は更地か、がれきが残されている状況にもかかわらず、既に震災のアーカイブ化が進んでいる状況であった。…(中略)…彼らは震災の重い事実を身をもって体験しているので、あのように爪痕を残すことに関しては、ある程度冷静な視点が必要になってくるはずである。復興一辺倒、アーカイブ一辺倒にならず、必要な限りは記憶を残していくという方針が、既に一部出来上がっているように見受けられた。

3日間色々な体験をさせてもらい、伝えたいことがあふれるような感覚があり、この経験を口頭でもなんでも伝えていきたいと強く思った。

被災した光景を見てもあまり何も感じなかった。今思い返してみるとなぜ何も感じなかったのだろうか。それほどに非情な人間になってしまったのか、被害の状況を想像できなかっただけなのか。あの日を境に自分に何か違う変化が起きたのか、何も起こっていないのか。自分は何なのか疑う場面にいくつも遭遇した。

最後に ～個人的感想～



・「たちすくむこと」の意義

- 現実の被災地や被災者との出会いの中で、表現すること、他者に伝えることの難しさ、困難さを実感
- 学生たちだけではなく、プロのジャーナリストや表現者たちも…
- たちすくみながらも、なんとかコミュニケーションしていくこと、つながりを持つとすることの意義

・即効性よりは遅効性

- 分かりやすい学びが直ちに得られるというよりは、本質的ではあるが言語化しにくい学びが、じわじわと効いてくるものか？

2) 柳沼宏寿 (人文社会・教育科学系〈教育学部〉)

「教育現場の題材開発と実践のフィードバックを組み込んだ授業サイクルの構築」

1 はじめに

大学全入時代ともいわれる中、大学の授業改善は少数精鋭育成の視点から知的水準を維持しようとするのではなく、学生の実態に応じた内容とカリキュラムで全体の底上げを図る視点へとシフトし、社会へ即戦力を持って貢献できる人材を多数育成すべきであろう。私はこれまでその考え方から大講義室における双方向授業や社会的組織との連携による授業を推進し、彼らに潜在するポテンシャルを引き出すべく授業改善に取り組んできた。これらの取り組みを踏まえた上で、現在はさらに「実践的指導力」の育成方法の開発に取り組んでいる。「実践的指導力」とは、現場において、状況に応じた柔軟な思考と知恵に支えられた能力を意味する。教育界においても教員の資質向上とりわけ実践的指導力が要請されている状況において、筆者は現場における授業構想を大学の講義で練り上げ、実際に検証し、その結果をその講義や次年度の講義へフィードバックするサイクルを構築してきた。

この取り組みの中で、本論で取り上げる新潟市立中野山小学校で実施した題材は、現場からの要請を受け、これまで7年に渡り文科省の芸術家派遣制度による依頼を継続している。ほぼ毎年の恒例となってきたこの機会を講義のカリキュラムにも組み入れながら、さらに高い次元で活用し学生の実践的指導力を育もうというのが本プロジェクトの目的である。

2 取組みの内容

講義においてカリキュラムに組み入れている新潟市立中野山小学校への出前授業は毎年11月中旬に行われている。講義は後期の7周目から8周目にあたる。本年度は11月15日(木)に実施され、学生38名(造形教育論、造形教育方法論、図画工作)で出向いてきた。この授業は、4月以来小学校の担当教員と連絡をとりながら、子ども達の実態や要望について情報収集し、学生からの提案を小学校側へ伝えるとともに、児童らの反応を講義へフィードバックしてきた。

本題材は基本的に小グループを編成し、共同制作として推進した。構想を練る段階では、「チューター制」を取り入れた。リーダー的役割の学生に対し、制作や活動の内容を事前に周知し、教員からの一斉指導を簡略化しながら、なるべくリーダーがグループの構成員に関わることができるよう配慮した。また、情報伝達の方法としてモバイル端末機を利用して、過去の成果を共有したり自分達の実践の記録を行ったりした。さらに、前年度履修生からの話を聞く機会を設定し、先輩から後輩への情報伝達を取り入れると共に、次年度へのつながりも意識させながら授業を行った。

3 取り組みの成果

取り組みの成果は以下の通りである。

- ①教育現場での実践を目標化することにより学生の意欲喚起と集中力の持続に効果があることがわかった。
- ②「チューター制」を取り入れることにより、情報共有に際して効率科が図られるとともに、作業における自分の役割を明確にすることができた。また、教員からの一方的な教授よりも、自治的な学びの体制が学習意欲に効果をもたらしたことと、役割が生じることで所属感や自己肯定感が得られた。
- ③前年度履修生からの情報のフィードバックは、教員とは異なった学生レベルの視点からのアドバイスがあり、学生にとってもリアリティのある学びとなった。
- ④モバイル端末機の利用によって、グループごとに昨年度の実践内容や本年度当日の内容等について共有したり、必要な情報を個別に取り出して参考にしたりしながら題材開発に取り組むことができた。

学生は、自分達の発想や構想が現場の教師や子どもたちにどのように受け止められたのかを知ることによって、自らの現状を客観的に認識することができたと同時に、新たな目標をイメージすることへもつなげることができた。本プロジェクトでは、そのようなフィードバックの積み重ねを小グループの自治的な組織活動において積み重ねたことが「実践的指導力」の形成に大きく寄与したと考えられる。取り組みの達成度は、教育現場や前年度履修生との交信における情報のフィードバックという点において高いレベルに達し、授業改善に十分な効果を発揮したと判断できる。

4 今後の展開

本プロジェクトで目指したのは、前年度から本年度へのフィードバックサイクルばかりでなく、次年度へも継続するものである。その系統性を持続する構えを指導者として明確に意識していくことが必要である。また、それぞれのサイクルをスムーズに機能させるためには学生間のコミュニケーションが重要であり、チューター制の運用改善や前年度履修生からの講師確保など、授業外での下準備を事前に推進していくことが求められる。今後は、講義が始まる以前と終了後の作業についても共有可能な授業改善プログラムとして構築していきたい。



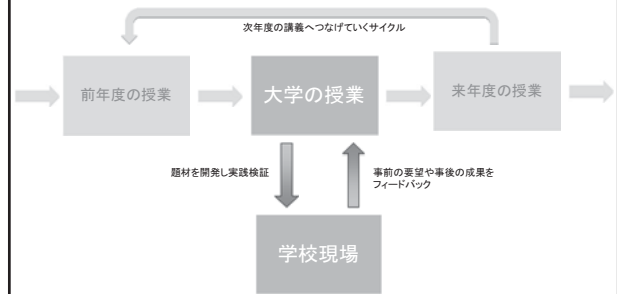
教育現場の題材開発と実践のフィードバックを組み込んだ
授業サイクルの構築

平成24年度授業改善プロジェクト報告

新潟大学教育学部 柳沼宏寿

【プロジェクトのねらい】

将来教員を目指す学生に実践的指導力を育成するための授業改善



【取り組みの具体的な内容】

概要：小学校への出前授業を大学の講義で企画し実践する
対象：新潟市立中野山小学校；3学年85名）11月15日（木）
題材：「おおきな〇〇がやってきた ～巨大バルーンをつくってあそぼう～」
実施講義：造形教育論、図画工作（学生38名）

<題材開発の教育的意義>

- ・学年全体の児童が体育館に集まって、共同製作の面白さを体感する。
- ・子どもだけでなく教師も、教育活動における場所性の効果を知ることができる。
- ・造形活動において、造形要素（塊や動勢）をヒューマンスケールで学ぶことができる。
- ・自分達の表現した造形を外部と内部の双方から体感的に学ぶことができる。
- ・表現活動において、子どもと共に夢を追いかける（ビジョンを共有しつつ取り組む）過程を創出することができる。

【取り組みの具体的な内容】

[授業計画]

- 4月（事前）小学校の担当教員から子ども達の実態や要望について情報収集
- ↓
- 10月（講義）前年度履修生からのアドバイスを聞く
学生からの提案を小学校へ送付する
- ↓
- （現場）子ども達からの期待や要望を集約し大学へ伝える
- ↓
- （講義）児童らの反応を講義へフィードバックし、製作へ取りかかる
- ↓
- 11月（現場）出前授業の実践
- ↓
- （講義）実践の成果と課題を検証する

【取り組みの具体的な内容】

[授業改善の視点]

1 情報のフィードバック

教育現場からの情報
前年度履修生からの情報

2 チューター制

リーダー適役の学生に対し制作や活動の内容を事前に周知し、教員からの一斉指導を簡略化しながら、リーダーがグループの構成員に関わることができるよう配慮した。

3 モバイル端末機の利用

モバイル端末機(iPod touch)を利用して、過去の成果を共有したり自分達の実践の記録を行ったりした。



【取り組みの具体的内容】

[授業改善の視点]

1 情報のフィードバック

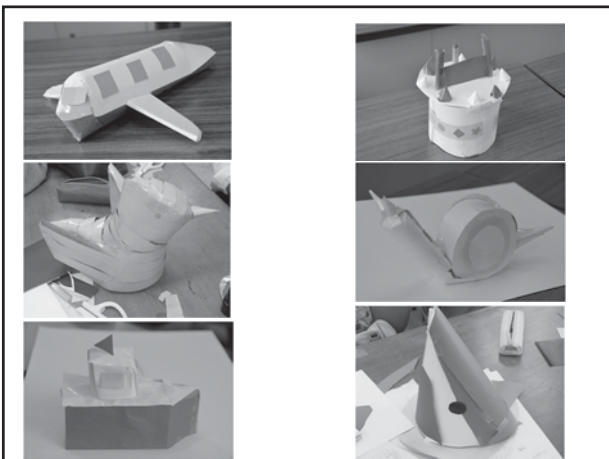
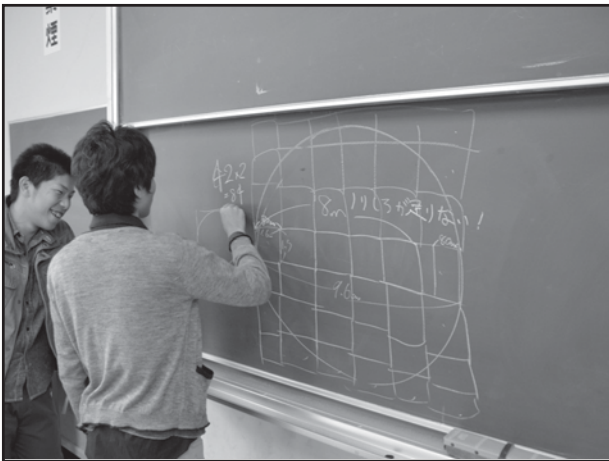
教育現場からの情報
前年度履修生からの情報

2 チューター制

リーダー適役割の学生に対し制作や活動の内容を事前に周知し、教員からの一斉指導を簡略化しながら、リーダーがグループの構成員に関わることができるよう配慮した。

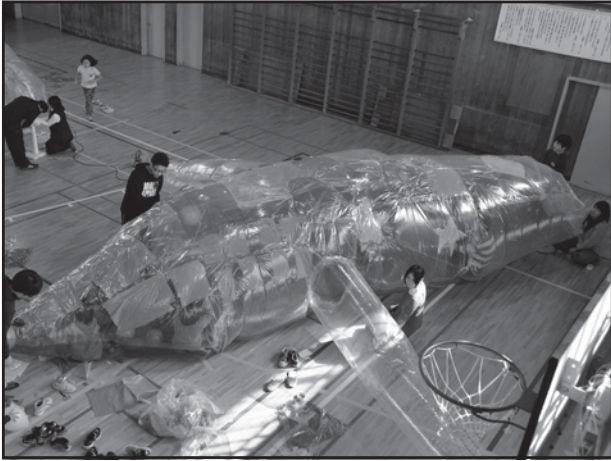
3 モバイル端末機の利用

モバイル端末機(iPod touch)を利用して、過去の成果を共有したり自分達の実践の記録を行ったりした。









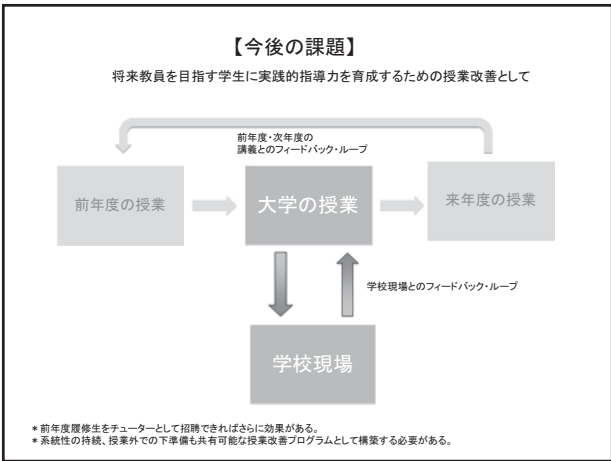


【取り組みの成果、達成度】

- 教育現場での実践を目標化することで学生の意欲喚起と集中力の持続に効果があった。
- 教育現場や前年度履修生からの情報のフィードバックは、教員とは異なった学生レベルの視点からのアドバイスがあり、学生にとってもリアリティのある学びとなった。
- 「チューター制」を取り入れることにより、
効率的に情報の共有化が図られた。
自分の役割が明確化できた。(所属感、自己肯定感)
自治的な学びの体制が構築され、学習意欲に効果をもたらした。
- モバイル端末機の利用によって、
グループごとに情報(昨年度の実践内容等)を効果的に利用できた。
学習場面に応じて必要な情報を個別に取り出して参照することができた。
- 取り組みの達成度は
教育現場や前年度履修生との情報発信によって学習意欲が高められ、また、学習内容の高度化への足がかりとなった点において、授業改善に十分な効果を発揮した。







3) 佐藤亮一 (人文社会・教育科学系〈教育学部〉)

「Gコード情報リテラシー科目のためのスマートフォン・タブレット端末向けデジタル教材システムの開発」

《PPT》

Gコード情報リテラシー科目のためのスマートフォン・タブレット端末向けデジタル教材システムの開発

教育学部・佐藤亮一

はじめに

平成24年度 第1学期Gコード科目履修申請・許可状況(細区分別)^{*1}

再区分	科目数	申請者数	許可者数	不許可数	不許可率	定員数
情報リテラシー	15	2,272	1,310	962	42.3%	1,420

^{*1}「教育・学生支援機構 教育支援センター 教育実施部門 部会代表者・委員会議(5/28/2012)」資料2-1より抜粋

平成23年度 第1学期Gコード科目履修申請・許可状況(細区分別)^{*2}

再区分	科目数	申請者数	許可者数	不許可数	不許可率	定員数
情報リテラシー	18	2,149	1,234	915	42.6%	1,548

^{*2}「教育・学生支援機構 教育支援センター 教育実施部門 部会代表者・委員会議(5/28/2012)」資料2-2より抜粋

はじめに

平成24年度 第1学期Gコード科目履修申請・許可状況(科目別)^{*1}

再区分	履修番号	科目名	教員別名	申請者数	許可者数	不許可者数	不許可率	定員
情報リテラシー	120G3001	情報知識概論AI	永井 雅人	201	142	59	29.4%	400
情報リテラシー	120G3002	情報機器操作入門	小野 智	207	53	154	74.4%	50
情報リテラシー	120G3003	情報機器操作入門	渡辺 秀典	68	52	16	23.5%	50
情報リテラシー	120G3004	情報					24.2%	50
情報リテラシー	120G3005	情報					27.0%	50
情報リテラシー	120G3006	情報					71.9%	50
情報リテラシー	120G3007	情報機器操作入門	岡 秀樹	176	50	126	71.6%	50
情報リテラシー	120G3008	情報機器操作入門	松本 眞里子	81	53	28	34.6%	50
情報リテラシー	120G3009	情報機器操作入門	松本 眞里子	81	51	30	37.0%	50
情報リテラシー	120G3010	情報機器操作入門	小野 智	216	50	166	76.9%	50
情報リテラシー	120G3011	情報機器操作入門	小野 智	226	51	175	77.4%	50
情報リテラシー	120G3012	情報教育論	佐藤 亮一	142	127	15	10.6%	110

実習・演習なし 650/1,420*100=45.8%

はじめに

原因

- 情報機器設備を有する教室の不足

- 「情報教育」専任教員の不足(厳密には全学で1,2名?)

目的

「座学」だけでなく、「実習」、「演習」の要素も含んだ情報リテラシー科目を開講できるようにしたい。

情報設備のない一般教室においても、「実習」、「演習」の要素を含む情報リテラシーの授業を可能にしたい。

目的

情報設備のない一般教室では...
PCなし、電源コンセントなし、情報コンセントなし

スマートフォン/タブレット持ち込み型の授業



目的

ハードウェア

- スマートフォン/タブレットからアクセスしやすい e-learningサーバの構築

ソフトウェア

- スマートフォン/タブレットの画面サイズ/向きに関係せずに閲覧できるデジタル教材
- アニメーション表示も可能なデジタル教材
- 理解度チェックのための小テスト

e-learningサーバ

moodle

Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment
(モジュラーなオブジェクト指向ダイナミック学習環境)



e-learningサーバ

moodle

- パソコン
- Apache + PHP + MySQL

e-learningサーバ





目的

ハードウェア

- スマートフォン／タブレットからアクセスしやすい e-learningサーバの構築

ソフトウェア

- スマートフォン／タブレットの画面サイズ/向きに関係せずに閲覧できるデジタル教材
- アニメーション表示も可能なデジタル教材
- 理解度チェックのための小テスト

タブレット用デジタル教材

- レプリカタイプ (PDF等)

情報リテラシーとは？
紙媒体

→

情報リテラシーとは？
PDF等
- リフロータイプ (EPUB等)

情報リテラシーとは？

↔

情報リテラシーとは？
あら？

行の折り返し＝スクリーンの大きさに左右されない

タブレット用デジタル教材

- HTML5で簡易的に処理

PC

パワーポイント

スマートフォン/タブレット

HTML5

追加アプリケーションなし



目的

ハードウェア

- スマートフォン／タブレットからアクセスしやすい e-learningサーバの構築

ソフトウェア

- スマートフォン／タブレットの画面サイズ/向きに関係せずに閲覧できるデジタル教材
- アニメーション表示も可能なデジタル教材
- 理解度チェックのための小テスト

小テスト

- 小テスト表示例 (iPad)



教育学部無線LANシステムでの検証

日時: 3月1日(金) 13:00-17:00

場所: 教育学部 204, 105教室



まとめ

ハードウェア

- スマートフォン／タブレットからアクセスしやすい e-learningサーバの構築

ソフトウェア

- × スマートフォン／タブレットの画面サイズ/向きに関係せずに閲覧できるデジタル教材
- アニメーション表示も可能なデジタル教材
- 理解度チェックのための小テスト

今後の展開

1. リフロータイプのデジタル教材の改良
2. 「情報教育論」で本プロジェクトのシステムを試行
3. e-learningシステム, デジタル教材の共有化
情報基盤センターの設備 (Webサーバ) の利用
4. 「情報リテラシー」講義内容の統一
(最低限のレベルの確保)

4) 高橋秀樹 (人文社会・教育科学系〈人文学部〉)

「英語で学び、英語で発信する共同的創造的人文知」

対象授業科目「表現プロジェクト演習 O」(第 1 学期 金曜 5 限)

経緯 文部科学省 GP「社会をひらく「きづく力」と「つなぐ力」」により実施してきた授業群「表現プロジェクト演習」について外部評価を行った際に、地域との連携や国際的な観点の導入を期待するコメントがあった。このコメントに応える授業改善として、「表現プロジェクト演習 O」を新規開設した。授業改善プロジェクト経費は、その授業運営のために使用した。

趣旨 英語を学ぶのではなく、英語で学び、協同による創造的な活動を、英語で発信する。
英語教育開発の一環 及び グローバル人材育成の一環
地域・日本の文化・価値の再発見と、国際的な発信

概要 学生定員 15 名 (50 名程度の履修希望者があったが、実習の移動手段の制約などのため、抽選により 22 名を受け入れた。)

英語ネイティブスピーカーの写真家 (Judy Kambara 氏) に、写真芸術を学ぶ。
授業は英語で行う。

撮影実習を行う。

撮影した作品の展示会を、一般市民に向けて行う (於ときめいと)。

作品の解説を英文で付す。(散文、韻文を問わない)

予め依頼した外国人の審査員 (4 名) により、作品と解説文を審査してもらう。

講義スケジュール

- #1 講師紹介 (日本人教員による) 授業内容の説明
- #2 講師作品を用いた作品例解説 第 1 回撮影実習地の説明
- #3 第 1 回撮影実習 (五十嵐キャンパス)
- #4 実習作品の論評 及び 第 2 回撮影実習地の説明
- #5 第 2 回撮影実習 (白山神社: 歴史的景観の撮影実習)
- #6 実習作品の論評 及び 第 3 回撮影実習地の説明
- #7 第 3 回撮影実習 (古町: 都市的景観の撮影実習)
- #8 実習作品の論評 及び 第 4 回撮影実習地の説明
- #9 第 4 回撮影実習 (新川漁港: 自然景観と生活・産業景観の撮影実習)
- #10 実習作品の論評 展示会出品作品選定 (→業者へパネル発注)

- #11 ポスター、DM 制作
- #12 作品解説英文作成
- #13 学生間での事前発表と相互論評 第 1 グループ
- #14 学生間での事前発表と相互論評 第 2 グループ
- #15 展示会設営 (於ときめいと)
- #16 展示会撤収 各種評価内容の配布 担当教員の総評

(作品介绍 これらの写真をどのように成績評価するか?)

↓

成績評価

評価方法 A 授業パフォーマンスの評価：教員から指示された学習作業を実行したか

+

評価方法 B 成果物(アウトプット)の評価：学習の結果により生み出されたものは評価できるか

授業パフォーマンス評価：12 の観点から評価 全体で成績の 60%

Score of 12 Performances

- 第 1 回撮影実習への参加
- 第 1 回撮影実習作品の提出 2 作品
- 第 2 回撮影実習への参加
- 第 2 回撮影実習作品の提出 2 作品
- 第 3 回撮影実習への参加
- 第 3 回撮影実習作品の提出 2 作品
- 第 4 回撮影実習への参加
- 第 4 回撮影実習作品の提出 2 作品
- 展示作品用キャプション提出
- ポスター及DM作成への参加
- 展示・撤収作業への参加
- ポートフォリオ記入

成果物(アウトプット)評価：3 つの観点から評価 全体で成績の 40%

教員による作品及び解説文評価 (成績評価資料 1)

Instructor's Score 10%

学生間の相互評価 (成績評価資料 2)

Student Mutual Evaluation 10%

審査員による作品及び解説文評価 (成績評価資料 3)

External Evaluation (4 Evaluators) 20%

※ 最終授業（展示会撤収）の際に学生に配布

授業効果

【ポートフォリオ】 履修学生全てが授業後に記入し、授業日から2日後までに提出する。

授業担当教員がPDF化して記録し、次の授業の最初に学生に返却する。

このサイクルを毎週繰り返す。

手書きなので、コピー&ペーストができない。

- ・学生は、自己の学習を振り返りつつ学習を進めることができる
- ・教員は、学生の学習プロセスを見守り（教育効果を観察しつつ）、適宜指導内容を調整することができる。

参考資料：ポートフォリオ記述抜粋

- ・英語学習希望者が、英語により未知の分野の価値を知り、能力を向上させた。

※グローバル人材

- ・英語を苦手とする履修者が、写真という分野を通して、英語能力の活用に踏み出した。
- ・創造活動という枠組が、クラスメートや地域の市民とのコミュニケーションを活性化させた。
- ・コミュニケーションが、新たな価値の発見を導いた。
- ・複数グループの競合という学習環境が、パフォーマンスレベルの向上を導いた。
- ・多角的に評価されることの喜びと価値を体感した。
- ・多角的評価から生じる落胆を克服する経験をした。

《配布資料》

成績評估資料 1 Photography in English – Instructor’s Scores and Comments

Judy Kambara

Photograph Title	Points (0-10)	Comments
The Cat	●	Very nice use of the rule of thirds and leading the eye technique. Getting down on the cat’s level gives the cat’s perspective and also makes the subject appear more believable and realistic.
Look Carefully	●	This is a nice example of taking the picture within a picture. By showing only part of the whole, you allowed the viewers to use their imagination for this city scene. There are contrasts of strong colors as well as multiple patterns in the windowpanes and the bricks. Nicely done.
The Cart	●	The subject is very nicely placed in this photo. There is a little blurriness due to low light conditions, but I think the composition compensates for that.
The Gate	●	This is a nice use of leading the eye to the center of the photo using the patterns of the passage.
The Sky	●	You did a great job of framing that beautiful blue sky with the buildings and tree branches. The perspective looking almost straight up gives the viewer a powerful feeling of smallness against the vastness of the sky. Well done.
The Fresh Day after Rain	●	This is an unusual subject for a photo because most people would walk past it without thinking of it as interesting. The green color of the bristles is striking against the drab colors of the background. You used shallow depth of field with the photo being sharp in the foreground and blurred in the background. The lines that lead to the distance are also nice.
Enjoyable Bicycle	●●	The vivid colors of the bike along with the ornaments on the rear wheel make for a striking subject.
Walk With...	●●	I find it fascinating that this was an accidental shot. Despite that fact, there are so many elements of this photo that work well. The man in the photo is moving in the opposite direction to the main woman in the photograph above, and they are almost in the same stride. The colors are rich as well. A nice capture.
Akaneiro	●	You did a good job of capturing the colors of the setting sun. Your off-center placement of the sun and the horizon in the lower third of the frame allowed you to showcase the magnificent colors of the sky and the wispy clouds. The grasses and other objects in the foreground in shadow provided a nice border along the bottom edge.
See the Sea	●	These sunglasses were such a nice subject. The

以下省略

第 回(月 日)

今回行ったこと(必須)

思ったこと、感じたこと、反省点、疑問点、etc.
(必須)

【学習態度のふりかえり(必須)】

理解力	0	1	2	3	4	5
創造力	0	1	2	3	4	5
行動力	0	1	2	3	4	5
協調性	0	1	2	3	4	5

イメージをフローチャートや図にしてみる

今日の授業を一言で表現してみよう!

教員使用欄

1 思ったこと、感じたこと、反省点、疑問点、etc.
(必須)

元々英語で授業を取るという点にひかれてこの授業を選んだが、結果的に写真の技術も向上させることができて良かったと思う。この授業をとる前は全く写真についての技術面は知らなかった。しかし様々なことを学び、素人だ。た私が良い写真をとれるようになったのはジョディ先生のおかげだと思う。またいい写真をとるために普段とは違う視点で物を見ることができるようになり新たな発見もあった。今後も学んだことを忘れずに写真を撮り続けたらいいと思った。

2 思ったこと、感じたこと、反省点、疑問点、etc.
(必須)

英語で発表した。たので、自分の伝えたいことがうまく言えず、単語がすぐに出てこなくて大変でした。でも、次回からは英語を扱うことができて祭りがたむす。これを機にもう一度英語の勉強を頑張りたいと思いはれた。

3 思ったこと、感じたこと、反省点、疑問点、etc.
(必須)

紹介文を読んだとき、みんな積極的に発言していたのでよかった。レクチャーのとき、もう少し気を配って英語で発言できた。

4 思ったこと、感じたこと、反省点、疑問点、etc.
(必須)

写真を撮るのが好きで、英語を話すのは苦手で、この授業を取るか迷ったが! 受講してよかったと思った。クラスメイトからたくさん刺激をもらいました。

5) 林 豊彦 (自然科学系〈工学部〉)

「e-learning 英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト」

プロジェクト名：e-learning 英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト

実施担当者：林 豊彦

新潟大学 教授 自然科学系

大学院自然科学研究科 電気情報工学専攻

工学部福祉人間工学科

人間支援科学教育研究センター長、新潟市障害 IT サポートセンター長

1. プロジェクトの目的

新潟大学では、全学の英語教育において、アルク教育社 NetAcademy2 (以下 NA2) の e-learning システムを自習教材として用いている。しかし、工学部学生の TOEIC IP テストのスコアは、毎年、平均 400 点前後と低迷しており、産業界からの期待に応えられていない。現状分析の結果、工学部学生の多くが英語に苦手意識をもっており、かつ上記教材を有効利用していないことが判明した。そこで、1 年生全員に上記 NA2 のスーパースタANDARDコースを履修させ、「1 年生の英語基礎力を向上させる」ことを目的とする。

2. 実施内容

1 年生全員にスーパースタANDARDコース (以後、SSC と略す) を利用させ、成績不振者に対してアドヴァイジングを実施することを基本方針とした。本方針に基づいて、演習科目「技術英語入門」を 1 学期に全学科で開講した。演習内容は、SSC の 1 ユニット (リーディング、リスニング) を学生に毎週自主学習させ、各回の前半はステップ 6~8 を、後半は次のステップ 1~5 を学習させた。各学生の英語レベルは、初回のレベル診断テストで評価し、最終回にはレベル修了テストを行った。到達目標はレベルのひとつアップとした。事前に学習法セミナーを行い、3 つの演習日でアルク社の英語アドバイザーが学生に対してアドヴァイジングを行った。同じ日の空き時間には、希望者に対してカウンセリングも行った。

3. 取り組みの成果

小テストの累積得点率は、平均がリーディングで 70.7%、リスニングで 69.2%であった。単位の認定は、修了テストにおけるレベルアップ、ないし累積得点率の閾値 (レベルごとに設定) 以上を条件とした。その結果、履修登録者の 96.4%が単位を取得できた。全学で実施している TOEIC-IP テストは、平均点が前年度よりも 22.8 点上昇し、全学部での順位も 2 つ上がった。一昨年の平均点よりも 13.4 点高く、過去最高だった。点数分布のヒストグラムは、一昨年の分布と同様だったが、300 点未満、500 点台の人数が減り、300 点台、600 点以上の人数が増えていた。今後も継続した評価が必要だが、技術英語入門には、目的に即した一定の教育効果が認められた。

4. あとがき

今年度の取り組みで、講義マニュアル、TA マニュアルが完成し、恒常的な教育システムの基盤が完成した。今後、毎年改訂を続け、洗練させていく予定である。他部局で同じような試みをしたときは、工学部学務係に連絡いただければ、上記2つのマニュアルを提供する用意がある。英語学習は継続した勉強が不可欠であるが、この演習は1年生前期のみであるため、その後のフォローが課題として残されている。各学科は2年次以降に「技術英語」を独自に開講していることから、それにつながる英語教育を模索していきたい。

◀PPT▶

e-learning英語教材の利用促進による英語力向上プロジェクト

林 豊彦

新潟大学 自然科学系 教授

工学部・福祉人間工学科

大学院自然科学研究科・電気情報工学専攻

新潟市障がい者ITサポートセンター長

1. 背景と目的
2. 平成22年度の取り組み
3. 平成23年度の取り組み
4. 平成24年度の取り組み



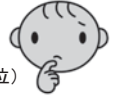
1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #1

●新潟大学TOEIC-IPテスト

平成21年：全学平均 428.7

工学部平均 389.7 (学内順位11/12位)



- ・英語の苦手の学生が工学部を志望しているのでは？
- ・地方の旧国立大・工学部では、受験生確保のために個別試験の英語を廃止

工学部志願生の英語軽視 (自業自得)



1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #2

●社会的要請との乖離

- ・産業の国際化の進展
- ・国内市場だけでは経済活動・雇用が維持不能

「もの」を作るエンジニアは常に世界と競争

英語能力は、科学者・エンジニアにとって必須

1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #3

●原因はなんだろうか？

- 1) 中高における英語教育の失敗??
会話的表現の重視、文法の軽視

が、期待した教育効果は得られなかった

話すことも、書くこともできない
学生の急増



1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #4

●原因はなんだろうか？

- 2) 社会現状および動向を無視した安易な進路指導 (受験産業、高校)??

大学合格そのものが目的化 (難関校合格が唯一の評価基準)

- 3) リメディアル教育に不熱心な大学教員??

- ・三流大学がすること
- ・基礎的な勉強は学生が自分ですべし



1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #4

●工学部としてすべきこと

(従来) 学部は専門教育を行えばよく、技術英語以外は全学の英語教育の問題

研究室に配属された学生が英語文献を読めない!!

研究室の研究力の低下 (研究は教員と学生との共同作業)

レベルの高い論文の生産性の低下



1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #4

●工学部としてすべきこと

もはや看過できないレベル、他に頼ってはいられない！

問題:「教員の負担を大きく増やすことなく、かつ学生の英語基礎力を向上させる現実的な英語教育システムを構築せよ」

が、答えはありそうにない(英語教育の専門家はいない)

問題が困難なほど、意欲が湧きおこるのが工学部教員

1. 背景と目的

工学部学生の英語能力の低迷 #4

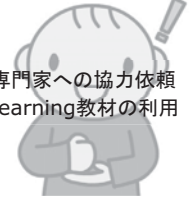
●工学部としてすべきこと

問題:「教員の負担を大きく増やすことなく、かつ学生の英語基礎力を向上させる現実的な英語教育システムを構築せよ」

解決指針:

- 1)アウトソーシング:外部の英語教育専門家への協力依頼
- 2)大学の教育資源の活用:全学のe-learning教材の利用

全学教育との整合性



2. 平成22年度

平成22年度の取り組み #1

●目的

- 1)英語学習のモチベーション向上
- 2)e-learningの利用率向上

●対策

- 1)教員のFD → 教員の意識改革
- 2)学生向けの特別講義 → 動機付け

2. 平成22年度

平成22年度の取り組み #2

●教員のFD

タイトル:アルク教育社の英語e-ラーニングNetAcademy2の活用法について ~「技術英語」を中心に~

講師:樋口 まき(アルク教育社・文教マーケティング部)

日時:平成22年5月19日(水)5限

概要:NetAcademy2概要とアクセス方法,技術英語<基礎>コースの学習内容,管理者機能,スーパースタンドコース概要,他大学事例紹介

2. 平成22年度

平成22年度の取り組み #3

●学生向け特別講義

タイトル:アルク教育社の英語e-ラーニングNetAcademy2の活用法について ~自主学習による英語の実力アップ~

講師:樋口 まき(アルク教育社・文教マーケティング部)

日時:平成22年6月22日(水)5限

概要:NetAcademy2概要とアクセス方法,スーパースタンドコースと技術英語<基礎>コースの学習内容

2. 平成22年度

平成22年度の取り組み #4

●教育効果

- 1) NetAcademy2の累計登録者数の増加:
304人(平成21年度) → 1,066人(平成22年)
 - 2) 学習履歴者の増加:
58人(平成21年度) → 198人(平成22年度)
 - 3) TOEIC-IPテストの平均点増加:
平成21年 平成22年
- | | | |
|------|--------|---------------|
| 全学 | 428.7 | 452.7 (+24.0) |
| 工学部 | 389.7 | 425.8 (+36.1) |
| 学内順位 | 11/12位 | 9/12位 |



3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #1

●目的

- 1) 英語学習に対する動機付けおよび
- 2) 学習法の習得

●対策

英語学習アドバイザー制度の導入

- 1) 特別講義（教員向け、学生向け）（継続）
- 2) 学習セミナー（講義形式）（新規）
- 3) グループカウンセリング（新規）

3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #2

●教員のFD

タイトル：英語学習アドバイザー制度の導入について

講師：福江友樹（アルク教育社・英語学習アドバイザー）
樋口 まき（アルク教育社・文教マーケティング部）

日時：平成23年5月11日（水）5限

概要：NetAcademy2スーパースタンダードコースの使い方、英語学習アドバイザー制度（英語学習法セミナー、グループカウンセリング・予約表、相談シート）

3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #3

●学生向け特別講義

タイトル：英語学習アドバイザー制度について
～TOEICスコア30%アップ作戦～

講師：樋口 まき（アルク教育社・文教マーケティング部）

日時：平成23年4月27日（水）5限

概要：NetAcademy2スーパースタンダードコースの使い方、英語学習アドバイザー制度（英語学習法セミナー、グループカウンセリング・予約表、相談シート）

3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #4

●英語学習アドバイザー

- 1) 英語学習セミナー：

第1回（5/11～5/13）：

動機付けとNetAcademy2学習法セミナー

第2回（5/18～5/20）：

スピーキング学習法、トレーニングセミナー

第3回（6/22～6/24）：

TOEIC直前対策ミニ講座

3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #5

●英語学習アドバイザー

- 2) グループカウンセリング：

5月：1コマ：20-30分、最大6人、
全36コマ（5/11～5/13、5/18～5/20）

6月：1コマ：40分、最大4人、
全21コマ（6/22～6/24）



3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #6

●教育効果

- 1) 学習法セミナー：

モチベーションが上がった 第1回：68.9%
第2回：64.6%

- 2) グループカウンセリング：

相談件数：全57コマで69件
（1.2件/コマ、65件が一回のみ）

- 3) スーパースタンダードコースの稼働：

リスニング 218人
リーディング 251人



3. 平成23年度

平成23年度の取り組み #6

●教育効果

3) TOEIC-IPテストの平均点増加：

	平成21年	平成22年	平成23年
全学	428.7	452.7	456.9 (+4.2)
工学部	389.7	425.8	416.4 (-9.4)
学内順位	11/12位	9/12位	11/12位

期待した効果は得られなかった



4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #1

●追加策

- ・1年生全員のスーパースタンドアードコース履修
- ・授業中の個人アドバイジング

●対策

- 1) 学習セミナー（講義形式）（継続）
- 2) 「技術英語入門」の新規開講（新規）
- 3) 個人アドバイジング（新規）
- 5) カウンセリング（継続）

4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #2

●学習法セミナー

- 第1回 4/11（水） 5限
- 第2回 6/8（金） 6限 TOEIC直前対策特別セミナー

●「技術英語入門」の新規開講（工学部全学科）

- ・1年生全員にスーパースタンドアードコースを自主学習させる
- ・各学科担当：教員2人、ティーチング・アシスタント2人（大学院生）
- ・授業マニュアル、TAマニュアルの作成（適宜改訂）

4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #3

●「技術英語入門」の新規開講（工学部全学科） 授業方法：

- 第1回 30分間 レベル診断テスト（リーディング、リスニング）
60分間 対応するレベルの最初のユニット（ステップ1～5）を自主学習
- 第2回目～14回目
30分間 アドバンスモード（ステップ6～8）（小テスト）
授業前後で各学生の累積得点を記録 → 差分＝得点
当該テストの満点の記録（得点率計算用）
60分間 次のユニット（ステップ1～5）
- 第15回 30分間 アドバンスモード（ステップ6～8）（小テスト）
60分間 レベル修了テスト

4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #4

●「技術英語入門」の新規開講（工学部全学科）

単位認定法：

- ・修了テストにおけるレベルアップ
- ・累積得点率が閾値（各レベルで設定）以上のいずれか、ないし両方を満たす。



4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #5

●アドバイジングとカウンセリング

個人的アドバイジング（授業中）

- 対象：累積得点率が伸び悩んでいる学生
- 実施回数：5月初旬、6月初旬・下旬の3回

カウンセリング（授業時間外）

- 対象：希望者
- 実施時期：5月初旬、6月初旬・下旬
- 時間帯：昼休み、4限、5限
- 全コマ数：15



4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #6

●成果

1) 学習法セミナー

参考になった：第1回 96.0%、第2回 90.2%

2) 技術英語入門

小テスト得点率：リーディング 70.7% (レベル1 77.0%)

リスニング 69.2% (レベル1 73.3%)

単位認定率：96.4%



自主学習させることに成功

4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #7

●成果

3) カウンセリング：21人

4) TOEIC-IPテスト

	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年
全学	428.7	452.7	456.9	468.8 (+11.9)
工学部	389.7	425.8	416.4	439.2 (+22.8)
学内順位	11/12位	9/12位	11/12位	9/12位

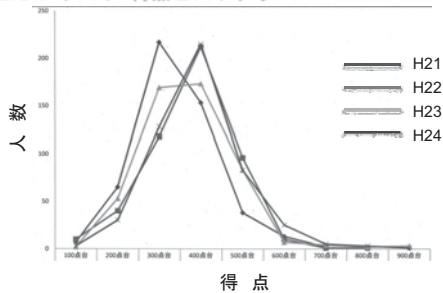
過去最高の平均点



4. 平成24年度

平成24年度の取り組み #8

TOEIC-IPテスト 得点ヒストグラム



まとめ

1. 工学部1年生の英語基礎力を向上させるための一連の取り組み (H22~H24)
2. 成果：
 - ・教員の英語教育に対する意識向上
 - ・学部レベルでの英語基礎教育システム
 - ・学部1年生の英語学習に対する意識改革
 - ・学部1年生の英語基礎力の向上

謝辞

新科目の立ち上げと実施に協力いただいた工学部の教職員各位に感謝いたします。

特に、労を惜しまなかった

工学部学務係 野口亜希子係長、山崎花恵氏、若杉和哉氏
アルク教育社 樋口まき氏

に心から感謝いたします。



4. パネルディスカッション

「主体的学習に転換する初年次教育を考える」

1) 企画の趣旨

1. 目的

本 FD は、大衆化する大学教育において、大学で学ぶ準備のできていない学生の学習を、初期の段階で大学での学習にふさわしい主体的な学習に転換する初年次教育のあり方や方法について、学科等での新たな取り組みの動向をふまえながら全学で考える機会とする。

2. 趣旨

現代の大衆化した大学教育においては、入学時の早い段階で高校教育までとは異なる「大学の学習」とは何かについて学生に理解を促すこと、自ら情報を検索して収集し考察するなどの基本的な学習方法やレポート作成の方法などの大学における学習に必要なスキルの習得を促すことが重要になっている。こうした学習を1年次のはじめに行う教育は、初年次教育と呼ばれ、現在各大学でアカデミックスキル学習、アカデミックライティング学習の科目や、基礎ゼミなどの科目で進められている。

本学は、この初年次教育に相当する教育を、基本的には「スタディスキルズ」として学科ごとに全学で取り組んできた。しかしながら、学科担当の教員からは未だ学生が大学生としての学習の姿勢やスキルが身につけていないとの声がでている。

そうした状況の中で、いくつかの学科等ではスタディスキルズを見直したり、新たな初年次対象の科目を立ち上げたり、それらの活動を組織的な FD につなげるなど、新たな動きも起こりつつある。

今回の全学 FD では、そうした学内での初年次教育への取り組み事例の紹介を行い、今後の本学における初年次教育について討論しながら考えていく。

2) 事例報告

(1) 中東雅樹 (人文社会・教育科学系〈経済学部〉)

「初年次教育を起点としたレポート作成スキル向上の取り組み」

◀PPT▶

平成24年度『学習教育研究フォーラム』
パネルディスカッション
「主体的学習に転換する初年次教育を考える」
2013年 3月13日(水)

初年次教育を起点とした レポート作成スキル向上の取り組み

新潟大学経済学部
准教授 中東 雅樹

発表の構成

- ① これまでのスタディスキルズと2012年度の試み
- ② 2012年度の試みから見えたこと
- ③ 2013年度での試み
- ④ 試みを通じて私が気づいたこと

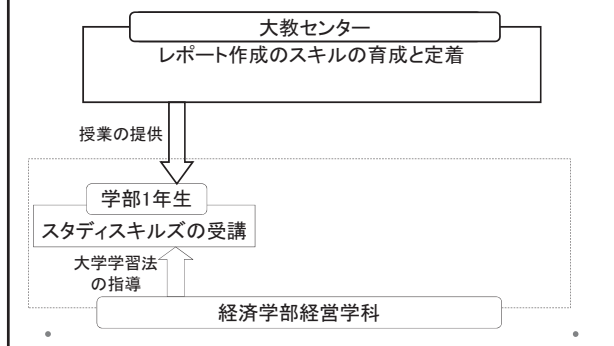
昨年度までのスタディスキルズ 「リテラシー」の学習(【調べる】【読む】【書く】【話す】)

図書館ガイダンス
↓ 2~7週間
発表<1回目>
調査結果、今後の調査計画
↓ 5週間
発表<2回目>
調べ直して分かったこと + レポート提出

2012年度のスタディスキルズ レポート添削を取り入れたレポート作成強化

大学学習法の講義
↓
情報検索法(図書館ガイダンス)
↓ 1~6週間
発表<1回目>
問いの内容
↓ 5週間
発表<2回目>
問いをふまえた調査結果 + レポート提出
↓
レポート改善ワークショップ → レポート書き直し
↓
最終レポート提出

スタディスキルの授業実施体制



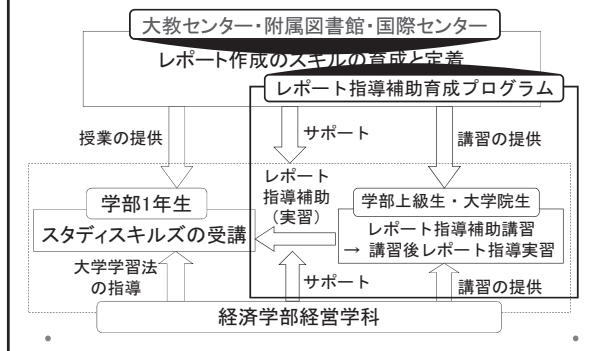
レポート添削への取り組み

学部上級生・大学院修士学生

- ゼミ論文・卒業論文・修士論文における技能教育
- 論文を書く意義の認知
- 論文テーマの形成

上級生のサポートによるレポート添削
→ 上級生の論文作成に対する意識の醸成

スタディスキルの実施体制



2012年度の試みから見たこと①

学生のレポートを読んで…

- ① テーマ設定の難しさ
 - 学生が一番難しいと感じたところ(授業評価)
 - 教員による適切な誘導の困難さ
- ② インターネット中心
ブログやコラムの引用(引用文献調査)
- ③ よいプレゼンとイマイチなレポート
真面目に取り組んだ学生にかぎって…

2012年度の試みから見たこと②

レポート添削補助の学生をみて…

- ① 学生自身が有益に評価
他人のレポートを読む機会に触れることへの高い評価
- ② 論文指導の効率化
 - ゼミ論文などの体裁に関する指導が不要
 - 添削学生の論文作成への意識形成に有効

2012年度の試みから見たこと③

授業構成からみると…

- ① 時間的な無理
レポート書き直しのための時間不足
- ② われわれの実体験と異なるプロセス
 - 手順(課題設定→調査→論文作成・プレゼンテーション)
 - 時間配分(授業時間配分≠論文作成の時間配分)

2013年度での取り組み

『大学からの学び方』の修得

① 授業構成の変更

- 順番(課題発見→レポート作成→プレゼンテーション)
- 課題発見にかかる時間の大幅拡充

② 学部上級生によるレポート添削補助の強化

5人(2012年度)→20人(2013年度)
(授業改善プロジェクトのサポート)

試みを通じて私が気づいたこと

- ① 初年次教育としてのスタディスキルズは、まともに取り組ませる(取り組む)べき授業
- ② 大学生(とくに文科系学部学生)が身に付けるべき「スタディスキルズ」
レポート作成、プレゼンテーション、課題の発見方法、本の読み方、文献の使い方、論理学、社会調査法、フィールドワークなど



スタディスキルズは初年次教育だけのものではない
→ 大学学習法の体系化(社会調査実習の実質化等)


(2) 中村和吉 (人文社会・教育科学系〈教育学部〉)

「大学学習法（スタディ・スキルズ）と連携・接続する 〈学びへの動機づけ〉のための授業科目開発」

《PPT》

学習教育研究フォーラム Mar.13 / 2013

大学学習法（スタディ・スキルズ）と連携・
接続する「学びへの動機づけ」のための
授業科目開発



教育学部 中村和吉

はじめに ～生活科学課程のご紹介～

教育学部

- ・学校教員養成課程
- ・学習社会ネットワーク課程
- ・生活科学課程
- ・健康スポーツ科学課程
- ・芸術環境創造課程

生活科学コース
(定員15名)

- ・一般選抜 15名
- ・社会人特別選抜 若干名

学生支援体制:6名の専任教員

- ◆住生活領域 :1名
- ◆食生活領域 :1名
- ◆衣生活領域 :2名
- ◆生活経営領域 :2名


生活科学 | 人間生活における人と環境の相互作用

人は生まれ、育ち、学び、仕事をし、次世代を育て、遊び、創り、
命がつきるまで社会の中で生きる

すべての人が生活の場で自然環境や社会環境と共生しながら
人間として生きていくための知識や技術を研究し、提案する

生活科学における固有の視点

- ・常に変化する研究対象に対応する
- ・人間生活の本質的価値は普遍である
- ・人間側視点での生活の質的向上を実現する



教育・指導方針 | 実践的キャリア形成へ指向したカリキュラム編成

教員養成学部の持つ実践力育成スキルを活用し、学生生活の
4年間をキャリアパス育成期間と考え、座学だけではなく、
対応する実験・実習・演習を課したカリキュラムを編成している


主なカリキュラム

1～2学年 (人間生活の基本的な理解)

- ・生活科学総論 ⇔ 生活科学特別講義
- ・食生活論 ⇔ 食物学実験、基本調理実習
- ・住環境論 ⇔ 住居学実験
- ・被服学総論 ⇔ 被服学実験実習
- ・ライフデザイン論 ⇔ 生活経営演習

3～4学年 (各専門領域の理解と実践)

各専門領域の講義・実験・実習・演習科目
卒業研究



生活科学課程における初年次学習

入学者の傾向

入学の目的が「資格取得」など明確ではなく、入学後に幅広く深く学びを積み重ねて、自身の目標を自覚する

↓
初年次学習では「動機づけ」を強く意識した学習内容

スタディ・スキルズ

生活科学総合演習

1年次

2年次

3年次

各科目の内容

スタディ・スキルズ

- ・「おもしろい人」とはどんな人？
- ・講義の聴き方とノートの取り方
- ・情報収集①図書館の利用
- ・情報収集②学習記録の蓄積
- ・テキストの読み方、要約と記録
- ・わかってもらえるレポートの書き方
- ・わかってもらえる図表の書き方
- ・わかってもらえるプレゼンテーション

生活科学総合演習

- ・大学を卒業したあと、どうするか
- ・社会では何が求められるのか
- ・社会人基礎力、自己理解、目標設定
- ・生活科学の学びとは何か
- ・自分の頭で考えてみる
- ・学習の記録を振り返ってみよう
- ・振り返りを表現してみよう
- 「私にとっての大学の学び」
- ・まとめ
- ～演習を通して獲得した「引き出し」～

各科目の内容(スタディ・スキルズ)

スタディ・スキルズ

- ・「おもしろい人」とはどんな人？
- ・講義の聴き方とノートの取り方
- ・情報収集①図書館の利用
- ・情報収集②学習記録の蓄積
- ・テキストの読み方、要約と記録
- ・わかってもらえるレポートの書き方
- ・わかってもらえる図表の書き方
- ・わかってもらえるプレゼンテーション

ねらい

- ・読み、書き、プレゼンの基本スキル習得
- ・自学自習のトレーニング
- ・主体的に学ぶことの自覚
- ・表現の技術(わかってもらえる～)

授業の進め方

- ・課題を課し、提出、返却、再提出
- ・概念の理解 → 個別事例の理解
- ・自身の思考、発想を具体的に表現

事例の紹介(スタディ・スキルズ)

配付資料
:「おもしろい人」とはどんな人？

本授業の目的 ~おもしろい人になる~

- おもしろい:
- 1: 具体的な経験談(深刻ではない失敗談)
 - 2: 的確な「たとえば」話
 - 3: 「要するに」と抽象化
 - 4: 無茶なじゃれ、小ネタ、ギャグ
 - 5: 無理矢理な当てはめ、イラスト化、替え歌

見識 = 知識 + パーソナリティ + 教養

知識: 「情報」を個人のフィルター(興味、関心、好き嫌い)で取り込んだ状態→ある程度の蓄積が必要

パーソナリティ: 情報に対する解釈のスタンス(ひねくれている、全肯定など)

教養: 学術的な知識体系、所与の課題について身につけた他の知識とリンクさせて広い視野から主体的に論じられることのできる引き出し

おもしろい人へのはじめの一歩
これから1週間であったことを記録する

書くときのルール

- ・用紙右半分に「あったこと」を1日1〜5程度1行で書く。
- ・左半分には「あったことに関わる」感想、考えたor思ったことを1文で書く
- ・文章の厚かに、発音きでもだじやれでも、どんなにくだらないことでも思いついたものを書く。
- ・書くのはその日じゃなくてもいい

事例の紹介(スタディ・スキルズ)

学習記録の蓄積 ~ eポートフォリオ(EVERNOTE)の活用

学習記録 | 授業での配付資料、レポート、製作物の写真、動画、音声
いずれも電子データに変換してクラウドサービス内に保管する



事例の紹介(スタディ・スキルズ)

配付資料
:クラウドサービスとは

クラウドコンピューティング

「クラウド(Cloud:雲)」とは、米 Google のクラウド・システム CEO (最高経営責任者) が 2006 年 8 月に行った、次のような発言から生まれた概念を表します。

「新しいコンピューティングサービスは、どこか“雲”の中にあるサーバーから始まる。PC、Mac、携帯電話など、どのようなデバイス(情報機器)からでも適切な Web ブラウザー(ウェブ)アクセス手段があれば利用できる」

「サーバー」が「雲」の中であり、どこにあるか、どのような環境なのかを意識する必要がない。クラウドコンピューティングのもっとも重要な要素はこの点にあります。ここでは、まず「サーバー」のイメージをつかむため、「ネットワークコンピューティング」の概念を確認しておきましょう。

:EVERNOTEの使い方

【1】EVERNOTEをインストールする

EVERNOTEを使いそうな機器(ガジェット)にそれぞれEVERNOTEをインストールしてください。

ダウンロードはサイトから行ってください。

<https://evernote.com/int/ja/download>

モバイル機器(iPhone、Androidなど)、自宅のPC、ノートPCなどです。

【2】ノートブックとノート

EVERNOTEは「ノートブック」に「ノート」を書き込んでいくスタイルで情報を記録します。

事例の紹介(スタディ・スキルズ)

授業での配布資料、関連資料も学生アカウントと共有設定する



事例の紹介(生活科学総合演習)

生活科学総合演習

- ・大学を卒業したあと、どうするか
- ・社会では何が求められるのか
社会人基礎力, 自己理解, 目標設定
- ・生活科学の学びとは何か
- ・自分の頭で考えてみる
- ・学習の記録を振り返ってみよう
- ・振り返りを表現してみよう
「私にとっての大学の学び」
- ・まとめ
～演習を通して獲得した「引き出し」～

ねらい

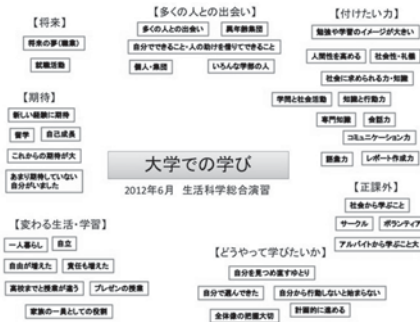
- ・主専攻プログラムのカリキュラム理解
- ・主体的な学びへの動機づけ
- ・リフレクションの意義の理解
- ・リフレクションの方法の理解

授業の進め方

- ・授業ごとに学習内容への感想、意見を記載してもらい、これらを再検討し、次回授業時へ反映する
- ・学年進行にともなう学習内容の理解
- ・1年間で学べたことの振り返りおよび将来に対する計画

事例の紹介(生活科学総合演習)

「大学での学びとは何か」授業資料



事例の紹介(生活科学総合演習)

「生活科学の学びとは何か」授業資料



生活科学総合演習

杉村桃子

事例の紹介(生活科学総合演習)

「目標を立ててみよう」授業資料

なぜ目標を立てるのか



事例の紹介(生活科学総合演習)

「学習記録を活用しよう」授業資料

平成26年11月10日(木)
生活科学総合演習

デジタルで学習を記録・整理・活用しよう
(eポートフォリオ)

事例の紹介(生活科学総合演習)

「1年生の自分をふり振り返り、2年次に備えよう」授業資料

概要

- 1年次の学習のリフレクション
 - 学習の記録と振り返り(ポートフォリオ)から
 - 学習の振り返りへのフィードバック(生活科学の先生方から)
- 次期学習デザイン
 - 生活科学プログラムを理解する(到達目標とカリキュラムマップ)
 - 習得済単位と、今後学びたい科目
 - 2年次の目標を考えよう

生活科学総合演習での成果と課題

成果

- 学生：カリキュラムの構造、リフレクションの意義と方法についてある程度の理解が得られた
- 教員：学生のカリキュラム理解、目標設定の実態について把握でき、向後の指導に活用用途が付いた

課題

- カリキュラム理解（専門領域の魅力、キャリアパス）
- 4年間を見通した学生指導の組み立て
- 学生の主体的なリフレクションの組み立て
(ポートフォリオ含め)

3) 話題提供

(1) 西條秀俊 (教育・学生支援機構〈キャリアセンター〉)

「初年次教育におけるキャリアセンターの取り組み」

I. 話題提供した内容

1. 1年生向けキャリアセンター開講のキャリア意識形成科目

(1) 平成22年度から1・2年生向けを1年生向けに変更した理由

- ・大学入学が目標・ゴールになっている
- ・中1ギャップ、高1ギャップ同様、大1ギャップがある
- ・3・4年生の就活(進路)相談の次に多いのが、1年1学期の転部相談である

(2) 大学は学ぶことが基本

- ・学ぶことへのモチベーションを上げることが必要である
- ・将来を見据えた大学生生活の目標設定(仮の目標でも構わない)を立てさせる

2. 初年次教育におけるキャリアセンターの活動報告(資料にて)

(1) 平成22年度 教育・学生支援機構年報「自律と創生」

- ・キャリアセンターにおけるキャリア教育

(2) 平成23年度 教育・学生支援機構年報「自律と創生」

- ・CANチェック活用実績と活用方法
- ・CANガイド活用方法
- ・CANガイド出前講義実施状況

3. 大学間連携共同教育推進事業の紹介

(1) 取組名称: 「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」

(2) 連携校名: 新潟大学、成城大学、京都産業大学(代表校)、福岡工業大学

(3) 取組の概要: 本取組は、産学協働教育を始点として学士課程教育の質的転換を図り、学生の主体的な学修を確立することを通じて、地域社会の発展を担う中核的・中堅職業人の育成を目指す。具体的には、連携校がこれまで培ってきた産学協働教育の実践に関する知見、実績を共有、融合させることにより、新たな社会体験と大学教育を融合するプログラムや長期型インターンシップ等を共同で開発し、学生が主体的に学び、考え、実践する力を培う。さらには、産学協働教育のプラットフォームとなる「産学協働人材育成ネットワーク」の設立及び専門人材の育成、教育効果評価システムの構築等により、恒常的な産学協働教育の推進・拡大を目指す。その過程においては、先進的に産学協働教育に取り組んでいる諸外国の大学・機関等と連携・

交流を推進し、国際標準のプログラム、教授法、枠組み（基準）等を積極的に取り入れ、我が国に適応した産学協働教育の質的向上に努めていく。

4. 配付資料リスト

- (1) キャリアセンター開講のキャリア意識形成科目履修者の推移
- (2) 教育・学生支援機構 年度報告書「自律と創生」H22・H23 キャリアセンター分
- (3) CANガイド…（略）
- (4) CANガイド連絡メール配信予定表
- (5) CANチェック（社会人基礎力診断）
アドバイザー・学生担当教員向け活用マニュアル…（略）
- (6) CANガイド出前講義について

《配布資料》

キャリアセンター開講のキャリア意識形成科目

平成24年3月

教育・学生支援機構キャリアセンター
西條秀俊

授業名	年度	コマ数	定員	希望数	履修者数	対象
キャリアを共に考える	平成18年度	2	60	220	100	1・2年
	平成19年度	4	120	401	162	1・2年
	平成20年度	6	180	515	219	1・2年
	平成21年度	6	210	516	228	1・2年
	平成22年度	6	210	563	225	1年
	平成23年度	6	210	799	244	1年
	平成24年度	6	210	792	246	1年
キャリア意識形成と自己成長	平成18年度	2	360	400	261	1・2年
	平成19年度	2	360	340	270	1・2年
	平成20年度	2	300	505	306	1・2年
	平成21年度	1	300	499	299	1・2年
	平成22年度	1	300	434	301	1年
	平成23年度	1	300	433	301	1年
	平成24年度	1	300	373	299	1年
社会とキャリア選択	平成20年度	1	200	130	119	2・3・4年
社会とキャリア選択A	平成21年度	1	200	93	93	2・3・4年
	平成22年度	1	150	44	44	2・3年
	平成23年度	1	150	43	43	2・3年
	平成24年度	1	150	46	46	2・3年
社会とキャリア選択B	平成21年度	1	200	181	129	2・3・4年
	平成22年度	1	150	125	125	2・3年
	平成23年度	1	150	191	148	2・3年
	平成24年度	1	150	85	85	2・3年

平成 22 年度のキャリアセンターにおけるキャリア教育

キャリアセンター担当 准教授 西條秀俊

キャリアセンター担当 特任助教 川端由美子

中央教育審議会では文部科学大臣から「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の諮問を受けて、平成 23 年 1 月 31 日に答申を取りまとめた。

この中で、発達の段階に応じた体系的なキャリア教育の在り方について、「社会的・職業的自立に必要な能力等を育成するため、キャリア教育の視点に立ち、社会・職業との関連を重視しつつ、各教育機関において体系的な取組が必要である。」ことが述べられている。

また、大学設置基準の改正が、平成 23 年 4 月から施行される。その骨子は、単に卒業後の就職だけでなく生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むことが必要であるとし、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」の規定が新設された。これらの内容は、まさしく新潟大学における教育改革の取組と方向性を同一にするものである。

キャリアセンターは、平成 22 年 4 月に学生の教育・学生支援を大学として一層積極的に取り組むため、教育・学生支援機構の中に、入学センター、学生支援センター、全学教職支援センターなどとともに、その一つとして位置づけられた。新潟大学の理念である「自律と創生」に向けて、全学的、一元的、また入学から卒業まで一貫した体系的な取り組みが強化できる体制になった。キャリア教育やキャリア意識形成支援もキャリアセンターだけではなく、各学部、研究科や教育・学生支援機構内の各センター等と協働して、人材育成やキャリア発達の観点から正課、正課外にかかわらず、学生自身が主体的に自らのキャリア形成に取り組めるように教職協働で支援をしていくことが重要である。

(1) キャリアセンター開講のキャリア意識形成科目

平成 22 年度も引き続き、キャリアセンター開講のキャリア意識形成基礎科目である「キャリアを共に考えるー自己理解・他者理解」及び「キャリア意識形成と自己成長」を開講した。また、2・3 年生向け「社会とキャリア選択 A」(第 1 学期開講) 及び「社会とキャリア選択 B」(第 2 学期開講) について、「社会とキャリア選択 A」をインターンシップ事前講義として位置づけるなど、内容を一部リニューアルして開講した。キャリアセンター開講「キャリア意識形成科目」として、平成 22 年度ではトータルで 9 科目を開講し、約 700 名の学生が受講した。



各講義の主な概要は、担当教員による講義、OB・OG等を中心とする社会人からの体験談発表、グループワークの3パート等に分かる。教員による講義では、社会情勢や進学・就職率の現状、社会人マナーの基礎、自己理解・他者理解の必要性など、基礎的かつ重要な内容のパートである。OB・OG等を中心とする社会人からの体験談発表では、自分の少し先の未来をイメージすることができ、そのことが具体的な大学生活のモチベーションアップにつながっている。また、社会人の年代、役職、職種を分散させたことで、幅広い情報が提供され、価値観の違い等を肌で感じる事ができたのではないかと思います。グループワークでは、自分の考えていることをアウトプットとして言葉で表現することや相手の言いたいこと、考えていることをいかに理解するかが重要なポイントである。会話そのものや表現力を苦手とする学生が多く、コミュニケーション能力や積極性が求められる昨今、その最初の一步としての一連のグループワークは良い練習、経験の場になったが、今後ますますその重要性は増してくるであろう。他学部の学生とのグループワークや意見交換を通して、考え方や価値観の多様性をあらためて認識する良い機会になったようだ。

これら講義を通して、私自身も受講学生から学ぶことも多かったが、キャリア意識形成基礎科目の一番の効果は学生の大学生活等に対するモチベーションが上がり、前向きな変化があったことである。



以上

平成23年度 キャリアセンター 活動報告

キャリアセンター担当 准教授 西條秀俊

キャリアセンター担当 特任助教 川端由美子

1. はじめに

今回の活動報告では、CANシリーズとして、平成22年度に試行的にスタートしたCANチェック（社会人基礎力診断）の検討WGでの検証概要とCANガイドの活用実績について報告する。

また、文部科学省から「大学生の就業力育成支援事業」として、本学農学部が採択を受けた「インターンシップ実質化による就業力の獲得」の一部カリキュラムをキャリアセンターが中心となり推進した。体系的な4年間のプログラムの中で、2年次のインターンシップについて、独自に提案する新しいかたちのインターンシップである「チームインターンシップ」をキャリアセンターが試行的に実施した概要を報告する。

さらに、平成23年度にキャリアセンターで実施した主な支援行事をまとめ報告する。

2. CANチェック（社会人基礎力診断）の今後の活用について【担当：西條秀俊】

2.1 CANチェック（社会人基礎力診断）報告について

教育・学生支援機構キャリアセンターが企業の協力を得て開発したCANチェック（社会人基礎力診断）の試行的な運用が平成22年4月にスタートした。試行開始から1年経過後に実施した学生受検データが蓄積したことから、平成23年度の本格的な運用に向けて設問項目等について一定の検証を行った。検証については、更に長い時間をかけて慎重に分析していかなければならないところであるが、可能な範囲で運用後の検証を行い、今後の方向性を定めることは大きな意義があると考えた。平成23年10月18日に第1回目CANチェック（社会人基礎力診断）検証ワーキング（WG）を、学内の教員5名及び事務職員1名でスタートさせ、以降平成24年3月まで5回に渡り、WGを行い、そこで論議された内容等を報告書としてまとめた。これまでの経緯も含めて、今後のCANチェック活用の方向性を示すものとなった。

本報告書全体の構成は、第1章で「CANチェック（社会人基礎力診断）」の基本的な考え方について、CANチェック構築の経緯、目的、開発の経緯を説明する。第2章ではCANチェックの前に実施したプレテストの設問項目の検証とCANチェックの活用方法等について説明する。第3章ではCANチェックのこれまでの利用動向について、第4章ではCANチェックの設問項目の検証について、第5章では、最後のまとめとして、CANチェックの今後及び対策について記してある。

以上、報告書の内容構成等について記したが、詳細は本報告書を確認いただきたい。

今後もCANチェックシステムを維持し、学生の利用促進を図り、更なる検討を加える必要がある。今回、明らかとなったいくつかの検討課題については、引き続き、改善のための対策を講じていく必要がある。

2.2 CANガイドの活用について

キャリアセンターでは、平成20年度から新入生全員に「CAN〔Career Action Note）ガイド〕」を配布している。この「CANガイド」の配布は、入学して間もない新入生に対し、「計画を立て行動に移すこと（Career Action）の大切さ」と「やればできる（You can do it!）」というメッセージを込めている。

入学当初からのキャリア支援の一環として、将来をイメージしながら大学生活を充実させる為に必要な目標設定や行動計画を支援する内容である。学生は、毎年、ワークシート等で自己分析や大学生活の目標と行動計画を立てることにより、自分の成長を振り返ることができ、大学生活の記録としても役立てることができる。

「CANガイド」は、キャリアセンター開講の「キャリア意識形成科目」講義で活用のほか、新入生を対象とした授業科目「スタディ・スキルズ」への学内出前講義でも活用している。

これまでの学内出前講義の実施状況及び実施内容等の活用実績はつぎのとおりである。

H24CANガイド利用促進メール配信予定表

2012/6/24 9:58

日	月	火	水	木	金	土
4/15	16	17	18	19	20 ①第1回	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	5/1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11 ②第2回	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25 ③第3回	26
27	28	29	30	31	6/1	2
3	4	5	6	7	8 ④第4回	9
10	11	12 ④第4回	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22 ⑤第5回	23
24	25	26 ⑤第5回	27	28	29	30
7/1	2	3	4	5	6 ⑥第6回	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

	配信範囲	ページ数	備考
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ○大学生活とは(P4) ○大学での「学び」は今までと違う(P5) ○大学4年間の流れ(P6~7) ○コミュニケーションで世界を広げよう(P8) ●(ワーク)あなたの大学生度チェック(P9) 	6	<ul style="list-style-type: none"> ・e-サポート ・先輩メッセージ動画を紹介。
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ○やりたいことは何だろう(P10) ●(ワーク)大学生活での将来実現と不安解消(P11) ●(ワーク)大学生活のキャッチフレーズを考えよう(P12) ○大学での学びとは(P13) ○大学を活用しよう(P14~15) 	6	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回の取組確認 ・e-サポート ・センターHPの紹介
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の強みと弱みを知ろう(P16) ○失敗を恐れず挑戦し強みを伸ばす(P17) ●(ワーク)自分の歴史を振り返る(P18~19) 	4	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回の取組確認 ・e-サポート ・センター内新聞・図書
第4回	<ul style="list-style-type: none"> ○性格から強みを考える(P20) ○能力・行動から強みを考える(P21) ●(ワーク)能力を伸ばす活動を考えよう(P21) ○社会で求められる能力(P22) ●(ワーク)能力をチェックしてみよう(P23) 	4	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回の取組確認 ・e-サポート ・CCサポーター ・ツイッター
第5回	<ul style="list-style-type: none"> ○可能性を伸ばそう(P24) ●(ワーク)能力を伸ばす行動計画を考えよう(P25) ○「働く」ということとスキル(P26) ○世の中について知る(P27) 	4	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回の取組確認 ・e-サポート ・CANチャットの紹介
第6回	<ul style="list-style-type: none"> ○大学生活の目標と行動計画(P28) ●(ワーク)大学生活の目標と行動計画(P29) 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・第5回の取組確認 ・e-サポート

※黄色いセルがCANガイド連絡メール配信予定日(案)・・・基本的には隔週で配信。

1. CANガイド出前講義について

平成20年度の入学生から、入学後の修学意欲の向上など、卒業後の将来を見据えてこれからの大学生活を充実させるために、今後のキャリアを意識するきっかけや大学での目的意識を持たせることを目的としたガイド(CANガイド)を作成配付している。

また、新入生を対象とした各学部における「大学学習法(スタディ・スキルズ)」等の授業にて、要請があった授業に出向き、キャリアセンター担当教職員が「CANガイド」を一部使用した出前講義も行っている。

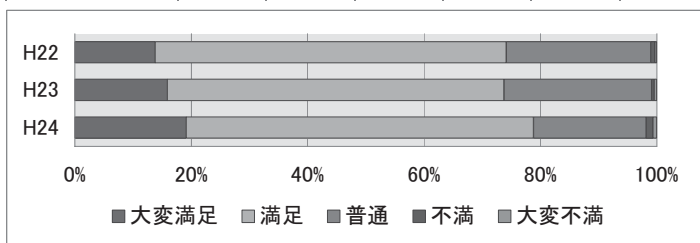
2. 実施状況

学部	平成24年度		平成23年度		平成22年度		平成21年度		平成20年度	
	講義数	受講者数	講義数	受講者数	講義数	受講者数	講義数	受講者数	講義数	受講者数
人文学部	1	20	1	18	1	20	1	18	1	20
教育学部	6	162	5	153	6	177	4	83	3	77
法学部	0	0	1	198	1	198	1	200	1	204
経済学部	8	165	15	300	14	283	0	0	0	0
理学部	6	197	6	205	3	103	2	56	1	25
医学部	2	136	3	126	2	127	3	121	2	80
歯学部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
工学部	2	121	1	69	1	67	0	0	0	0
農学部	3	169	3	171	3	175	3	185	3	182
合計	28	970	35	1,240	31	1,150	14	663	11	588

3. 実施内容

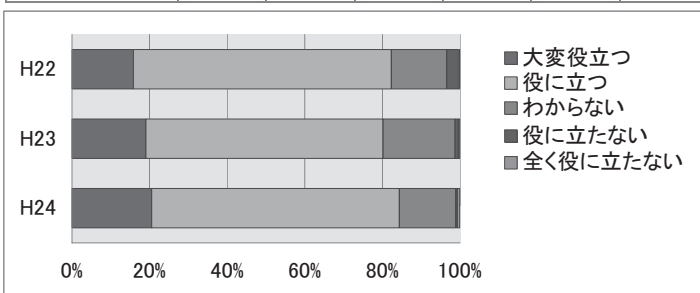
(1) 講義内容に対する満足度

	平成24年度		平成23年度		平成22年度	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
大変満足	157	17.6%	180	15.9%	135	13.8%
満足	515	57.8%	656	57.9%	591	60.4%
普通	201	22.6%	287	25.3%	243	24.8%
不満	12	1.3%	5	0.4%	7	0.7%
大変不満	6	0.7%	5	0.4%	3	0.3%
合計	891	100.0%	1,133	100.0%	979	100.0%



(2) 今後の大学生活に役立つか

	平成24年度		平成23年度		平成22年度	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
大変役立つ	168	18.9%	216	19.1%	155	15.8%
役に立つ	563	63.2%	692	61.1%	650	66.5%
わからない	145	16.3%	210	18.6%	140	14.3%
役に立たない	9	1.0%	9	0.8%	30	3.1%
全く役に立たない	6	0.7%	5	0.4%	3	0.3%
合計	891	100.0%	1,132	100.0%	978	100.0%



(2) 加藤 かおり (教育・学生支援機構〈大学教育機能開発センター〉)

「初年次教育の全国動向と意義」

≪PPT≫

平成24年度全学FD
平成25年3月13日
総合教育研究棟B254

1

話題提供

初年次教育の 全国動向と意義

加藤かおり
(教育・学生支援機構・大教センター)

本話題提供の目的

2

本日の主題である「初年次教育」について、

- ◆確認する
 - ・一般的な意味・意義
 - ・日本における導入の経緯など
- ◆情報提供する
 - ・全国動向
 - ・今後の課題

初年次教育とは？

3

中教審答申(2008)「学士課程教育の構築に向けて」

- 高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。
- 高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので、1970年代にアメリカで始められ、国際的には「First Year Experience(初年次体験)」と呼ばれている。
- 具体的内容としては、(大学における学習スキルも含めた)学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている。

キーワード

4

- ◆高等学校から大学への円滑な移行
- ◆大学の教育を“成功”させるための、
主として新入生対象の総合的教育プログラム
- ◆大学における教育上の目標と学生の個人的目標
の両者の実現(動機づけの調整)
例)学問的・知的能力の発達
人間関係
キャリア・人生設計

注 リメディアル教育は本来含まれない

なぜ「初年次」が重要なのか？

5

- ◆学生自身の「大学生」という新たな出発への希望や期待がある。
→「新しい自分」=新しいものの受け入れに柔軟な時期
- ◆学習の成果には、学習者の
 - ①学習の捉え方、②理解内容のレベル
 - ③学習の進め方が強く影響する。→最初の段階で、大学が求める①～③について認識させることが効果的。

日本での導入の背景

6

- ◆大学進学のマス化、ユニバーサル化
→学生の学力(学習力含む)、意識・意欲の低下
- ◆「大学教育」の多様化、社会的役割の変化
- ◆大学の経営・運営努力→中退・留年の予防
- ◆アメリカの学士課程教育における
First Year Experience(FYE)の紹介
→80年代から始まり、ハーバードでも実施。
大学における様々な「経験」からの学びを含む
大学教育という捉え方

導入の経過

7

- ◆当初は他に、導入教育とも呼ばれていたが、現在は初年次教育の一環として位置づけ。
(濱名2007)
- ◆2001年の調査(山田2010)では・・・
2001年時点で、80%を超える学部で実施。
ただし、
リメディアル教育を含んでいたり、
初年次教育の意味や位置づけが曖昧だった。
↓
その後、実施率、内容ともに発展・・・
2008年 初年次教育学会も創設

初年次教育の実施率

8

(%)

	人文系	社会系	理系	その他	計
2001年	76.1	84.9	86.7	73.2	80.9
2007年	96.7	96.3	98.0	96.2	97.0

(山田 2010)

実施の傾向

9

(2009年河合塾調査)

- 国立大学と私立大学の比較では、私大の方が熱心な傾向にある。
- 大学の難易度では、低難易度の大学ほど熱心な傾向にある。
- 学生の態度変容を促す取り組みや、自立化を促す取り組みが増えている。

内容の共通要素

10

1 レポート・論文の書き方など文章作法

2 コンピュータを用いた情報処理等基礎技術

↑3 自立した自己学習の基礎

4 図書館の利用・文献検索の方法

↑5 学生生活での時間管理や学習習慣の確立

6 論理的思考力や問題発見・解決能力

他 学問への動機づけ、プレゼンスキル、受講姿勢

実施方法

11

- ◆本学では、各学科・学部「スタディ・スキルズ」「キャリア意識形成科目」など
- ◆他大学では、
基礎ゼミ・教養ゼミ(教養内容、ゼミ形式)
ウェルカム・パーティ、大学生活相談所

初年次教育の効果を発展させる ツール、取り組みのヒント

12

- ・学生が学習を「振り返って(客観視して)」、「プロセス」の成果を可視化(評価)するツールを用いる。
例)学習ポートフォリオ、本学のNBAS
- ・学生の「振り返り」を促し、学習の目標設定や計画づくりを支援する人材配置や集団づくり
例)アドバイザー教員、先輩・ピア
協同学習グループ

初年次教育の主な課題

13

1. 主専攻プログラムでの課題

- ①学士課程プログラムとしての位置づけ
→学生の経験の多様性に対応する柔軟性や、4年間にわたる継続性への配慮も必要
- ②学習の目標や方法、評価の一貫性
- ③教授方法・スキル
→深い学習、アクティブラーニングなど

2. 高等教育(制度)としての課題

14

- ①中等・高等教育との連続性
(学校教育・公教育としての一貫性)
→K16などの検討(中教審)
- ②初年次教育の内容の高等教育レベルとしての妥当性
→「接続的」なレベルの必要性?

参考文献

15

- ・山田礼子(2010)、「初年次教育の現状と展望」,大学教育学会30周年記念誌編集会『大学教育研究と改革の30年』,東信堂, pp29-48.
- ・濱名篤(2007)、「日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果-初年次教育・導入教育・リメディアル教育・キャリア教育-」大学教育学会編『大学教育学会誌』第29巻第1号, pp36-41.
- ・川嶋太津夫(2006)、「初年次教育とは何か」, 濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育: 歴史・理論・実践と世界の動向』,丸善, p3.

4) 参加の感想

中東雅樹准教授

大学学習法は、初年次教育の一環として位置付けていることが多いが、教育学部や経営学科の事例においても、半年という期間で学生が修得できる内容には限界があることは共通していたように思う。今回の事例報告を総括した私見でも述べたように、大学学習法を1年次の導入授業としての位置付けではなく、卒業論文に至るまでの大学学習法を修得するプロセスとして考えることが必要で、全学的に教養科目の一つとして大学学習法を体系的に構成していく方向性も考えられるように思われる。

また、大学学習法の講義の進め方については、教育学部や経営学科の事例で共通していることとして、学生からの提出物にフィードバックすることは、学習効果を高めるためには必要不可欠であることを改めて認識できた。

ただし、コース単位で実施している教育学部の事例と比較してみると、経営学科は大学学習法の実施単位（学科単位）が大きいため、実施できる内容や運営方法の選択肢が限定されてしまうと感じた。また、実施単位が大きくなると多くの担当教員を必要で、さらに受講生全員に共通した授業を実施するためには、担当教員間で大学学習法の意義や価値観が共有できている必要があることも痛感している。

中村和吉准教授

パネルディスカッションでもあがっていましたが、初年次教育の大切さは1年次学生を「その気にさせる」ところから始まります。しかし、当事者である1年生たちからすると、「その気になって歩み出す＝他の選択肢を狭める」と解釈して足がすくんでしまう学生もおります。この躊躇を3年次以降にまで引きずると、深くも広くもできずに結局は卒業時に不本意な進路選択へと連鎖していきます。新入生には毎年のように「早く目覚めなさい」と伝えていますが、なかなか声が届かず歯がゆい思いをしています。一方、教員側は「初年次教育の充実＝新たな負担増」というとらえ方で見ると傾向が高く、今度は何をさせられるのか、と警戒感をあらわにする教員もおります。事実、教員個人評価には全く関わらない領域ですから無理もないのです。両者についてどのように折り合えばいいか、まだ着地点がわからずに模索しているところです。

西條秀俊准教授

先生方の取組報告や事例報告をお聞きし、その志や創意工夫のすばらしさに感銘を受けました。いつも参加して感じるのですが、もっと多くの教員で共有する場がないもので

しょうか。各種の会議等で継続的に半強制的にでも聞いていただくことで効果が広がるのではないかと思います。感想としては、各先生方の発表内容は素晴らしい取り組みが多く、学内において広く共有できていないことに対して、もったいないの一言です。

加藤かおり准教授

2つの初年次教育改善の取り組み事例の紹介は、それぞれのコースでの取り組みではあるものの、コースや学科、学部をこえ少なくとも同じ人文社会学系の分野で共有可能な要素がみられた。特に、分野にかかわらず本学に入学したての初年次の学生に共通する「大学における学習」への転換の問題、具体的に学習目標の立て方、学習の進め方、学習について振り返っての課題の見つけ方などの学習についての認知や汎用的スキルの獲得をいかにして促進するかについて、共有できる知見がみられたことはとても有意義であった。

さらに、経営学科の中東先生のご意見にもあったように、どうやって学習を進めるかは、どのようにして研究的な学習に発展させるかとつながっているという点で、今回の初年次教育の課題は、4年間の学士課程教育を通しての課題でもあることが明らかになった。同時に、分野ごとの研究方法（アプローチ）に着目すると、例えば統計的な分析手法やフィールド調査方法、文献調査方法などのように学科をこえて同じ人文社会学系の調査研究の基礎スキルとなるようなアカデミックスキルの抽出と共有の可能性が見えてきた。このことは、「主題」のみならず「コンピテンス(能力)」が重視される21世紀の大学教育の観点からも意義深い。

今回のシンポジウムで得られた知見をもとに、各コースや学科が共有可能なテキストづくりやプログラムづくりなどの活動をサポートしていきたい。

あとがき

『学習教育研究』第1号を上梓し、平成24年度学習教育研究フォーラムでの講演・発表・論議とともに、『大学教育研究年報』(1号平成7年～16号平成22年)の廃刊によって公表されないままになっていた、平成23年度及び平成24年度学長教育賞受賞者の教育改善に関する論文を収録することができたことは大変喜ばしいことです。

新潟大学における教育改善の努力は、21世紀型高等教育モデルを模索した20世紀末以降の国内外の教育改革動向や、激動する情報化社会の中で育ち多様化する学生の変容を鋭い嗅覚で捉え対応することで培われ蓄積されてきました。本号に収録されている教育改善の成果とそこから得られた知見には、今日当然視されるようになった21世紀型大学教育、「教育者中心から学習者中心へのパラダイム」への転換が認められる内容があり、何らかの形で大学教育関係者に参考になるからです。

ここに収められている専門教育や初年次教育に関する授業改善の試みや工夫、教育観は、文系から理系に及ぶさまざまな分野の授業担当者のものであるとはいえ、ここからは21世紀型大学教員像、大学教育の専門家ともいえるモデルが醸成されつつあるように思えます。大学教育の専門家とは、大学教育学に関する専門的な教育を経ることではなく、以下のような大学教育にかかわる経験的学習を自律的に継続することで専門性を形成する人々ではないか、と思われるのです。つまり、自分の研究分野での専門性を磨きながら、第一に学生の学習の在り方や問題状況を捉えることに関心を持ち続ける。第二に、それに対してどのような授業デザインをすれば学生に主体的な学習を成立させられるか、に関心を持続させる。第三に、これまでに確立された授業スタイルを維持するのではなく、授業のあり方を学生の学習効果で検証しながら継続的に授業改善することを当然視する、といった特徴が共通に身につけられてきているように思います。

21世紀型大学教育は、学校教育分野で培われてきた教育方略から学ぶことが多いと言われ、実際にノウハウをここから得ています。学校教育分野では1980年代までは教師イコール「教えることの専門家」というモデルがめざされてきましたが、1990年代以降は反省的実践家、つまり「経験から学ぶことの専門家」というモデルが中核に据えられるようになっていきます。米国をはじめ国際的に注目された、日本に伝統的な「授業研究」とそれを相互に学びあう「校内研修」は現在このモデルで継承発展され、学校文化を転換させつつあるようです。

新潟大学では、教育改善を奨励支援する努力のもとで、21世紀型大学教育を担う「経験から学ぶことの専門家」が着実に生まれ大学教員文化を変化させつつあることに期待が持てます。それは毎年度末の相互に学べる「学習教育研究フォーラム」で示されるようになってきたと言えるのではないのでしょうか。ただし、パネルディスカッションで指摘されたように、参加人数が低く、大学教育の専門家を育てるための「学ぶ共同体」を構築する上の大きな障害になっています。第2号以降、学習教育研究フォーラムの参加者が増加したという変化を記載できるようになることを祈念します。

津田純子（大学教育機能開発センター）

新潟大学教育・学生支援機構

大学教育機能開発センター

センター長 森 井 俊 廣

教 授 津 田 純 子

准 教 授 加 藤 かおり

特 任 助 教 清 水 晃

学習教育研究 第1号

新潟大学教育・学生支援機構


平成25年10月

発行 新潟大学学務部教務課

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050番地

Tel/Fax 025-262-6308 / 025-262-6304

E-Mail g-gakumu@adm.niigata-u.ac.jp



Niigata University
Studies of Learning and Teaching
Vol.1